F35
H45

始

377-25
F33
H456

帝國圖書館藏

佐藤緋文字

清譯

發行所寶文館

大正
7 2 8
寄贈

基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

それ以上一言も口にはせじ
森の中にすべるが如く引き退いた

はしがき

サッカレー、ディケンス、ジョルヂ・エリオットの三人に、『緋文字』の作者、ナタチール・ホーソンを加へて、是を英語を以て書いた近代の四大小説家とすることは、強ち、不當な併稱ではなからうと思ふ。本邦に於ては、サッカレー、ディケンスの名は耳に熟してゐるが、獨りホーソンの大は多く認められてゐない。且つ心靈の深みを取扱うた彼れの作は、時に晦澁で、是を邦文に移すこと稍々困難である。わたしには荷が勝ち過ぎた此譯が、讀者の滿足を買ひ得ないことはよく〳〵知つてゐるけれども、十九世紀のジョン・バンヤンなる彼れの面影だけでも、是に依て多少傳へられるなら、幸ひである。此譯を仕上げるまでに、內外の友人諸君からうけた多大の助力は、わたしの忘れてはならないことである。若し其等の友人諸君の助力が無かつたら、此譯が、わたしの手で、是だけまでにも仕上げることが出來なかつたらうから。それに

目次

	頁
一、牢獄	一
二、いちば	五
三、めぐりあひ	二五
四、語りあひ	四四
五、ヘスタの針仕事	六〇
六、バール	八一
七、知事の廣間	一〇三
八、鬼ッ子と牧師	一一八
九、醫者	一三八
十、醫者と患者	一五八
十一、心の中	一八〇

しても、わたしの此譯が尙多くのスリップのあることを恐れてゐる。是は讀者の親切なる助言に依て、更に訂正の機會を得たいと思つてゐる。

大正六年二月一日

四年住みなれし摩耶の麓に別れを惜みつゝ

譯述者

十二、牧師の徹夜……一九五
十三、ヘスタの他の一面……二一九
十四、ヘスタと醫者……二三七
十五、ヘスタとパール……二五三
十六、森の散歩……二六八
十七、牧師とヘスタ……二八二
十八、滿目の日光……三〇六
十九、河邊のパール……三二〇
二十、迷路に立てる牧師……三三七
廿一、新英洲の祝日……三六〇
廿二、行列……三七九
廿三、緋文字の暴露……四〇一
廿四、をはり……四二〇

全譯

緋文字

ホーソン原作

佐藤清譯

一　牢獄

くすんだ色の着物を着け、灰色の高帽子を被つた髯の生えた男だちの一むれが、或ものは頭巾を着けたり、或ものは何もかぶらなかつたりしてゐた女どもと入りまじつて、木造の大きい建物の前に集つてゐた。その建物の戸は、重く樫で出來てゐて、鐵の大釘が一杯に擊たれてゐた。

新い植民地の建設者らが初人間の德義と幸福との如何なる理想境を工夫したにし

ても、處女地の一部分をば墓地として割りあて、も一つの部分をば監獄の敷地として割りあてるといふことは、一番早い實際必要なものゝうちにいつも認めた。此規則に隨つて、ボストンの先祖らが、アイザク・ジョンソンの地區、及びその後キングス・チャペルの古い墓地の群集したすべての墓の中心となつた、アイザク・ジョンソンの墓のぐるりの最初の墓地を選定すると殆ど時を失はずに、コーンヒルの地方のどこかに最初の監獄を建てたといふことを、われ〳〵は確かに推定することが出來やう。確かに、此都會の植民後、ものゝ十五年乃至二十年も過ぎた時には、此木造の監獄は、既に、風雨にうたれた汚點や他の時代がかつた模樣などのしるしが着けられてゐたので、それがいよ〳〵黑い樣子を其突出た陰鬱な正面に與へた。樫製の戸の極めて重い金具の上の錆は、新世界中の他のどんなものよりも古いものゝやうに思はれた。罪惡に關係あるものゝやうに、是も決して若々しい時期を知つてはゐなかつたやうに思はれた。此醜惡な大きい建物の前に、またそれと街道の車道との間には、草地があつて、

牛蒡やら、一年草やら、アブルベルーやら、いろんな醜草が夥しくはびこつてゐたが、かういつた雜草は、かくも古き昔に、監獄なる、文明社會の黑い花をつけた土地のうちに、何か自分と同性のものを明かに見出したのだ。しかし入口の一方、殆ど閾のところに根をつけて、茨藪があつた。それが此六月にいみじき寶玉を纏うてゐた。囚人がこゝにはいる時、また宣告をうけた罪囚が刑をうけるために出て來る時、自然は眞心から彼を憐む心があり、また彼に對して親切である表象として、其香氣と、いみじき美しさとを呈するのだと想像される。

此茨藪は不思議にも偶然に歷史のうちに今猶生き殘つてゐる。しかし此茨藪は初それを暗く蔽うてゐた巨大な松や樫が破摧した後久しく、嚴しい古い曠野より獨生き殘つてをつたのか、或は信ずべき立派な典據はあるが、聖徒の數に入れられたアン・ハチンソンが此監獄の門を入つた時に、彼女の足痕に萠え出でたのか、われ〳〵は決定しないであらう。われ〳〵は丁度われ〳〵の物語の閾のところで是を見出したので、

（われ〳〵の物語は今あの不吉な入口から起らうとしてゐる）われ〳〵は此花の一つを摘みとりて、是を讀者に呈するより外はなからう。願くはそれが人生の道に沿うて見出される、或美しい道義の花の象徴となるか、或は人間の弱みと悲みとの物語の暗くなりゆく結末を和めるものともならんことを。」

二　いちば

丁度二世紀前の或夏の朝のこと、なか〳〵大勢のボストンの住民が、監獄通の監獄の前の草地に群集してゐた。彼等は皆鐵の大釘の打つてある樫の戸の方をじつと凝視してゐた。他のどんな人民の中でも、或は新英洲の歴史の後期に於ても、此良民らの髯のある人相を石のやうに硬くした、物凄い峻嚴な面色は、何か恐いことが行はれてゐる前徴でもあつたらう。それは正しく或有名な罪人の皆人が思ひ設けてゐた處刑の表兆でもあつたらう。此場合罪人に對する法廷の判決は公衆の感情の判斷を確にしたものなのだ。しかしあの清教徒の性質の昔の峻烈さから考へると、此種の推定はさう確かにくだされない。それはなまけもの丶奴隷か、或は兩親が官憲の手に渡しておいた不孝な子供が、ホウィピング・ポスト（人を鞭つ時しばる柱）でごらしめをうけるのであつたかも知れない。それはアンチノミア派の僧侶、クェーカア教徒、或は他の異端宗のもの

が、鞭たれて都會から追出される所であつたか、或は白人の火酒を飲んで街道で大騒ぎをやつた、仕事もない浮浪人の印度人が、鞭たれて、森の暗の中に追ひこまれる所であつたのかも知れない。また奉行の性惡の未亡人ヒゞンス夫人のやうな魔女が、斷頭臺の上で死ぬ所であつたのかも知れない。いづれにしても、見物人の嚴肅な態度は少しも變らなかつた。その態度は宗教と法律が殆ど彼等の間にありては同一のものであり、彼等の性質のうちに二つのものが全く渾融してゐて、刑律の一番やさしいものでも、峻烈なものでも、一樣に敬すべく恐るべきものとなつた人々にふさはしい態度であつた。實に犯罪人が絞首臺の上でかういつた傍觀者から期待し得べき同情は貧弱且冷淡であつた。是に反して、われ〳〵の時代に於て、多少嘲弄となる不名譽や物笑ひとなるくらゐの罪も、當時は死刑と殆ど同じ程の峻烈な威嚴をそなへてゐた。」

われ〳〵の物語が始まる其夏の朝に、一つ注意すべき事柄は、群衆の中の數人の女だちが、どんな刑が行はれるにしても、その刑に特別な興味をもつてゐるらしかつた

the wearers of petticoat and farthingale 婦人の女を指す

といふことであつた。其時代は優雅の風に乏しかつたので、不作法といふやうな觀念が、下袴や箍袴をつけてゐた人だちを、公衆の中に歩き出て行くことをひきとゞめ、塲合に依りては、刑の執行中に絞首臺の一番近い群れの中に、その極めて肥大な身體を割りこんで行くことをひきとゞめることは無かつたのである。物質の上から言つても、精神の上から言つても、昔の英吉利生れ英吉利育ちのあの妻女や娘だちのなかには、六代乃至七代後の彼等の子孫なる女性よりも、もつと下卑た性質があつたといふのは、その六七代といふ年月の間に、各時代の母親が、より微かな色香、より優しい短い美、より弱い體格を子供に傳へたからである。自分らの性格よりも力と堅さの少ない性格を傳へはしなかつたにしても。監獄の戸のあたりに立つてゐた女だちは、男性のやうなエリザベスが、女性の、全然不適當でない代表者として立つてゐた時代を去る、半世紀も過ぎぬ時にゐたのだ。彼等はエリザベスと同國人であつた。そして彼等の本國の牛肉と麥酒が彼等の身體を大いに造りあげたのだ。牛肉や麥酒よりも一

寸もよく精練されてない道徳上の食物と一緒に。それ故輝く朝の太陽が、廣い肩、よく發育した胸、圓い赤みばしつた頰に照りかゞやいたのだ。それはあの遠い島國で成熟しきつて、殆どまだ新英洲の空氣の中でも、蒼くも、痩せもしてゐなかつたのだ。かつまた此主婦だちの中には、その話が意味の點から言つても、音量の點から言つても、大概は現代のわれ〳〵を吃驚させるやうな、大膽と朗々たる所とがあつた。」

『皆さん』と五十程の樫貪らしい顔付の老媼が言つた。『わたしは皆さんにわたしの思うてゐることを存分申上げませう。わたしだち、成熟した年頃になつた、評判のよい教會員が、此へスタ・プリンヌのやうな罪人を處分したなら、大いに公衆のためになるでせう。皆さん、あなたがたはどうお考へなさいます。若しあのお轉婆が今こゝに一緒になつてゐるわたしだち五人の前に裁判をうけに立つたなら、あの立派な奉行方が定めたやうな判決で濟むでせうか。ほんとにわたしはさうは思ひません！』

『あの女の牧師で、信心深いデムスデール師はかういふ不仕末が偶々御自分の教會に

起つたことをひどく歎いてをられるさうですよ。』と他のものが言つた。

『御奉行方は神を恐れる方々だが、あんまり憐みの心が深過ぎる、——それはほんとだ。』と三番目の初老に近い中年の老媼が附加へて言つた。『せめてはヘスタ・プリンヌの額の上に赤鐵の烙印を印さなくてはならないのだ。ヘスタさんはあれを印されでもしたら、たしかに逡巡したでせう。けれどあの女は——あのいたづら女は——自分の上衣の胸衣の上に何を着けられたつて、何とも思ひはしないでせう！まあ、ようくお聞き下さいよ、あの女はそれを襟留か異教徒の裝飾のやうなものでもつて隠して、いつもと同じやうに威張つて街道を歩くでせう！』

『あゝ、けれど』と子供の手を執つてゐたひとりの細君がやさしく口を挿んだ。『ゑるしを隠すなら勝手に隠させたがようございますよ、苦みはいつも心の中にあるでせうから。』

『ゑるしや烙印の事なんかで何を語つてゐるんですよ、上衣の胸衣の上にあらうが、

額の肉の上にあらうが』と自稱判官等のうちで一番無慈悲で一番醜いもひとりの女が叫んだ。『此女はわたしだちにみんな耻をかゝせたのだから、死ぬのが當然ですわ。是に相當する法律は無いんですか。なにほんとうに聖書にも法典にもあるんです。それぢやそれを無効にした奉行方は、若し御自分だちの奥さんや娘さんなどが間違でもしたら、それは自業自得といふものです！』

『お情無や、皆さん！』と群衆のなかの或男が叫んだ。『絞首臺の健全な恐怖から起るもの以外には、女の中には何の德もないのか。それは矢張り一番ひどい言葉だ！おしやべりさん方、まあ靜かになさい、錠が牢の戸のところで廻つてマダム・ブリンヌが出て來る所ですぜ。』

牢屋の戸が内から押あけられると、先づ第一に、日光の中に黑い影が現はれたやうに、劍を腰にし、官棒を手にした獰猛兇惡な樣子をした敎區吏があらはれた。此人物は清敎徒の法典の恐い苛酷全部を其樣子で豫表し表示した。此法典をば罪人に最後に

最も峻嚴に適用することが此人物の仕事であつた。彼は左手に官棒をつき延べながら、右手を若い女の肩の上に置いた。彼はかういふ風にしてヘスタを前へ押出した。どうとう女は牢屋の戸の閾の上で、生れながらの威嚴と性格の力を帶びた行爲を以て、彼れを却け、宛も自分の自由意志に依るもの丶如く、戸外へ歩を運んだ。女は三ヶ月程の赤ん坊を抱いてゐた。赤ん坊はまばたきをして、餘りにぴか〳〵し過る日光からその小さい顏をそむけた。何故かといへば此赤ん坊は今日まで土牢の薄明か、或は此監獄の他の暗い部屋だけに親しむやうな生活をしてゐたのだから。

此若い女――此子の母親が――群衆の前に充分顯然に立つた時、緊く赤ん坊を胸に抱きしめることが最初の衝動であつたやうに思はれた。それは母親の愛の衝動によるのではなくして、是に依て、着物に縫ひこまれた、それでなければ結びこまれた或玄るしを隱すためであつた。しかし、直ちに、この女は自分の一方の耻の玄るしが別の方の耻（赤ん坊）を隱す役には殆ど立たぬことを賢しくも判斷したので、赤ん坊を抱

きあげて、燃えるやうに赤うはなつたが、しかも高慢な微笑を浮べ、眼は耻ぢる色もなく、市民と近處の人々を見渡した。外衣の胸の上には、立派な赤い布片で、金絲の精巧な刺繍と、奇異なかざり模様で取りまかれて、Aといふ文字が見えた。それは非常に美術的に造られ、又空想の甚しき豐さと絢爛たる夥しさもて作られたので、この女の着た着物に無上のふさはしい裝飾の見榮えは殘りなくあつた。そして其着物はその時代の趣味に隨つて燦爛たるものであつたが、植民地の奢侈禁止法の承認を越ゆること甚しかつた。

此若い女は背が高くて、すがたは點のうち所もない優雅を極めてゐた。髪は黑く房房として、光澤があり、きら〳〵と日光を照りかへした。そして顏は輪廓の正しいこと、容色の美しさのために美しいのであるばかりでなく、濃い眉と、深い黑い眼に特有な、人に與へる强い印象力があつたのである。その時代の淑女社會の風に隨つて淑女らしくもあつた。當時は今日淑女社會の表象として認められる、纖細な、果敢

ない、筆紙に盡しがたい優美よりも、むしろ幾らかの威嚴に依て其特色が示されたのである。そしてヘスタ・プリンヌが牢獄から出た此時よりも、昔の言葉の意味で、淑女らしく思はれた時は決して無かつたのである。以前ヘスタを知つてゐた人々は、彼女が災難の雲のために暗くされ、光をなくされてゐたのを見ることゝ思つてゐたのに彼女の美が光り輝き、包まれてゐた不幸と耻辱から、後光を作つたことを見て、不思議と思ひ、びつくりさへしたのである。敏感な觀察者の目には、そのうちに何か極めて痛ましいものがあつたのは、ほんとかも知れない。實に、此特別な時を用ひて獄中で作り上げ、自分の空想のまゝにこしらへあげた彼女の着物は、その奔放な繪畫的の特性に依て、彼女の精神の態度、即ち、彼女のやけくその氣分を表白してゐたやうに思はれたが、すべての人々の眼を引つけて、謂はゞ、その着物を纏うてゐた人の容貌を改へた所の點は（容貌が變つたので、ヘスタ・プリンヌと親しい知合であつた男女等は、今や宛も初めて此女を見たかの如き感銘をうけたのだが）甚だ奇異に刺繍が施さ

れて、胸の上に輝いてゐたあの緋文字であつた。

それは呪法のきゝめがあつて、ヘスタをば人間との普通の關係から引離して、獨りぽつちに圓い輪の中に閉籠めた。

『お針が上手なことは確かだけれど』と女の見物人のひとりが言つた。『此耻知らずのお轉婆ものより前に、こんな仕方を工夫してそれを示したものがござんしたか。まあ、皆さん、あれは立派な御奉行方の前で嘲笑ひ、あの尊い方々が刑罰のつもりでなさることを、見せびらかす種にするのでなくて何でせう。』

『若しヘスタさんの立派な上衣をあの美しい肩から剝ぎ取つたらよからう。』と老女のうちの一番冷酷なのが呟いた。『そして隨分念をいれて縫つた赤い文字のことなら、あれよりももつとふさはしいのを作るために、わたしのリューマチの時のフランネルの繼縷をやりませう。』

『おゝ、みなさん、お默りなさい、――お默りなさい！』と一番若い連れが囁いた。

『あの人に聞えないやうになさい！あの刺繍の文字の一歩針だつて、あの人の胸にこたへないのがないんです。』

恐しい敎區吏が此時棒を打振つた。

『通せ、みんな、――通せ、やい！』と敎區吏が叫んだ。『道をあけい。すりあ、實際のこと、今から午後一時まで、男女、子供が、ミセス・ヘスタの立派な着物をよく見ることの出來る處にミセス・ヘスタを置いてやる。不義が日當りに引ずり出される正義のマサチュセッツ州植民地におん惠あれ！さあ來い、マダム・ヘスタ、そして市場にお前の緋文字を見せい！』

直ちに小道が見物人のむれの間に開かれた。敎區吏が先きに立ち、にがい顏をした男どもや、意地わるい顏をした女だちの不規則な行列をおともにして、ヘスタ・プリンヌは刑罰のために定められた場所の方へ出掛けた。熱心で物珍しがりの學校生徒の一むれは、それが半ごんを彼等に與へたといふこと以外には、進行中の事件は少しも

わからないで、ヘスタの進んで行く前に驅け出して行つて、絶えず頭を向けてはヘスタの顔をじつと見つめたり、抱かれてゐた赤ん坊がまばたきするのを見つめたり、胸の上の汚らはしい文字を見つめたりした。當時監獄の門から市場までは距離が極めて近かつた。しかしこの囚人の經驗でその距離を量ると、かなり長い路程に勘定されたかも知れない。此女の擧動は高慢ではあつたが、人々が皆蹴飛ばして踏みにじるために、自分の心臟が街道に投げ出されたかの如く、彼女は見物に群がつて來た人々の一歩一歩から苦惱を感受したであらうから。しかしわれ〳〵の本性のうちには不思議でまた慈悲深い一つの規定がある、何かと言へば、苦めるものは自分の堪へ忍んでゐる苦みの強さをば、現在の責苦に依て知ることは決して無い。おもにその後に腫み爛れる苦惱に依て知るといふことである。それ故ヘスタ・プリンヌは平穩な振舞で自分の責苦の此部分を通過して、市場の西端にある一種の絞首臺に來た。それはボストンの一番早い敎會の檐の殆ど下に立つてゐて、そこに据付けられたものゝやうであつた。

實に此絞首臺は刑具の一部分を構成した。さういふ刑具は二三代この方われ〳〵の間では單に歷史的傳說的のものとなつたが、昔は、佛蘭西の兇暴政治家の間のギロチンにも劣らぬ程、善良なる市民の資格を助長するには、有効な働きをするものと考へられた。約言すれば、それは頭手架の臺であつた。そして其上にはすつぽりと人間の頭をはめこんで、そのまゝそれを公衆の眼に曝すやうに造られた。あの懲罰道具のからくりが立つてゐた。耻辱の極致こそ實現表白されて此の木と鐵で出來た仕掛となつたのである。耻辱のために顏を蔽ふことを罪人に禁ずるよりもつと怪しからぬ暴行は決してあり得ない、――その個人の落度はよしいかなるものであるにしても――是よりももつとわれ〳〵の人間性に對する暴行はあり得ないとわたしには思はれる。たとへばさういふことをするのが此刑罰の本質であつた。しかしヘスタ・プリンヌの場合に於ては、いくたびとなく他の場合に於けるが如く、その宣告の示す所は、いくらかの時間、臺の上に立つべしといふので、頸を攝み、頭をしめることを兎角やりたがる

のが此いやらしい刑具の一番惡道な特色であつたが、さういふことにはあはないで濟むのであつた。彼女は自分の本分をよく知つてゐたので、木の登り段を登つて、街道の上から人の肩の高さぐらゐのところで、斯樣にして周圍の群衆に曝された。

若し此清教徒の群れのうちに一羅馬教徒がをつたなら、服裝と言ひ、容姿といひ、繪のやうに美しい此女が、赤ん坊を抱いてゐたので、多くの著名な畫家が互に表はさうと競ひ合うた聖母の像を思出させたものを、そのうちに見たであらう。聖母の赤ん坊は世界を贖ふべきであつたが、その似た所だけを引あはせて見れば、あの罪無き母の聖像を思出させた何物かをそのうちに見たであらう。この女の方では、人生の最も聖なるものゝうちに、最も深い罪のけがれがあり、此女の美のために世界はいよ〳〵暗きを加へ、此女の抱いた赤ん坊のために、世界は愈々神に棄てられたといふやうな効果を生じた。

或同胞をば罪と恥辱との見世物にするのを社會が戰慄せず却てそれを笑ふ程に腐敗

してしまふには、それより前に、さういふ見世物にいつも衣せなくてはならないやうな畏懼の混合があるものだが、この時もそれがないわけではなかつた。ヘスタ・プリンヌの恥を見てゐた人々はまだ素朴を失つてはゐなかつたのである。彼等はよしそれが死刑の宣告であつたにしても、その峻烈さに對して何等つぶやく所無く、この女の死を見る程嚴酷な人々ではあつたが、現在のやうな見世物なら、それを冗談の題目にするより外には能のない、他の社會の無情はちつともなかつたのだ。よし是を嘲弄にかへようといふ意向があつたにしても、皆、禮拜堂のバルコニィに立つたり坐つたりして、臺を見おろしてゐた知事、四五人の參議官、判事、將軍、及び町の牧師等のやうな、威嚴ある人々の鹿爪らしい臨席に依て禁止威壓されたに違ひない。斯る貴顯の人人が位階職掌の威嚴若くは威風を危うせずして、此見世物の一部をなした時代にありては、刑罰が眞面目な有効な意味があつた。確かに推定することが出來よう。それで群衆は陰氣で嚴肅であつた。此不幸な罪人は、皆自分の方を見つめ、

自分の胸に目をそゝいでゐた、多數の無情な人々の眼の重荷の下にありて、女の力のあらん限りを振うて身を支えた。是は殆ど堪へられない所であつた。感情に激し易い性質なので、ヘスタはいろんな侮蔑を表白する人々の侮辱の針と毒刺とを受けるために身をとゝのへてはゐたが、そこにゐた人々の心の嚴肅な氣分のうちには、それよりも恐るべきものがあつたので、むしろヘスタはそこにゐた人々の堅い容貌が皆嘲笑のためにゆがみ、自分がその嘲笑の的になるのを見たいと思つた程であつた。若し大笑ひが群衆から爆發したなら（男といふ男、女といふ女、金切聲の子供といふ子供が皆自分自分の分前を寄與して）ヘスタ・プリンヌは是に報いるに苦笑と嘘笑とを以てしたであらう。しかし彼女が耐ふべき運命であつた其重い刑罰の下にありては、ずつと、宛も自分がどうしても肺臓のあらん限りの力を振つて叫び出して、絞首臺から地上に身を投げるか、さもなくば直きに氣ちがひにならなくてはならぬやうな氣がした。

さかし彼女が最も著しい目的物になつてゐたその場の全景が、自分の眼から消え

失せてしまふやうに思はれる、少くとも、それが不完全な形をした幽靈の像の塊のやうに、眼前にぼんやりとちら〳〵する間があつた。彼女の心、特に彼女の記憶が異常な働きをして、彼女に示したものは、此西部の曠野の端にある小都會の此粗雜に切られた街道よりも別の光景、高帽の緣の下から、自分に向つてにがい顏をしてゐるよりも他の人々の顏であつた。最もつまらない思ひ出、幼年及び學校生徒時代の事柄、遊戯、子供らしい喧嘩、及び少女時代の小さい家庭の風習などが、其後の生活に於て最も重大な事柄の思ひ出と入り組んで彼女に群がつて戻つて來た。繪はめい〳〵お互ひにかくきりと鮮かであつた。丁度それが皆同じ程緊要なものであるかのやうでもあつたし、或は皆一樣に芝居のやうでもあつた。大方それは是等の幻像の展開に依て、現實の殘忍な重みと峻嚴さからゆとりを得ようとする彼女の精神の本能的な工夫であつたらう。

兎に角此頭手架の絞首臺は、幸福な幼年時代このかた歩いて來た路全體をヘスタ・

ブリンヌに示した一見地であつた。かの悽慘な高みに立つて、ヘスタは再び古英國の故郷と親の家とを見た。貧い樣子はしてゐるが、昔の身分あるものゝ表象として、門の上に半ば磨滅せる楯形の紋地をのこしてゐる、灰色の石の壞れた家を見た。額は禿げ、古風なエリザベス時代の襞領の上に垂れ下がつた立派な白髮の父の顏を見た。それから母の顏も見た。母の顏を記憶のうちで見る時には、いつもあの注意深い心配の愛に滿ちた顏付をしてゐて、母が死んでからでさへも、その顏付は娘の行く道に屢々やさしい忠告といふ邪魔物をおいてゐたのである。それから自分の顏を見た。その顏は處女の美にひかり、いつも自分が見てゐた暗い鏡の中までもあかるくしたのである。それからもひとりの人の顏を見た。その人は大いに年長けて、色は蒼ざめ、痩せて、學者らしい容貌をしてゐた。澤山の大部な書物に讀み耽るために用ひられたランプの光のために眼は曇り且爛れてゐた。しかし此爛れた一双の眼は、この眼の所有者の目的が人間の靈魂を讀むにあつた時には、不思議な炯々たる力があつた。ヘスタ・プ

リンヌが必ず思ひ出したやうに、書齋と僧舍との人なる此人の姿は、少し不具であつたといふのは、左肩が右肩よりも稍々高かつたのである。次ぎに、記憶の美術館に於て、彼女の面前に登つて來たのは、大陸の一市の入組んだ狹い往來、背の高い灰色の家屋、巨大な伽藍、公共の大建築で、時代も古く建て方も奇妙なものであつた。そこで、やはりあの不具な學者と結びついて、新い生活が彼女を待つてゐたのであつた。

新い生活ではあつたが、壞れかゝる壁を食べて生きてゐる綠の苔の一塊のやうに、古びた材料を食べて生きてゐる新生活であつた。最後に、是等の移りゆく光景のかはりに、清教徒植民地の粗野な市場が、寄つて集つて、その嚴しい眼をヘスタ・ブリンヌに――さうだ、彼女自身に――向けてゐる市民と一緒に戻つて來た。彼女は頭手架の絞首臺の上に立つて、赤ん坊を抱き、胸の上には緋色のAといふ文字の模樣が金絲で刺繍されてあるのを着けてゐる。

果して是が事實であらうか。ヘスタはいと强く子供を胸に握りしめたので、子供は

叫び出した。ヘスタは眼を垂れて緋文字を見た。そして赤ん坊と此耻の表象が事實であるといふことを確めるために、指でそれに觸れても見た。さうだ！——是等のことは皆現實のことであつたのだ。——それ以外のことは皆全く消え去つてしまつた！。

三　めぐりあひ

緋文字を着けてゐた女が、人々の嚴しい見物になつてゐるといふ此燃えるやうな意識から遂に救ひ出されたのは、或人の姿を、群衆の端のところに見つけたためであつた。其人の姿は不可抗的に此女の思を奪つた。一印度人が印度人の服裝をしてそこに立つてゐたが、さういふ土人のひとりが、斯る時に、何かヘスタ・プリンヌの注意を惹いたらうと思はれる程、土人が英吉利の植民地で極めて稀な珍客ではなかつた。況してそれがヘスタの心からあらゆる他の事なり思なりを排除してしまつたらうとは思はれない。その印度人のそばに、そのつれであつたことは明かであるが、文明人と野蠻人との着物を不思議にだらし無く身に着けてゐる白人がひとり立つてゐた。

その人は丈が低く、顏には皺があつたが、まだ老衰と言はれる程ではなかつた。精神を練磨して、それに依て身體を造りあげて、かくきりした表象でもつて、精神がは

つきりあらはれてゐる人のやうな、著しい聰明が容貌のうちにあつた。たとひ外目には其異様な着物を無造作に着なして、或癖を隠さうとし、或はその癖を少くしようとつとめてはゐたが、此男の一方の肩が他方の肩より高いといふことは、ヘスタには充分明白であつた。再び、女がその痩せた顔と、その人の些細な不具を認めるや否や、ぶる〳〵と力を籠めて、赤ん坊を胸に抱き締めたので、可憐な赤ん坊はまた苦い叫びを出した。しかし此母親はそれを聞かぬやうであつた。

此見知らぬ男は市場に着いて、ヘスタ・プリンヌが自分を見る少し前に、彼女に眼をそゝいでゐたのである。おもにいつも心の中を見てゐる人のやうに、外部のものは彼れの心の中の何ものかに關係があるのでなければ、殆ど價値も意味も無いといつた人のやうに、初は不注意であつた。しかし直ぐ間もなく、此人の眼光は爛々と鋭くなつた。悶える嫌悪は顔ぢうに渦いた。宛も蛇が駿速に顔の上をすべつて、一寸とゞまり、鮮かにぐる〳〵渦を巻くやうであつた。顔は強い感情のために暗くなつた。しか

し彼はそれを直ちに意志力に依て制御したので、一刹那以外には、顔の表情が平静であると思はれたかも知れぬ。すぐ其痙攣は殆ど知れなくなつて、遂に彼の性質の奥に隠れてしまつた。男はヘスタ・プリンヌの眼が自分の眼にそゝがれ、ヘスタが自分を認めたらしいのを見た時、徐ろに穏かに指をあげて、空中にそれを振つて、それからそれを唇の上においた。

それから自分のそばに立つてゐた町民の肩にさはりながら、極めて叮嚀に話しかけた。

『ご免なさい、あなた様』とその男が言つた。『此女は何ものなんでございます。――何だつてこゝにさらしものなんかになつてゐるのでございます。』

『あなたは屹度此土地のことはよく御存知ない方に違ひありませんな。』とその町民が尋ねた人と連れの土人を珍らしさうに見ながら答へた。『それでなくちや、確か、ヘスタ・プリンヌさんとその間違ひのことはお聞きになつたでせうに。あの女はほんと

に信神深いデムスデール師の教會で大失態をやつたのです。』

『有仰るとほりでございます。』とその男が答へた。『わたしは此土地のことはよく存知ませぬ者でありますし、それに、ひどく心ならずも方々流浪してまゐつたものなのでございます。わたしは海陸非常な災難を蒙り、永い間南國の異教徒等の間に囚はれてゐたのでございます。そして今四ほれから贖ひ出されるために、此印度人にこゝへ連れて來てもらつたのでございます。それで、どうぞヘスタ・プリンヌの――名前は是でよろしいでせうか――この女の犯罪のことゝ、どうして此女が向うの絞首臺に登るやうになつたのか聞かせて下さいまし。』

『ほんとに、あなた、わたしの考では、あなたが曠野でいろんな困難を忍んで滯在なすつた後に、きつと嬉しくお思ひになるに違ひありません。』と町民が言つた。『この、わたしどもの聖なる新英洲のやうな、不義はさがし出されて、官吏や人民の前で罰せられる土地に、どう〳〵お出でになつたのですから。あの女はですね、あなた、あの

女は英吉利生れの或學者の奥さんだつたのです。その學者は久しくアムステルダムに住んでをられたのですが、一寸以前に、海を越えて、マサチュセッツ州のわたしどもと運命を共にしようといふ志があつたので、此目的のために、先づ自分よりさきに奥さんをこちらに寄越して、それで御自分は何か必要な仕事を仕末するために殘つてゐなさつた。まあ、あなた、奥さんが此のボストンに住んでから、かれこれ二年そこゝの間、此學者のプリンヌさんからは何のたよりもなかつたもので、よくお聞き下さい、この若い奥さんが勝手に心得ちがひをなすつたので――』

『アア――アハ！――、、、ようくわかりました。』と見知らぬ男が苦笑をしながら言つた。『あなたが有仰るやうな學者なら、こんな事も書物の中で知つてをつた筈です。して、御免なさい、あなた、あの赤ん坊の父親は誰なんでございますか。――わたしが判斷した所では、三四ヶ月ぐらゐのもので――プリンヌさんの抱いてをられる、』

『ほんとに、あなた、其事はまだ謎なんで、その謎を解いてくれる名判官はまだ無い

のです。』と町民が答へた。『ヘスタさんは絶對に言ふことを拒んでゐるので、奉行方が無駄に首を鳩めてをられたのです。大方その罪人は人に知られずに、また神様が見ておいでになるといふことを忘れて、今此悲い有様を立つて見てゐるでせう。』

『その學者は』と見知らぬ男がまた笑ひながら言つた。『此秘密を調べるために自分で來なくてはなりません。』

『若しまだ生きてゐるなら、ほんとにさうしなくてはなりません。』と町民が答へた。

『さて、あなた、このマサチュセッツ州の奉行方は、この女が若くつて、美いので、確かに、非常な誘惑にかゝつて墮落したのである、その上に、一番さうらしいのは、夫が海の藻屑になつてゐるかも知れぬとお考へになつて、この女に對して大膽に正義の法の極限を執行なさらない。此罪の刑は死刑です。けれど奉行方は非常な憐愍の心とやさしい心から、ブリンヌさんの刑はたつた三時間だけ頭手架の絞首臺に立つて、それから後は、天命のをはる時までの間、胸の上に耻の表象を着けておくといふことにしたのです。』

『賢明な宣告だ！』と見知らぬ男はおも〳〵しく首を垂れて言つた。『かういふ風にして、この女は、罪を戒める生ける說敎となる。あのいやらしい文字が墓石の上にきざまれる時まで。けれど同罪のものが少くとも女のそばに絞首臺の上に立たないのはいま〳〵しいです。けれどその男は知れるでせう！その男は知れるでせう！その男は知れるでせう！』

此見知らぬ男はその話好きな町民に叮嚀にお辭儀をした。そして連れの印度人に言葉少なにさゝやいて、二人ずつと群衆の中を通つて行つた。

此話の間、ヘスタ・ブリンヌは臺の上に立つて、矢張り見知らぬ男をじつと見つめてゐた。――餘りにじつと見つめてゐたので、全く思ひつめてしまふと、たゞその男と自分だけを殘して、眼に見える此世のあらゆる他のものが消えてしまふやうに思はれた。そんな風にしてめぐりあふことは、今のやうにして遇ふよりもも、つと恐いこ

とであつたらう。今は燃える白晝の陽が顏をこがし、その耻を照してゐる。胸の上には不名譽の緋色の表象がある。罪の子の赤ん坊が抱かれてゐる。祭にでも引出されたやうに引出された人々全體が、爐邊の平穩な光に於て、家庭の樂い蔭に於て、或は敎會で主婦の面帷の下でなければ見るべきでなかつた顏を見つめてゐる。恐ろしくはあつたが、ヘスタは是等の多くの見物人の臨席のうちに隱れ場のあることを意識した。この男とたつたふたり――顏と顏とをあはせて、挨拶をするよりは、ふたりの間に是れだけの人々を隔てゝ、かういふ風にして立つてゐる方がよかつたのである。女は謂はばさらしものになることのうちに自分の隱れ場を求めに遁げたやうなもので、その保護の取去られる刹那を恐れた。女はかういふ思に耽つてゐたので、自分の名が群衆全體に聞える、高い嚴しい調子で、いくたびも繰返されるまで、自分のうしろから起る聲が聞えなかつた。

『、、、、ようく聞け、ヘスタ・プリンヌ！』と其聲が言つた。

ヘスタ・プリンヌが立つてゐた臺の丁度上に、禮拜堂にくつついてゐる一種のバルコニィ、即ち廣い棧敷があつたといふことを、われ〳〵は既に認めた。そこは當時の斯かる公會に伴ふあらゆる儀式でもつて、奉行らの集まつてゐる中で、いつも諭告が下される場所であつた。こゝに、われ〳〵の述べてゐる光景を見て見ると、ベリンガム知事が坐つてゐた。その椅子のぐるりには戟をもつて四人の軍曹が護衛兵として立つてゐた。知事は、帽子には黑い羽毛をつけ、上衣には刺繍の緣を施し、下には天鵞絨の下衣を着けた――年寄つた人で、皺には苦い經驗が刻まれてゐた。青年活氣の力に依らず、中年の嚴格な鍊へられた力と、老年の陰氣な聰明とに依て、起り、進歩し、現在の發達の狀態に至つた社會、非常なことを仕遂げたのは、全く思ふ所望む所の少なかつたに依る、さういつた社會の頭領であり、代表者であるには、此知事はふさはしくない人では無かつた。知事を取圍んだ他の高官だちは、權を執るものが神の制度の神聖さを持つてゐると考へられた時代に特有な威風に依て顯然としてゐた。かういふ

人々は、疑もなく、善良な、正しい、賢明な人々であつた。しかし其時ヘスタ・プリンヌが顔を向けてゐた嚴しい樣子をした、その賢人だちよりも、過失を犯せる女の心をさばき、善惡の入組んだ心の網の縺れを解くために坐る資格がある賢人等を、是と同數だけ、全人類のうちから選ぶことは、事極めて容易であつた。實にヘスタはこの人々よりも大きい暖い群衆の心情のうちに、思ひ設けられる一切の同情があることを感じてゐるやうであつた、といふのはこの不幸な女は眼をバルコニィの方へあげた時、蒼ざめて震へたから。

ヘスタの注意をひいた聲は、尊く且つ名高いジョン・ウィルソンの聲であつた。此人はボストンの牧師の中での最年長者であり、同じ時代の大抵の牧師のやうに大學者であり、それに懇ろな心の人であつた。しかし此懇ろな心の方は知能の方よりも心を籠めて開發されたものでは無く、ほんとに、寧ろ、この人にとりては誇りといふよりも一の耻であつたのだ。この人は頭巾の下に白髮の緣をつけ、被ひのある書齋のランプの光になじんでゐるその灰色の眼は、ヘスタの赤ん坊の眼のやうに、まじりの無い日あたりでまばたいて立つてゐた。此人は古い說敎書の口繪になつてゐる黑い鐫版の肖像畫のやうに思はれた。そんな肖像畫は、今この人のやうに、人間の罪や情欲や苦惱に口を挿さまうとして出て來ない如く、此人もそんな權利はなかつたのである。

『ヘスタ・プリンヌ』と牧師が言つた。『お前はこゝにをられる此若い兄弟が、聖書の說敎を爲さる時に、それを拜聽する特權をもつてゐたのだが、わたしは、その、此方と今爭うたのだ。』――と、こゝでウィルソン氏は自分のそばにゐる蒼白い青年の肩の上に手をおいた。『わたしは此敬虔な若い方に、神の前で、此賢明正直なる官憲の前で、またすべての人民の聞える所で、この方がお前の罪の下劣さと毒惡さとに就て、お前の處分をなされなくてはならぬといふことを納得して戴かうとしたのだ。此方はわたしよりもよくお前の氣質を知つてゐられるから、お前がお前を誘惑して此恐しい墮落に陷れた男の名を隱さぬ程に、お前の剛情頑固な心を打破るやうな、やさしいにせよ、

恐しいにせよ、どんな論議を用ふべきかは、わたしよりももつとよく判斷することが出來る。けれど此方はかういふ白晝に、こんな大勢の群衆の前で、女の心の秘密を强ひてあばくのは、女の本性そのものに對する暴行であると言つて、――年齡以上に賢明な方ではあるが、年齡が若いから心がやさし過ぎて、――わたしに反對なさる。ほんとにわたしが納得して戴かうとしたやうに、罪を犯すことが耻なので、犯した罪を暴露することが耻ぢやない。どうしたらいゝでせうね、デムスデール兄弟。此憐れな罪人の心の處分をすべきものは、あなたでなくてはなりませぬか、それともわたしでなくてはなりませぬか。』

バルコニィを占領してゐた威嚴しい尊い人々の間につぶやく聲が起つた。そしてベリンガム知事は、彼の話しかけた青年牧師の方に對して、敬意を以て和らげられてはゐたが、權威ある聲で語りながら、彼等のつぶやく聲の意味を表白した。

『デムスデール師よ』と知事が言つた。『この女の魂の責任は大いにあなたにあるのだから、あなたはその責任の證明及び結果として、此女に悔改告白を勸告されなくてはなりません。』

此切訴の率直さは全群の人の眼をデムスデール師に引寄せた。――此人は英吉利の一大學の出身で、其時代のあらゆる學問を森林地に輸入した青年牧師である。其雄辯と宗教的熱心とは既に牧師職の高位に至る豫證を與へてゐたのである。非常に目立つた樣子の人で、額は白く、高く、且迫つてゐて、眼は大きく、蒐色で、且陰鬱であり、口は强く引締めた時でないと兎角震ひ勝ちで、それが神經質らしい所と甚しく自制の力とを示してゐる。生れながらの高い材能と、學者らしい才藝とをもつてゐるに拘らず、此若い牧師のそぶりには――どことなく不安なやうな、吃驚したやうな、なかば嚇されたやうな所があつて、――人生の道に全く迷ひこんで當惑して、やつと自分の獨りぼつちの宿で落着いてゐられるといつたやうな人である。それ故、自分のつとめの許す限り、蔭の多い間道を歩いて、さういふ風にして自分を素朴にし、子供らし

くしておいて、折々、その隱れ家から出て來る時には、多くの人々の言ふが如く、天の使の言葉のやうに人を動かす、新鮮、馥郁、したゝるばかり清い思想を携へて來たのである。

ウィルソン師と知事とが、人々の聞える所で、一婦人の魂、(その魂は腐敗してゐながらも、尙、極めて聖なる)魂の、あの秘密に說諭するやうに言つて、公然、公衆の注意を喚起した青年牧師は即ち是であつた。彼の立場の苦しさは彼の頰から血を追ひのけ、唇をふるはせた。

『あの女に意見をして下さい、兄弟』とウィルソン師が言つた。『それは此女の魂にとつて緊要であり、又、それだから、知事閣下の有仰る通り、この女の魂の責任者なるあなた御自身の魂に緊要であります。ほんとの事をいふやうに御說諭なさい。』

デムスデール師は默禱でもしてゐるやうに、首を垂れて、それから前み出た。

『ヘスタ・プリンヌ』とデムスデール師はバルコニィの上に倚りかゝり、しつかりと

女の眼を見下ろしながら言つた。『お前はこの方の今有仰つたことを聞き、わたしのつらい責任を知つてゐる。若しお前の魂の平安のためであり、又お前の此世の刑罰に依て救にもつと有効になるといふことを感ずるなら、お前と一緒に苦んでゐるものゝ名前を憚からず言ふことをわたしはお前に命ずる。何かその男に對して抱いてゐる間違つた憐みの心とやさしい心とのために言はぬやうではいけない。ほんとに、ヘスタ、たとひ其男が高い地位から降りて、そこに、お前のそばに、お前の恥辱の臺の上に立つやうになつても、一生涯罪ある心を隱してをるよりはいゝだらうから。お前の默つてゐるのが、その男にどうなると思ふか。たゞその男を誘惑するだけだ、――いや、謂はゞ、强ひるやうなものだ、――罪に僞善を加へるやうに。神樣がお前に公然の恥をお與へなすつたのは、それに依て、お前が衷の惡心と外の悲とに公然打勝つためなのだ。お前はその男に(その男は大方ひとりでその盃を攫む勇氣がないのだらう)今お前の唇にさゝげられてゐる盃、苦いは苦いが、身體のた

めになるその盃を、その男に拒んでゐるのだといふことを考へて見なさい！』

この若い牧師の聲は快美にしてやさしく深く且さ〳〵であつた。言葉の直接の意味よりも、寧ろその聲が極めて明かに表示した感情のために、その聲はすべての人々の情のなかに震動を與へ、聽く人をして悉く同情の念に堪へざらしめた。ヘスタに抱かれてゐた可憐な赤ん坊でさへ、全くこの力に動かされた、といふのは赤ん坊が今までぼんやりしてゐた眼をデムスデール師に向けて、半ば嬉しく、半ば悲しげな呟く聲を出して、小さな腕をあげたから。牧師の切訴は極めて力あるやうに思はれたので、人々はヘスタ・プリンヌが罪ある人の名を憚からず言ふか、それとも、その罪人自身がどんな高い所にをらうが、どんな低い所にをらうが、内心の避くべからざる必然に迫られて、絞首臺に登らざるを得ないだらうとより外信じ得なかつた。

ヘスタは首を振つた。

『お前、神樣の憐れみの屆かぬ所まで罪を犯さぬがいゝ！』とウィルソン師は前より

も惡さげに叫んだ。『その小さい赤ん坊はお前が今聽いた勸めに贊成し、それを確認する聲を神樣から授かつてゐる。名前を言つてしまへ。それと、お前の悔改が、緋文字をお前の胸から取棄てる役に立つかも知れない。』

『駄目でございます。』とヘスタ・プリンヌはウィルソン氏を見ずに若い牧師の深い當惑した眼をじつと見ながら答へた。『あんまり深い烙印なんでございます。それをお取棄て遊ばすことは出來ません。そしてわたくしはわたくしの苦みとその方の苦みとを堪忍びたいのでございます。』

『お前、言へ、』と冷かに、きびしく、絞首臺のぐるりの群衆から出て來たもひとつの聲が言つた。『言へ。そしてお前の子供に父親をやれい！』

『わたくしは申しません！』とヘスタは答へた。死んだやうに蒼くなりながら、しかし此聲が何人の聲であつたかは確か過ぎる程に認めた此聲に應じながら。

『そしてわたくしの子供は天の父を求めなくてはなりません。この世の父は知つては

ならないのでございます。』

『とても言ひはせん！』とバルコニィの上に倚りかゝり、手を胸にあてゝ、自分の切訴の結果をさきから待つてゐたデムスデール氏がつぶやいた。デムスデール氏は長く息をついて退いた。『女の心といふものは何て不思議な力と廣い心とをもつてゐるだらう！とても言ひはせん。』

年輩のウィルソン氏は心をくばつて自分の出る幕のために仕度をしてゐたが、此憐れな罪人の心の、手におへぬ有様を見て、群衆に向つて、こま〳〵と罪に就ての演説をしたが、絶えず、忌はしい文字のことをあてつけて話した。牧師は定刻を越えるまで其飾つた言葉を人々の頭の上にころがしながら、此表象のことを、極めて力強く〳〵、〳〵と述べたので、此緋文字は人々の想像のうちで新い恐しい形となり、其緋色は地獄の火炎から得て來たやうに思はれた。ヘスタ・プリンヌはその間硝子のやうな眼と、倦怠せる無頓着の様子をして、絞首臺の上に座を占めてゐた。ヘスタはその朝人

力の堪へ得る限りを堪へたのだ。そしてヘスタの氣質は、餘りに強烈な惱みをば卒倒に依て遁れるやうな氣質ではなかつたので、動物生命の力は少しも害はれずにゐても、精神はたゞ無感覺といふ石のやうな堅い殼の下に隱れることが出來ただけであつた。かくして說教者の聲は、無情に、而かも、無効に、ヘスタの耳の上に轟いた。赤ん坊はヘスタの苛責の終りの間、號泣と絶叫を放つて空氣を貫いた。ヘスタは機械的に是をやめさせやうとつとめたが、殆どその苦みに同情してゐたとは思へなかつた。依然として變らぬ堅い態度をしてヘスタは牢屋へ引戻され、鐵の大釘の擊つてある門の中に多くの人々の眼から消え失せた。ヘスタのうしろをのぞいてゐた人々は、緋文字が內部の暗い道に沿うて物凄い光を投げたと囁やいた。

四　語りあひ

牢屋に歸つてから、ヘスタ・プリンヌは、神經興奮の狀態にあつた。それで、自分に對して暴行を加へ、或は憐れな赤ん坊に何か半狂亂の傷害を加へやしないかといふ恐れがあつたので、不斷の警戒を必要とした。夜が近づくにつれて、叱つたり、刑罰で威脅したりして、女の不從順をなだめることが出來ぬことがわかつたので、獄吏マスタ・ブラケトは醫者をつれてくるがよいと思つた。獄吏はその醫者をば基督敎的の自然科學に熟練した人であり、又、野蠻人らが森の中に生ずる藥草や根に就て敎へ得るものにも皆精通せる人と認めた。ほんとをいふと、單にヘスタのためばかりでなく、子供のためにはもつと〳〵至急に醫者の助けが甚だ必要であつたのだ。――この子供は母親の胸から養分を取つてゐたので、その養分と一緒に母親の全身にゆきわたつてゐた動亂、苦惱、絕望をも飲込んでゐたやうだから。子供が今苦みもがいてゐたさま

は、その小さい身體でもつて、ヘスタ・プリンヌがその日一日ぶつつゞけにこらへた精神の苦みの鮮かな型を示したも同じであつた。

緋文字を着けた女が、群衆のなかにゐた時に、甚しく心を奪はれたあの不思議な樣子をした人が、獄吏の直ぐあとについて暗い部屋の中に入つて來た。此男は牢屋に住んではゐたが、何か罪の嫌疑をうけたからではなく、奉行らがこの人の賠償金のことに就て印度人の酋長と談判するまで、かうしておくのが此人を取扱ふに一番便利であり適當でもあると思つたからである。この人の名はロジャ・チリングウォルスと告示された。獄吏は醫者を部屋の中に案內してから後、一寸とゞまつて、この人が入ると比較的穩かになつたことを見て怪しんだ、といふのは子供は泣きつゞけてはゐたが、ヘスタ・プリンヌはすぐ死んだものゝやうに靜かになつたから。

『どうぞ、あなた、わたしとこの患者と二人だけにして下さい。』と醫者が言つた。『たしかに、獄吏さん、すぐこのうちが靜かになります。そしてほんとにプリンヌさんは

今までよりはもつとよく權に服從いたすやうになります。』

『さやう、若しあなたがそれをうまくなされるなら、』とマスタ・ブラケトが答へた。

『わたしはあなたを熟練家と申しませう、ほんとうに！ほんとにこの女はまるで物につかれたものゝやうでありました。鞭でもつてこの女からサタンを追出すために、わたしが着手すべきことは何も缺けてゐないのです。』

この見知らぬ男はもう靜かに部屋に入つてゐた。その靜かなことはこの男が自ら業とすると稱した醫業の特色である。又獄吏が去つて、女と顏をあはせて二人きりになつた時も、この男の擧動は變らなかつた。女が群衆のうちにこの男を認めて心を奪はれたことは、ふたりの間に極めて深い關係があるといふことを示したのであるが。彼は先づ子供に注意を與へた。子供は實に輪付のベッドの上で身もだえして泣叫んでゐたので、何を言つても子供をなだめることが至急に大切なことであつたのだ。彼は叮嚀に赤ん坊を診察して、それから着物の下から取出した革製の函をほどき始めた。そ

れは藥を入れてゐたやうであつた。彼れは一杯の水でその藥の一つをまぜた。

『わたしの古い錬金術の研究』と、男が言つた。『それから、藥草の功能に精通してゐる人民の間に一年以上も滯在したことが、醫者の稱號を請求してゐる多くの人だちよりも、わたしを善い醫者にしてくれたのだ。これ、お前！この子はお前の子だ、——わたしの子ぢやない、——わたしの聲や樣子を父親のだとも認めはしないだらう。だからお前の手でこの藥をやつてくれ。』

ヘスタは出された藥を退けると同時に、甚しく著しい不安の念を浮べて、じつと男の顏を見つめた。

『あなたは罪のない赤ん坊に仕かへしをなさるつもりなんでございますか。』とさゝやいた。

『馬鹿め！』と醫者は半ば冷かに、半ばなだめるやうに答へた。『わたしが何を苦しんで此あはれな私生兒に害を與へよう。この藥はよくきくのだ。そして是がわたしの子

であつたにしたつて、――お前の子であると一緒にわたしの子であつたにしたつて、――是以上によいことは出來ないのだ。』

女は實際わけのわからない精神狀態にあつたので、依然として躊躇してゐたから、男は赤ん坊を抱きとつて、自分で藥を與へた。するとすぐにその効能があらはれて、醫者の看板に僞のないことが證據立てられた。この小さい患者の泣聲は靜まり、身もだえして轉がることはやみ、(小さい子供らといふものは苦みがなくなればいつも寢入つてしまふやうに)、數分間のうちに深い滴るばかり爽かな眠に陷つた。この醫者は、醫者と言はれる立派な權利があつたから、さういふが、この醫者はつぎに母親の方に注意を與へた。靜かに又一心に吟味をして、脈を見、眼を見た。――それは女の心を畏縮戰慄せしめた凝視であつた。といふのは、其眼は親しかつたものではあつたが、しかも極めて珍らしく冷かであつたから――そして、遂に、自分の診斷に滿足して、更にも一服の藥を混ぜた。

『わたしは忘川も憂忘れ藥も知らないが』と男が言つた。『曠野で澤山の新い秘法を學んで來た。そして是がその一つなのだ。――バラセルサスほどに古い、わたしの學問の報酬として、或印度人が敎へてくれた處方なのだ。それを呑みなさい！罪の無い良心ほどには痛みをしづめるやくには立たぬかも知れないが、それはわたしはお前にやれやしない。けれど荒れ狂ふ海の浪の上の一滴の油のやうに、お前の情の浪のくるひをしづかにするだらう。』

彼れはヘスタにコップをやつた。ヘスタは男の顏を靜かに熱心に見つめながらそれを受取つた。それは全然恐怖の顏付ではなかつたが、男の目的が果して何であるかに就ては、疑惑と疑問とに滿ちてゐた。ヘスタは眠つてゐた子供をも見た。

『わたくしは死のことを考へてゐました。』とヘスタが言つた。『わたくしはそれを望んでゐました。――若しわたくしのやうなものが何かを得るために祈ることが正いなら、死を得たいがために祈さへしたかつたのでございます。けれど若し死が此コップ

のなかにありますなら、それを呑んでしまふのを御覽になる前に、も一度お考へ下さい。御覽なさい！丁度今わたくしはそれを唇にあてゝゐます。』

『それでは呑みなさい、』と男は矢張りもとの冷かな落付きはらつた調子で答へた。

『お前はそんなにわたしがわからないのか、ヘスタ・プリンヌ。わたしの目的はいつもそんなに淺薄なのか。たゞひわたしが復讐の計畫を考へるにしても、此燃えてゐる耻がお前の胸の上に依然として燃えてゐるやうに、お前を生かしておくことより、――生命を破るあらゆる傷害危險をとめる藥をお前にやるよりも、何がもつとよくわたしの目的のためにならう。』さう語りながら彼れは人差指を緋文字の上においた。すると すぐそれが赤熱せるもの丶如く、ヘスタの胸の中に焦げて入込むやうに思はれた。彼れはヘスタが思はず身震ひをするのを見て微笑した。『それだから生きて、お前の運命を荷つて行け、人々の眼の前で、――お前が夫と呼んだもの丶眼の前で、――あの子の眼の前で！そして生きるために此藥を呑んでしまへ！』

それ以上の勸告も猶豫もなしに、ヘスタ・プリンヌはコップを乾して、此熟練家の指圖に依て、子供の眠つてゐたベッドの上に坐つた。そして男は部屋にあつたたつた一つの椅子を引寄せて、女のそばに坐つた。かういふ準備に對して女は戰かずにはゐられなかつた。といふのは――この男が身體の苦みを救ふために、人情か、主義か、或は謂はゞ上品な殘忍性かゝ、彼をして爲さゝるを得ざらしめたことを悉くやつてしまつたので、――今度は、最も深く、恢復すべからざる程に、女に傷つけられた男として、女を取扱ふべしと女の方では感じたからである。

『ヘスタ』と男が言つた。『わたしはお前がなぜまたどうして穴に落ちこんだか、否、寧ろ、なぜ又どうしてわたしがお前を見出したあの耻の臺にお前が登つたかはたづねはしない。その理由は遠くに求める必要はないのだ。わたしの愚かなこと丶、お前の弱いためなのだ。思想の人であり、書庫の蠹蟲であり、知識の渴をいやすために一番よい年月を費してしまつて、已に衰へたわたしが、お前のやうな若々しさと美しさとに

は何の關係があつたか。わたしは生れた時から不具ではあつたが、若い娘の空想で見たら、知識上の才能が身體の不具を隱すだらうといふ考でもつて、どうして自分を欺くことが出來たか。人々はわたしを賢者だといふ。若し賢者が自分のために賢者なのなら、わたしはこんな事は皆豫め知つたであらうに。わたしが廣い物凄い森から出てきて、この基督教徒の植民地に入つた時に、わたしの眼に映ずる最初のものは、人人の前に、耻の像となつて立つてゐるヘスタ・プリンヌお前だらうといふことを知つたであらうに。いやいや、われ〳〵が夫婦になつて、一緒に古い教會の階段を降りたあの時から、われ〳〵の道のはてに燃えてゐるその緋文字の葬の火を見たであらうに！』

『あなたは御存じでございます。』とヘスタが言つた、――といふのはヘスタは氣がふさいではゐたが、自分の耻の表象に對する此最後の靜かな打擊を堪へ得なかつたからである。――『あなたは御存じでございます。わたくしはあなたに皆打あけてをつたの

でございます。わたくしは愛してをらなかつたし、又愛したふりもしなかつた。』

『ほんとうに』と男が答へた。『わたしが愚かだつたのだ！わたしはさきからさう言つてゐた。けれどわたしの生涯のあの時期まで、わたしは無駄に生きてゐたのだ。世の中が非常に不愉快だつたのだ！わたしの心は澤山の客を入れるに充分の住家であつたのだが、淋しくつて、冷たくつて、家庭の火がなかつたのだ。わたしはその火を燃したかつたのだ！わたしは年寄りではあつたが、陰氣ではあつたが、不具ではあつたが、――あらゆる人間が集めるために、遠く廣く散布されてあるあの單純な祝福が、わたしの祝福でもあらうと考へることは、無法な空想とも思はれなかつたのだ。そこで、ヘスタ、わたしはお前をわたしの心の中に引入れ、心の一番奥の間に引入れて、お前のをるがために暖まつたその暖りに依て、お前を暖めやうとしたのだ！』

『わたくしはあなたに非常に濟まないことをいたしました。』とヘスタが口吃もつた。

『それはお互ひさ。』と男が答へた。『お前の蔭え出る若さを欺いて、わたしの老衰と、

偽な、不自然な關係を結ばせたのが、抑も〳〵わたしの過失なのだ。それだから、無駄に考へたり推理をしたりしなかつた人として、わたしはお前に對して復讐を求めたり、傷害をたくらんだりしやしない。お前とわたしとの間では、量が丁度平均してゐるのだ。けれど、ヘスタ、われ〳〵兩人をひどい目にあはせた男がゐる！それは誰なのだ？』

『それはおたづね下さいますな？』とヘスタ・プリンヌはしつかり男の顏を見つめながら答へた。『あなたはどうしてもそれを御存知になつてはいけません！』

『どうしてもといふのか。』と男は暗い自ら恃む所ある聰明な微笑を湛へながら、それに答へた。『どうしても知ることはならない！ほんとに、ヘスタ、——外界にせよ、或は多少深く、思想の見えない境界にせよ、——全心全力を籠めて、秘密の解決に熱心に、差控へなく、熱中するものから、隱れるものは何もないのだ。お前はあの穿鑿好きな群衆からはお前の秘密を隱されよう。牧師や奉行らが、お前の心から、その名

前をもぎとり、お前の臺の上に同罪人を載せようとした時、丁度今やつたやうにして、さういふ人々に隱されもしよう。けれど、このわたしはあんな人々の持つてゐるより別の力をもつて、吟味に來たのだ。わたしはその男をさがすのだ、書物の中に眞理をさがしたやうに。錬金術のうちに黃金をさがしたやうに。交感がわたしにその男を知らしめるだらう。わたしはその男が震へてゐるのを見るだらう。わたし自身が俄かに又人知れず戰慄を覺えるだらう。早晩その男は是非ともわたしのものとならなくてはならない。』

この皺だらけの學者の一双の眼は爛として女にそゝがれた。それで、ヘスタ・プリンヌは胸の上に兩手を組合せて、すぐ胸の秘密を讀まれはしないかと恐れた。

『お前はどうしても名前をあかさない？それにしてもその男はわたしのものなのだ。』と宛も運命が自分に味方をしてゐるもの丶如く、全く信認してゐると言つた樣子をして、また言ひ始めた。『その男はお前のやうに、着物の上に耻の文字を縫ひつけて

はゐないが、わたしはそれを心の上に讀むだらう。けれどその男のために心配することはない！わたしは神樣御自身の報いをなさる方法を妨げたり、或ひは、わたしの損になることだが、人間の法律の手に渡したりするとは思はないがいゝ。且又その男の生命にかゝはるやうなことを何かたくらんだりするとも思はないがいゝ。いや、又、その男の名譽にかゝはるやうなことだつて何もしやしない。若しわたしの判斷するやうに、その男が立派な名譽をもつてゐる男なら。その男は生きてゐるがいゝ！外面の體裁に隱れてゐるがいゝ。若しそれが出來るなら！それにしても其男はわたしのものとなるだらう！』

『あなたのなさることは憐みのやうだけれど、』と、當惑して、恐れて、ヘスタが言つた。『あなたの言葉を聞くと、實に、あなたは恐しい方だ。』

『一つのことをわたしはお前に、嘗てはわたしの妻であつたお前に命じておきたい。』と學者がつゝけて言つた。『お前はお前の情人の秘密を守つてゐる。それと同じやうに、

わたしの秘密も守つてくれ！此土地にはわたしを知つてゐるものが一人もない。誰れにでも、お前が嘗てわたしを夫と言つたといふことを淺してくれるな！こゝに、地球のこの荒れ果てたはてに、わたしはわたしの宿を定める。といふのはわたしは外處では漂泊人で、人間關係を離れてゐたが、こゝに、一人の女、一人の男、一人の子供がゐて、そのものらとわたしとは切つても切れない絆があるのだから。そのきづなが愛であらうが憎であらうが、そんなことは構はない。正しいきづなであらうが、不正なきづなであらうが、そんなことは構はない。ヘスタ・プリンヌ、お前とお前のものとはわたしのものだ。わたしの家庭はお前のをる所、その男のをる所にある。けれどわたしを裏切してはいけない！』

『なぜあなたはそれをお望みなのでございますか。』とヘスタは何故かわからなかつたが、この秘密なきづなから逡巡してたづねた。『なぜ公然お名乘になつて、すぐわたくしをお棄てにならないのでございますか。』

『それといふのは』と男が答へた。『わたしが、不貞な女から泥をぬられた夫の不名譽をうけたくないからかも知れない。他の理由のためかも知れない。ほんとに、人知れず生死するのがわたしの目的なのだ。それだから、お前の夫は世間に對してはもう死んでしまつたもので、消息が全く來ないものとしておくがいゝ。言葉でも、合圖でも、顔付でも、わたしに話してはいけない！就中、お前の知つてゐるその男には、この秘密を洩してくれるな！若しお前がこの事でわたしを棄てるなら、注意するがいゝ！その男の名譽も、地位も、生命も、わたしの手中にあるだらう。注意するがいゝ！』

『同じやうに秘密を守ります。』とヘスタが言つた。

『誓つてくれ！』と男が答へた。

そしてヘスタは誓つた。

『そんなら、ブリンヌさん』、と、其後ロジア・チリングウオルス老人で通つた此男が言つた。『わたしはお前をひとりにしておく、お前の赤ん坊と緋文字とだけにして。ど

うだ、ヘスタ！お前の宣告は睡眠の時も其表象を着けてゐなくてはならないのか。お前は夢魔と惡夢がこわくないか。』

『なぜあなたはそんなにわたしをお笑ひなさいますの。』とヘスタが男の眼中にあらはれた表情にいら〳〵して問ひつめた。『あなたはこのぐるりの森にやつて來る惡魔のやうでございますか。あなたはわたくしの魂の破滅となる關係にわたしを誘はふとするのでございますか。』

『お前の魂ぢやない。』と彼れは、もひとつ微笑しながら答へた。『いや、お前のぢやない。』

五　ヘスタの針仕事

ヘスタ・プリンヌの幽閉の期限は今切れた。その牢屋の戸は押開かれて、彼女は日光のあたる所に出て來た。ヘスタの病的な心で見れば、すべてのもの丶上に一樣に落ちる日の光が、宛かも自分の胸の上にある緋文字を示すためより他の目的が無かつたやうに思はれた。ヘスタが從ふものもなく、牢屋の閾から初めて足を踏出した時は、人々の物笑ひになつて、人間全體が寄つてたかつて指笑した前述の見世物行列よりも、もつと眞實な苦惱を感じたであらう。あの時ヘスタは神經の不自然な緊張と、其性質のあらゆる爭好きな力とに助けられてゐた。それが其時はヘスタをして其場面を變へて一種のもの凄い凱旋たらしめる力を與へた。且又事件は生涯のうちにたつた一度起る孤立絶緣の出來事であつた。それ故是に當るために、彼女は物惜みせず、全力を振つたのである。(其力は多年の平穩な生活を支へるに充分であつたものだ。)ヘスタ

の罪を定めた法律そのもの(是は嶮しい顏の巨人ではあるが、その鐵腕で、絶滅すると共に元氣をつける力をも持つてゐる巨人である。)法律そのものが、已にヘスタの恥辱の恐しい責苦の間、彼女に元氣をつけてゐたのである。しかし今は從ふ者もなくたつた一人で牢屋の戸を出て行く歩みと共に、日々の習慣が始まつた。そして其習慣をば當りまへの力の貯蓄で支えて進めて行くか、それでなければそれに押つぶされてしまはなくてはならない。未來から力を借りて來て、現在の悲を滿遍なく助けることは出來ない。明日といふ一日は、明日の苦勞を携へて來るだらう。その翌日も同じことであらう。日といふ日はどれも〳〵その日その日の苦勞を持つて來るが、しかもそれが何時も同じもので、今やそれを辛棒するには口には言へぬ程辛いのである。遠い未來はよろ〳〵と過ぎ行くであらう。しかも彼女が取上げて擔ひゆく重荷は全く同じで、投棄てることは出來ない。といふのは日はかさなり年は加へられるに隨ひ、苦惱をば耻の堆の上に積み重ねるであらうから。かういふ年月の間に、ヘスタは自分の個性

をなくなして一般的な符牒となるだらう。それを説教家道學先生は指さして、彼等自身の想像でこしらへた、女心の弱い意志と情欲をば、それで活躍せしめ、それで具體化するであらう。かういふ風にして若い清い少女らは、罪の像、罪の實體、罪の本體として――胸の上に緋文字の燃えてゐる彼女を、――立派な兩親の子なる彼女を、――未來には一人前の女となる赤ん坊の母なる彼女を、――一たびは罪の無かつた彼女を、――見るやうに敎へられるであらう。そして其墓の上には、そこまで運ばなくてはならない恥の表象が、彼女の唯一の石碑となるであらう。

不思議に思はれることは、自分の前に世界がありながら――その刑の宣告の限制的項目は、何も、ヘスタを、極めて人目に遠い清敎徒植民地の境界内にひきとゞめてはゐない、――彼女の生地へ、或はどこか他の歐羅巴の國へ歸り、そしてそこで全く別人になつたかのやうに新い體裁になつて、彼女の性質と本性を隱すも勝手である、――そして眼の前に開いてゐる陰鬱な測り難い森林の小路もありながら、そこに於てはヘ

スタの疎放拘はる所なき天性が、彼女に罪を宣した法律とは全然習慣生活を異にした人々と同化するであらう。さういふ道もありながら、――不思議に思はれることは、この女がやはりそこを自分の故郷と呼んでゐたことである。そこでは、そしてそこだけでは、自分が必然不名譽の標本とならなくてはならない。しかしながらどうすることも出來ない、又避けることの出來ない感情が嵩じて、それが免かるべからざる運命の力を持つ程になる、さういつた宿命がある。或大きな、そして著しい事件が、人間の生涯に一定の色彩を與へた場所のぐるりをば、低徊去る能はざらしめ、又幽靈の如くそこに屢々訪ねて來るやうに强ひるものは、殆どいつも此運命の力である。しかもそれが抵抗し難くなればなる程、人間の生涯を陰鬱にする色合は益々暗くなる。ヘスタの罪、ヘスタの恥は、ヘスタが、ずつと土中に張つた根であつた。宛かも第一の誕生よりもつと强い同化力をもつてゐる第二の誕生のために、ヘスタ以外の巡禮や漂泊者には不適合な此森林地が、ヘスタ・プリンヌの荒凉慘澹たる生涯の故郷に變へられ

た親があつた。地のすべての他の場所、――あの英吉利の田舎村ですら、そこでは幸福な幼年時と無垢な處女時代とがまだ母親の手にまもられてゐるやうに思はれた、さういふ場所ですら、ずつと以前に脱ぎ棄てられた着物のやうに、――ヘスタには割合に縁が遠かつた。ヘスタをこゝに縛りつけた鎖は鐵の環で、それが心の奥まで痛みを與へたが、決してそれを破ることは出來なかつた。

別の感情が、全く生命にかゝはる所であつた其場所と徑の中に、ヘスタを閉籠めてしまつたのかも知れない、――ヘスタは自分に知れぬやうに秘密を隱してゐた。それで其秘密が、穴からもがき出る蛇のやうにもがき出た時には、いつも彼女は蒼白になつたけれど、確かにさうだつたのだ。そこには或人が住んでゐた。或人の足が歩いてゐた。その人と彼女とは一つに結びつけられてゐるのだ、と彼女は考へた。その關係は地上では認められない、その關係が二人一緒に最後の審判の法廷の前に連れてゆき、未來永劫、無窮の應報を一緒にうけるために、その法廷を二人の婚禮の祭壇にするで

あらう。幾たびとなく靈魂を惑はす惡魔は、此考をば沈思するヘスタに押つけて、ヘスタが猛烈な自暴自棄の喜びに驅られて、此考を掴み取り、それから其考を自分から拋棄ようとつとめたのを笑つてゐた。ヘスタは此考と面と向つて見もしないで、あわてゝそれを土牢の中に閉籠てしまつた。ヘスタが自分を強ひても信じしめなくてはならなくしたこと、――考へ考へした揚句、彼女が引きつゞき新英洲の一住民であつたのだ。彼女は斯く獨語を言つた。『こゝは自分が罪を犯した場所だ、だからこの世の罰をうくべき場所である。かくして日々の耻の苦痛が遂には自分の靈魂を淨めて、失つてしまつたのよりも別の貞潔な性質を造りあげるであらう。艱苦の結果、もつと聖いものになるであらう、』と。

それゆゑヘスタ・プリンヌは遁げなかつた。半島のはしまで行かない所ではあつたが、他の住家とはくつついてゐない都會端れに、小さい葺屋根の家があつた。其家は、

この時よりずつとさきの或植民が建てゝ打ちやつておいたのである。そのわけはと言へば、その邊の土地は餘り瘠せてゐて耕作は出來ず、それと共に比較的遠いために、既に移民等の習慣の特徴をなしたあの社交的な活動區域外に押出されてゐたからだ。其家は海岸に立つてゐて、灣を隔てゝ西方の森林に蔽はれてある丘陵が見渡される。半島にしか生えない矮小な樹木の籔が小家を人目から隱しはせず、こゝに隱れてゐたいと思つてゐる、少くとも、隱るべき筈の誰かゞゐるのだといふことを示してゐたらしい。ヘスタは自分のもつてゐたほんの僅かばかりの貯へを以て、矢張りまだ嚴しい監視を怠らなかつた奉行らの特許をうけて、此小さい淋しい住家に、赤ん坊と一緒に落ちついた。すると間もなく一つの不思議な疑の影が其場所に結付いた。この女が家の窓のところで忙しく針を使つたり、入口に立つたり、小さい庭で働いてゐたり、都會の方へ行く徑について出て行くのが見える程の處まで、子供らが忍んで來て、あまり小さいことだから、なぜこの女が人間の愛の世界から締出されてゐたのかはわから

なかつたけれど、女の胸の上にある緋文字を見つけると、不思議な傳染的の恐怖を惑じて逃出すのであつた。

ヘスタの境遇は寂しくつて、敢て顏を出してくれる友だちは世の中にひとりだつてゐなかつたが、さりとて缺乏の危險にはあはなかつた。ヘスタがもつてゐた技術は、その技術を用ひる範圍が比較的狹い土地に於てゞも、生ひ立つて行く赤ん坊と、自分とのための食物を得るには足りた。それは針仕事の（その時も今のやうに殆ど女の手中にある唯一のもの）技術であつた。ヘスタは自分の胸の上に奇妙な刺繍をした文字で、自分の微妙な想像的な妙工の見本を着けてゐた。貴婦人等は喜んでそれを利用して、自分自分の絹と金絲の織物に、人間の妙工のより美しい、、より精神的な裝飾を加へようとしたのだ。こゝでは一般に淸敎徒の服裝の特色であつた黑い質素な樣子をしてゐたから、ヘスタのより立派な手藝品の需要といふものは稀であつたかも知れない。それでも時代の趣味は、この種類の品物には何でもかでも精巧なものを求めてゐたの

で、われ〳〵の嚴肅な祖先に對しても此感化を及ぼさずにはゐなかつた。もう既に彼等は用ひずに濟ますことがむづかしかつたと思はれる澤山の流行をふり棄てゝゐた。按手禮、奉行就任式と言つた風の公けの儀式や、一の新政府が人民に表示する諸形式に威嚴を與へ得べきものは、皆、政策として、整々堂々たる儀禮と、陰氣だけれども、而かも故意と作りつけた宏壯に依つて嚴然としてゐた。深い繍領、骨折つて作られた帶布、派出な刺繍を施した手袋など、かういふ奢侈品、及び、之に似よつた奢侈品をば、皆、庶民階級に對しては禁止した時でも、權を執る官吏には必要なものと考へられてをり、位や富で威嚴を與へられてゐる人々には喜んで許されたのである。葬式の着物に於ても、――それが死人の着物のためであつたにしても、或は黑い布と雪白の薄麻布の澤山な表象的の模樣でもつて遺族の悲を表示するためであつたにしても、――ヘスタ・プリンヌが供給することの出來るやうな働きに對してはたび〳〵特別な需要があつた。赤ん坊のリンネルの下着も（といふのは當時赤ん坊は長襦袢を着てゐた

から）矢張り働きと報酬を得るもひとつの道となつたのだ。

ヘスタの手藝品は、次第に、甚だのろくは無く、今日の所謂流行と謂はれるものになつた。極めて悲慘な運命の女に對する憐みからであつたか、或は、普通のものなり、價値の無い物にすら、實際にない價値をつける病的な好奇心からであつたか。或は、當時は今のやうに他の人々が求めても得られなかつたものをば、或人々には有り餘る程與へた、何か他の知るべからざる事情のためであつたか。ヘスタが充たすにあらざれば空つぼになつてゐたに違ひない一つの缺陷をば、ヘスタが眞に充した爲めであつたか。いづれにせよ、確かに、ヘスタは、自分の針を用ひて費しても差支ないと思うた時間だけに對する、可成な現金の報酬をうける仕事があつたのだ。華麗壯嚴な儀式のために、ヘスタの、罪に汚れた手で作られた着物を着けて、『虛榮』は自ら耻ぢんことを欲したのかも知れない。人々は彼女の針細工を知事の繍領の上に見た。軍人等は襟卷の上に着け、牧師等は帶布に着けた。彼女の針仕事は赤ん坊の小さな帽子を飾つた。

黴びて腐れてしまふやうに、死人の棺の中に押込められた。しかし、たつた一つ、花嫁の清い赤い顔を蔽ふべき白いヴェールの刺繍をするために、彼女の手を輕んだものがあるといふことは記錄されてない。この例外は、社會が永久に假借する所なき力を以て、嚴しくヘスタの罪に對して顏をしかめてゐた證據である。

ヘスタは、自分のために、最も簡略な、最も禁欲的な糊口の資料が得られ、子供のためには、たゞ充分の食物が得られゝば、それ以上、何ものをも獲ようとはしなかつた。着物といへば、最も粗末な材料で出來たもので、最もくすんだ色である。それに生涯離してはならぬ定めになつた、あのたつた一つの飾り、――緋文字――があるだけであつた。是に反して、子供の着物は珍奇と言はうか、寧ろ奇怪と言つてもいゝやうな巧みに依て、人目を聳動させた。この巧みはほんとに此娘のうちに早く發達しかけた空幻の魔力を强める役には立つたが、この魔力は又もつと〳〵深い意味があるやうにも思はれた。是に就ては後で語らう。ヘスタは赤ん坊の裝飾に、あの僅かな入費

をいれる外には、自分よりも悲慘では無い薄命な人々に餘分な金を皆やつてしまつた。さういふ人々は食物を與へてくれるヘスタの手を屢〳〵侮辱した。ヘスタはもつとよく自分の技術を使へれば使へた多くの時間をば、貧民のために、粗末な着物を造ることに費した。かういふ風な身すぎのうちには、罪滅ぼしの苦行だといふ考もあつたらうし、又、こんな粗末な手仕事に、そんなに多くの時間を捧げるといふことに、快樂の眞の犧牲をさゝげるのだといふ考もあつたらしいのである。ヘスタは、天性、豐かな、奢侈淫逸な、東洋風の特質――派出に美しいものを好む趣味をもつてゐたが、彼女の精巧な針仕事以外には、自分のやれさうなどんな事柄にも、一生涯、彼女の趣味を行使すべきものは他に何も見當らなかつた。女といふものは細かな針仕事から、男性にはわからない、快樂を集める。是はヘスタ・プリンヌにとりては、自分の生の情を表はす方法であり、それだからその情を鎭める方法であつたのかも知れない。ヘスタはあらゆる他の喜びのやうに、針仕事をも罪として却けた。かく良心が病的につ

まらぬ事柄に差出がましく出しやばつたことは、純な、堅實な懺悔の兆を示したのでなく、却て、何かいぶかしい、何か非常にまちがつてゐるやうなものが、下にあることを示しはしなかつたかと氣遣はれる。

かうしてヘスタ・プリンヌはこの世の中で爲すべき職分があるやうになつた。カインの額の烙印よりも女の胸にはもつと堪らない印を着けられてゐたとはいへ、彼女の生來の性格の力と、珍らしい心力とで、世の中は全くヘスタを放棄することが出來なかつた。しかし社會との交はりに於ては、宛も自分が社會の一員であるかの如き感じを抱かせたものは何もなかつた。身振りといふ身振り、言葉といふ言葉、行遇ふ人々の沈默でさへ、暗示し表白したことは、屢々ヘスタが追放者であり、ひとりぼつちであつて、宛かも別世界に住んでゐるもの丶如くであるといふこと、或は他の人間よりは別の機關と感官に依て人情を知るもの丶如くであるといふことを暗示表白したのだ。ヘスタは種々の道德的關係から離れて立つてゐたけれど、さういふ道德的關係の

すぐそばに立つてゐた。その有樣は丁度幽靈の觀があつた。即ち家庭の爐邊を再び訪ひながら、自分をば他人に見せたり感せしめたりし得ないもの丶如く、もう家族の喜と一緒になつて微笑むことなく、眷族の悲と一緒になつて悲むことなく、或はひよつと禁制の同情を示すやうなことでもあれば、恐怖と戰慄すべき嫌惡の情を起すにとゝまるといつたやうな、幽靈の觀があつた。實際、ヘスタが尙たつた一つ人間性を失はなかつた所があるとすれば、それは是等の情緒と、その他にごくひどい輕蔑以外には何も無いやうに思はれた。當時は優美の時代ではなかつた、そしてヘスタは自分の地位をよく理解してそれを忘れる危險はなかつたとはいへ、屢々一番軟かな所に一番ひどく觸られるので、自分の地位が新い苦痛のやうに屢々鮮かに自覺されるのであつた。ヘスタが惠みをかけてやらうと思つてさがし出した貧民等は、上述の如く、屢手を伸ばして救はうとした彼女の手を罵つた。上流の貴婦人等も、ヘスタが仕事のために其家に入ると、何時もヘスタの胸の中に苦い雫を滴らした。時とすると、あの蟲も

殺さない顔をした惡意といふ錬金術に依つて。(この術に依て、女は普通のつまらないものから精妙な毒を拵へることが出來るのだ。)或は又もつとはげしい言葉に依ることもあつた。さういふ言葉はこの苦める者の保護なき胸の上に、化膿した傷を打つ手荒な打撃のやうに落ちた。ヘスタは永い間よく自分を訓練してゐた。ヘスタは決して此攻撃に應じなかつた。たゞ深紅の閃きが、抑へることの出來ぬやうに、彼女の蒼白い頰の上に登り、再び彼女の胸の底に落ち込んで行つた。ヘスタは辛抱强かつた。——成程殉教者ではあつたが、——敵のために祈ることを控えてゐた、といふのは、赦さうとする渴望があつたに拘らず、祝福の言葉が頑固にもつれてしまつて、呪咀になりやしないかと恐れたから。

ヘスタは、淸教徒の法廷の、不滅な、永久に活動的な宣告に依て、極めて巧みに工まれた苦みの鼓動をば、絶えず、是以外の澤山な方法で感じた。牧師等は街道にとゞまつて勸めの言葉を話した。それがために、齒をあらはして笑つたり眉をひそめたり

する群衆を、この憐むべき罪ある女のぐるりに群がらせた。若しヘスタが萬民の父なる神の安息日の微笑にあづかりたいと思つて敎會に入れば、屢々自分の不仕末が說敎の本文となつてゐることに氣がついた。ヘスタは子供等を恐れるやうになつた。といふのは、子供等はたつたひとりの子供の外には決して連れといふものがなく、默つて都市の中をこつそり歩いて行く、この物淋しい女に、何か身の毛もよだつやうな所があるといふぼんやりした考をば、彼等の親たちから飲み込んでゐたからである。それ故、彼等は先づヘスタを通り過させておいて、遙かに鋭い叫びを出したり、彼等の心には何等明瞭な意味のない、それにも拘らず、それが無意識に片言のやうに唇から洩れて來た時には、ヘスタには恐しかつた、さういつた言葉を放つたりして追ひかけた。萬物が皆ヘスタの耻を知つてゐた程にそれが廣く傳播されてゐることを論證するやうに思はれた。木々の木の葉がお互ひにあの暗澹たる物語を囁き合うたにしても、——夏のそよ風がそれに就てつぶやいたにしても、——冬の木枯がそれを高聲に

叫んだにしても、――是れよりも深い苦痛を起しはしなかつたであらう！もひとつの特別な苦痛は、誰か初めての人に凝視される時に感じた。見知らぬ人々が珍らしげに緋文字を見つめた時は（そして誰れだつてさうしないものは無かつた）ヘスタの心の中に緋文字を新たに烙印されたのである。それで、ヘスタは屢々手を以てその表象を蔽ひ隠さずにはゐられなかつたが、いつも蔽ひ隠すことはしなかつた。しかしそれから又あのいつもの人の眼に見られても、同じやうに一種獨特の苦惱をうけた。よく知り合つたこの眼の冷嘗は堪ふべからざるものであつた。約言すれば、徹頭徹尾、ヘスタ・プリンヌは、その表象が人の眼に見られると、いつもこの恐しい苦惱をうけたのだ。そこは決して無感覺にはならなかつた。反對に、日々の苦痛のために益々感じ易くなつたやうであつた。

去かし、時とすると、多くの日の間に一度、或は大方多くの月の間に一度、ヘスタは此の耻の烙印の上に、或眼――或人間の眼を感じた、と、丁度自分の苦惱の半分を

一緒に分けて貰つたやうに、それが刹那の慰安を與へたやうに思はれた。と、すぐまたゝく間に、苦惱はもつと深い苦痛の皷動をうつて、なだれを打つて戻つて來た。といふのは、その短いひまに、ヘスタは新い罪を犯してゐたから。ヘスタはたつた獨りで罪を犯したのか。

ヘスタの想像力は幾らかどうかしてゐた。そして若し彼女がもつと屠弱な道德的知的の素質であつたら、彼女の生活の不思議な、ひとりぼつちで苦んだ苦惱に依て、愈愈彼女の想像力がどうかしたであらう。ヘスタは表面上關係があつた小社會を、もの淋しく、あちこち歩きながら、折々思つたこと、（若し其時の思が全然空想だとしても、而かもそれは抵抗し難き程に力強い空想であつた）其時のヘスタの感じなり思ひなりは、何であつたかと言へば、緋文字が彼女に第六感を與へたといふ感じであつた。それが彼女に他人の胸にひそめる罪を交感的に知ることを得しめたといふことを彼女は信じて、戰慄したが、しかし信せずにはゐられなかつた。彼女はかくの如き默示の

ために戰くばかりに恐れた。この默示とは何ものぞ。この默示は惡靈の陰險なさゝやき以外のものであつたらうか。此惡靈はまだ半分しか犧牲になりきつてゐない、此婉いてゐる女を口說き落さうとしたのだ。外部に純潔を裝へども、それは虛僞に過ぎないとか、一切を暴露すれは、緋文字はヘスタ・プリンヌ以外の多くの人々の胸に燃え出づるであらうなどと。或はヘスタはそんな諷刺――極めてぼんやりしてゐて、しかも極めて明瞭な――をば眞としてうけなくてはならなかつたのか。あらゆるいやな經驗のうちで、この知覺程に恐しくていやな感じはヘスタには他になかつた。此知覺を活き〳〵と活躍させた折が、不敬な生憎な時であつたがために、彼女はショックをうけ、又まごつかせられた。あの古へへの敬畏の念に滿てる時代の人々が、天使と交はりある人間を見上ぐるが如くに見上げた、敬虔と正義との手本なる、立派な牧師、或は奉行のそばを、ヘスタが通り過ぎた時、胸の上の赤い表象が交響共鳴を與へることもあつた。『何といふ惡者が近くにゐるのだ』とヘスタが獨語を言つた。いや〳〵ながら

眼をあげて見ると、此浮世の聖者の姿以外には、目路のかぎり、人間らしいものは何も無かつたのだ！すべての人の口の葉の噂に依ると、生涯胸の中に冷たい雪を貯へてゐたと言はれる、或眞面目くさつた老婦人の僞善らしい八の字顏にヘスタが會うた時、不思議な姉妹關係が頑固に頭を擡げた。老婦人の胸にあるあの日のさゝぬ雪と、ヘスタ・プリンヌの胸にある燃ゆる耻の表象と、――この二つは何を共通にもつてゐたか。或はも一度電流のやうな戰慄がヘスタに警戒を與へた、――『ご覽、ヘスタ！ここにお仲間がゐる！』で、眼をあげて見ると、ひとりの若い少女の眼が耻かしさうに外所を向いて、緋文字を一瞥して、速かに眼を外らして、頰には微かな冷い深紅を散らし、宛も自分の淸い操がその刹那の瞥見のために汚されでもしたかのやうにしてゐるのを見つけた。あの恐い記號を護身符にした惡魔よ、お前は此憐れな罪人の尊敬すべきものをば、靑年のうちにも、老年のうちにも、何も殘さうとは思はなかつたのか。――斯く信仰を失ふことは、とこしへに、罪の一番悲しい結果の一つである。ヘ

スタ・プリンヌが矢張りどんな同胞も自分のやうに罪深いものは無いといふことを信じようとつとめた一事は、薄弱な意志の犠牲となり、人間の嚴しい法律の犠牲となつた、此憐れな女が、全く腐れきつたものでは無かつたといふ證據として承知してもらひたい。

庶民等は、あの陰慘な昔には、いつも彼等の想像を動かしたものに對して、奇怪な恐怖心を抱いてゐたが、さういつた人々は、われ〳〵が傳說に作りあげることの出來るやうな話を、緋文字に投げ掛けてゐた。彼等の斷言する所に依れば、緋文字は此世の染壺で染められたたゞの緋色の布ではない。地獄の火炎で赤熱してゐるのだ。だから、ヘスタ・プリンヌが、夜、外出した時には、いつも赤熱するのが見えるのだと。そしてわれ〳〵の是非とも言つておかなくてはならぬことは、この緋文字が甚しくヘスタの胸をこがしたので、近代の懷疑思想が承認するらしく思はれる以上の眞理がこの風說のうちに含まれてゐたらしいといふことである。

六　パール

われ〳〵はまだ赤ん坊のことは語らなかつた。あの赤ん坊の罪のない生命、愛らしい不滅の花は、測りがたき神の攝理に依つて、罪深き情欲の豐饒なる茂から發生した。ヘスタがこの子の成長、日ごとに照り輝いてゆく美さ、この子の小さい目鼻の上に震へる光を投げる悧發さを見まもつた時、この悲い女にはそれがどんなに不思議に思はれたであらう。彼女のパール（眞珠の意）！——といふのはヘスタがこの子をさう呼んでゐたから。この名は子供の容貌を表白した名ではなかつた。比較して見ればわかる、あの穩かな、白い、はげしくない眞珠の光は少しも此子の容貌にはなかつたのである。けれどもヘスタは赤ん坊にパール（眞珠の意）といふ名をつけたのは、非常に値段の高いもの、——所有一切をあげて買うたもの、——母親の唯一の寶といふ意味からであつた！實に不思議だ！人間は緋文字でこの女の罪の表象をつけておいた。この

女のやうに罪あるものでなければ、どんな人間の同情もこの女に屆くことは出來なかつた程、力强い、不祥な力を、この文字がもつてゐた。神は、人間がかくの如く罰した罪の直接の結果として、この女に一人の愛らしい子供を與へたまうたのだ。この子供の場所は、あの同じ汚れた胸の上にあつたが、この子の親をば永久に人類の族と子孫とに結びつけ、遂に天國の祝福れた一人となるために、一人の子供を與へたまうたのだ。しかしこの考はヘスタに希望の心を與へないで不安の心を與へた。ヘスタは自分の行爲が惡かつたと知つてゐた、それだから結果がよからうと信ずることは出來なかつた。ヘスタは毎日子供の大きくなる身體を心配しながら檢べてゐた。子供が生をうけた罪に、相應すべき、或暗いあら〳〵しい特性を見出しやしないかといつも心配しながら。

確かに何等身體の缺點は無かつた。この赤ん坊の點のうち所のない完全な形と、元氣と、まだ試されない四肢を悉く使ふ、如何にも自然な巧みとに依つて、この赤ん坊は

エデンに生れてゐても差支はなかつた。この世の初めの親が逐出された後、天使らの玩具となるために彼處に殘されてゐてもいゝ位であつた。この子供は、一點のきずもない美と、いつも一緒に存するものではない、生れながら典雅な所があつた。着物はどんなに粗末でも、一番かくきりと似合うた着物であるといつた風の印象を見る人にいつも與へた。しかしバールは田舍木綿を着てはゐなかつた。母親は、後でよくわかる病的な目的で、彼女の得ることの出來る一番上等の織物を買うて、子供が多くの人人の前で着けた着物の整頓裝飾に、彼女の想像力を思ふ存分働かしてゐたのである。この小さい姿が、かく裝はれた時には、甚だ立派であつた。此子供よりも色褪せた愛らしさならば、派手な着物がその愛らしさをば打消してしまふたかも知れない。其派手な着物全體に、バール自身の生れながらの美の光輝が輝いたので、暗い小家の床の上のバールの周圍には、光輝の全圓がとりまいた。けれども手織の長上衣が荒つぽい遊びのために裂けたり、汚れたりしても、矢張り同じ程完全に彼女を繪のやうに美しく

した。バールの容貌は無限にいろ〳〵な呪文で染まつてゐた。この一人の子供のなかに、大勢の子供らがをつた。百姓娘の野の花の美と、王女の小さいながらも華麗な美との間の、全部の美をそのうちに含めてゐた。しかしながら、全體を通じて、一ふしの情熱、或深みの色は決して失はなかつた。そしてどの變化に於ても、若しバールの色が薄くなるか、蒼ざめでもしたなら、彼女自身たることをやめたであらう、――もうバールではなくなつたであらう！

この外面の變易性は、バールの內生命の種々な特性の表示であり、又それらの特性の公平な表白以上のことを爲さなかつた。彼女の性質は變化と共に深みもあつたやうに思はれた。しかし（でなければヘスタの恐れがヘスタを欺いたのだが）この子供は生れ落ちたこの世の中に對する託委順應を缺いてゐた。この子供は快く規則に承服せしめることが出來なかつた。この子供に生命を與へた時、大法則が破られたのだ。その結果生れた此子を造りなせる要素は、大方美しく燦爛としてはゐたが、皆全く無秩序

か、然らざるも其等の要素獨特の秩序があつたのだ。そのたゝ中に多樣と整頓との要點を見出すことは困難であり、困難でなければ不可能であつた。ヘスタが子供の性質を明らかにし得たのは、（そして其時でも隨分ぼんやりと不完全に）バールが自分の靈魂をば靈界から、身體の組織をば土の材料から吸込んでゐたあの大切な時期の間、ヘスタ自身が果して何であつたかを、思ひ出したからであつた。道德的生命の光線は、母親の精神の激動せる狀態を媒介にして、胎中の赤ん坊に傳へられた。そしてもと〳〵其道德的生命の光線は白く淸かつたけれども、深紅や黃金色の深い汚點、火のやうな光、黑いかげ、中間物質の不鍊の光などを帶びてゐた。就中、あの時期のヘスタの爭鬪が、バールの中に不滅のものとなつた。ヘスタは、荒い、やぶれかぶれの、輕蔑的氣分、氣紛れ、心の中に深く育んでゐた陰鬱と失望の雲のやうなもの〻幾らかさへ、認めることが出來た。今や幼兒の氣質の曙光が是等の氣質を照したが、後年、浮世の荒浪にもまれる時には、暴風と旋風とを捲起す力がある。

當時の子供の訓練は只今よりももつと〳〵嚴しかつた。恐い顏をするとか、烈しく叱るとか、聖書の權威に依て、屢、鞭を用ひるとか、かういふことは單に實際の罪を罰するためばかりでなく、すべて子供の道義心を生長させ向上させるために藥になる制度として用ひられた。それにも拘らず、この一人子の淋い母親なるヘスタ・プリンは、無法に嚴格な敎育をする過失に陷る危險はなかつた。却て自分の過失と不幸とを心にとめて忘れなかつたから、早くから自分の手に托されたこの赤ん坊の不滅の靈に對して、やさしく、而かも嚴しく、是を監督しようと思つた。しかしこの仕事はヘスタの手にはおへなかつた。笑つたり、にがい顏をしたりする効力を試して見て、この二つの方法がいづれも眼に見える程の力がないことがわかつた後は、ヘスタは結局傍によけて、子供の心まかせに放つておかなくてはならなかつた。肉體の强迫や壓抑は勿論その强迫なり壓抑なりがつゞいてゐた間は効力があつた。その他の訓練に關しては、心に加へられても、或は情に加へられても、小さいパールはその刹那の强い氣

紛れに隨つて、それに從ふこともあり、從はぬこともある。パールがまだ赤ん坊の時に、此母親は、パールの或特別な顏付を熟知するに至つた。それは、母親が言張つたり、納得させようとしたり、懇願したりしても、駄目な骨折だといふことを警戒した顏付である。その顏付はごく怜悧な顏付であるが、合點の行かない、ごく片意地な、意趣深いところもある。大概は猛然と起る盛んな血氣が伴うた顏付であつた。ヘスタはさういふ時にはパールが果して人間の子かどうかを疑はずにゐられなかつた。パールは、小家の床の上で暫く奇怪な遊戯をした後で、嘲笑しながら飛去る空幻的な變化のものゝやうにも思はれた。その表情が、子供の荒々しい、光ある、深く黑い眼の中にあらはれた時には、いつも不思議に緣の遠い手にもさはれぬやうな性質をパールに着せた。宛も彼女は空に舞うてゐて、消えるかも知れぬやうに思はれた。何處から來て何處へ行くかわからない、きらめく光のやうに。それを見るとヘスタは據んどころなく子供の方に突進し——絕えず飛行をしてゐるこの小さな變化を追ひかけ、——强い抱

擽と烈しい接吻とを以て自分の胸に掴みとらなくてはならなかつたが、――それは溢るるばかりの愛情のためにではなくして、バールが血肉ある人間であつて、全く空幻のものではないといふことを確めるためであつた。けれど掴まへて見ると、バールの笑は喜びと音樂とに滿ちてゐたとはいへ、母親はさきよりももつと不審を抱かせられた。

ヘスタが高價を拂うて買うて、それより外には世の中といふものゝない、此唯一の寶と、自分との間に屢々起つたこの心を搔亂す刹那のために、悲歎にかきくれて、烈しい涙に暮れることもあつた。その時には、多分――それがどんな影響をヘスタに與へるかは豫め知ることが出來なかつたから、――バールはにがい顏をしたり、小さい拳骨を握つたり、その小さい顏を固くして嚴格な同情のない不滿足の顏付をしたりした。人間の悲を感ずる力なく、又それを知らぬものゝやうに、屢々笑ひかへしたり、前よりも高聲に笑つたりした。或は――が是はもつと〳〵稀にしか起らなかつた――激烈な悲痛のために身體がぶる〳〵震へて、きれ〳〵の言葉で、母親に對する愛を毀

り泣きながら語つて、胸を裂く悲に依て情のあることを熱心に證明しようとつとめたりした。しかしヘスタはあの疾風のやうなやさしさをば安んじて信賴することが出來なかつた。それは疾風の如く來り、疾風の如く去つた。かういふやうなことに思耽つてゐると、母親は幽靈を呼び出しておきながら、魔術の最中に、何か反則をやつたので、この新い不可解の靈を制すべき合言葉を得かねたものゝやうな感じがした。ヘスタのたつた一つのほんとうの慰藉は、子供が安らかに眠つてゐる時であつた。その時には子供を疑はないで、靜かな、悲しい、心地よい幸福の時間を味うた、――多分あいてゐる、まぶたの下からきら〳〵光るあの邪見な表情をしながら、――小さいバールの眼の醒めるまで！

何と速やかに――ほんとに何と不思議な速度で！――バールは母親のお定まりの微笑や無意味な言葉の屆かない所で、社交の出來る年齡にとゞいたことよ。」そして其時ヘスタ・プリンヌが他の子供らの聲々の大騷ぎのうちに打まじるバールの明瞭した、

鳥のやうな聲を聞き、戯れ好きな子供等の一群のこんがらかつた叫びの中に、愛兒の調子を聞きわけて、それを解すことが出來たなら、果して何んな幸福であつたらうぞ！しかし是は不可能の事であつた。バールは子供社會の生れながらのけものであつた。惡魔の子、罪の表象、罪の結果なるバールは、洗禮をうけた幼兒等の中で、何の權利も持たなかつた。この子が一種の本能を以て、自分の孤獨を悟り、自分のぐるりに、破られ得ない圓を描いてゐた運命を悟り、簡單に言へば、他の子供等に對する自分の地位の全然特殊の性質を帶びてゐたことなどを悟つたやうであつた。此本能より著いものは無かつた。これよりさき、ヘスタが牢屋を出てからは、子供と一緒で無ければ人々の眼に觸れることは決してなかつた。まちのあたりを歩く時にはいつもバールも一緒にゐた。初は抱かれてゐる赤ん坊であつたが、後になると、もう母親の小さい伴侶の子供で、一本の人差指に五本でぶらさがり、ヘスタの一歩に對して三四歩の割合で飛び歩いてゐた。バールは、此植民地の子供らが、草の生えた路傍や、家

の闘の所で、清教徒の教育の許す物凄さで戯れてゐるのを見た。多分教會行の遊びとか、クェーカー信者の折檻遊びとか、印度人との發火演習で頭皮剝ぎ遊びとか、魔法の眞似いたづらでお互ひに威かしごつこなどをしたのだ。バールは彼等を見て、注意深く見つめたが、決してお友だちにならうとはしなかつた。話しかけられても返事をしなかつた。子供らがバールのぐるりに集ることもあつたが、若しさういふことがあれば、小さい忿怒のために甚しく恐い樣子になつて、石を拾つて彼等を目がけて投げつけ、鋭い支離滅裂の絶叫を放つた。母親はそれがために戰慄した。何かわからない言葉のうちに、巫女の呪詛のやうな響が甚しくあつたから。

「ほんとの事を言へば、此少年清教徒等は最も偏狹な雛どもであつた。それで、彼等はこの母子のうちには、何か異樣な、氣味のわるい、でなければ、普通のことゝは調和しないやうなものがあつたのだといつたやうな、ぼんやりした觀念をもつてゐた。それだから皆心の中では、この母子を輕蔑した。隨つて舌でもつて罵詈することも稀

ではなかつたのだ。バールはこの感情を感知して、是に報いるに、子供らの胸の中で痛みを永く覺えるものと想像される一番ひどい憎惡を以てした。かういふ獰猛な性質の爆裂は一種の意味があつた。そして母親のためにはそれが慰藉とさへなつた。なぜかと言へば、此氣分には、此子供の表白を屢々邪魔した變り易い氣紛れのかはりに、少くともいくらかの熱心が認められたからだ。それにも拘らず、又、こゝに、昔へスタ自身のうちに存在した惡念の影のやうな反影の發見がヘスタを驚かした。バールはすべての此怨恨や激情をば、他人に讓り渡せない權利に依て、ヘスタの心情から遺傳した。この母子は人間社會からかけ離れた同じ隱れ家に一緒に立つてゐた。そしてバールが生れる前に、ヘスタ・プリンヌの氣を狂はせた、あの不安な要素は、その後母性の和らげる力で鎭められかけたとはいへ、矢張りこの子供の性質のうちに、不滅のものとされたやうに思はれた。

母親の小家の中でも、そのぐるりでも、バールは、廣いいろんな知人の仲間がない

ことはなかつた。バールの常に創造的な精神から、生命の魔力が出た。そしてそれが無數の事物に傳はつた。宛も一つの松火を用ひれば、どこにでも火がつくやうに。ステッキ、襤褸片の束、花、――といつたやうな一番まことらしくないものが、バールの魔術で出來上る人形であつた。さういつたものは何等外部の變化をうけずに、バールの心の舞臺を占めたどんな劇にでも、精神的に適合された。想像になる無數の老若が語り合ふには、バールの一つの赤ん坊らしい聲で澤山であつた。年老いた、黑い、嚴肅な松の木、風のために發するもの凄い呻吟や陰鬱な聲々は、形をかへずに、それをすぐ清教徒の年長者にしてしまつた。庭の一番醜い雜草は清教徒の子供等であつた。バールはそれを最も無慈悲に打擲して根こぎにした。バールが知能を投込んだ夥しくいろんな人間の形は、成程繼續はしないが、何時も超自然的活動をなして突進亂舞し、――宛も甚しく速力の早い燃えるやうな生命の潮のために、勢力が盡果てたやうに、すぐ倒れ、――すぐ同じ荒々しい力を持つてゐる他のものが是に取つてかはり、

極光の夢幻的なきらめきに過ぎぬやうであつた。しかしながらバールの空想の單なる働きと、生長してゆく心の遊戯心とのうちには、立派な才能ある他の子供等のうちに認めることの出來るより以上のものがなかつたのかも知れ無い。たゞバールは人間の遊び仲間がなかつたゝめに、多く自ら創造したまぼろしの群をたのみにしたのである。特異とすべき點は、この子供が自分の心情から造り出した是等すべての子供等に對して抱いてゐた敵愾心であつた。バールは決して友だちを創造なかつた。しかしつも龍の齒をばら蒔にしてゐたやうであつた。するとそこから武裝した敵の收穫が生じた。それでバールはそれと戰ふべく突進した。(註を見よ)こんな幼ない子供がかく不斷に逆な世間を認めてゐたといふこと、及び、それについて起らなくてはならない爭鬪に於て彼女の主義を果すべき力をば、こんなにひどく練習するといふことは、言ふべからざる悲であり、——心のなかでその原因を知つてゐた母親にとつては、どれ程深い悲であつたらうぞ!

ヘスタ・プリンヌはバールを見つめながら、屢々膝の上に仕事を落して、苦惱を隱したいことは山々だつたが、おのづから話ともつかず、呻吟ともつかず、口を出る苦惱のために、叫び出した。——『おゝ天に在す父なる神樣!あなたが矢張りわたくしの父樣でゐらしやるなら、——わたくしが生み落したこのものは果して何でございませう?』そしてバールはこの不意の叫びを洩れ聞きするか、或は何かもつと巧な媒介に依りて、あの苦惱の皷動を悟ると、母親の方に其鮮かな美しい小さな顏を向け、變化のやうな聰明さで微笑して、又遊びを始めた。

この子供の擧動の一の特異な點がまだ一つ言ひ殘してある。バールが生涯のうちで最初に認めたものは——何か——母親の微笑ではなかつた。他の赤ん坊は、小さい口のあの微かな胎兒の微笑に依て、母の微笑に應ずる。後になつてもその微笑は甚だ曖昧に記憶される。そしてそれがほんとに微笑であつたか否やが、非常に愛情の籠つた議論の種子になる。バールは決して此母親の微笑を最初に認めはしなかつたのだ。し

かしバールが最初に氣がついたと思はれるものを――言つて見やうか――それはヘスタの胸にある緋文字であつた！或日、母親が搖籃の上に身をかゞめた時に、赤ん坊は緋文字のぐるりの金絲の刺繍の微光を見つけたので、小さい手を揚げて、それをしつかりと掴み、曖昧でなく、明かに光る微笑を顏に浮べた。それで、赤ん坊の顏がひどく年とつた子供のやうな顏付になつた。それから喘いで呼吸をしながら、ヘスタは不吉な表象を掴んで、本能的にそれを拐りとらうとつとめた。バールの赤ん坊の手の悧發な手ざはりに依て加へられた苦みは限りなかつた。又小さいバールは母親の苦惱の身振りが、宛も自分のために戲れをするのに過ぎぬかのやうに、母親の眼を見つめて微笑した。その時からヘスタは子供が眠つてゐる時の外は決して一刹那の安きをも感じなくなつた。即ち一刹那も靜かにバールを樂むことはなくなつたのである。ほんとに幾週間過ぎても、その間バールの眼が一度も緋文字の上にそゝがれぬことがあつたかも知れぬ。しかし、それから、又、突然の死の襲擊の如く、いつも眼にはあの特有な

微笑と、不思議な表情とを湛へて、バールの眼が思はざるにやつて來た。

多くの母親がよく好んでするやうに、ヘスタが子供の眼中に動く自分の姿を見つめてゐた間に、一たびこの氣紛れな、妖女らしい眼付が子供の眼中にあらはれると、俄かにヘスタは（ひとりぼつちになつて、心が惑亂してゐる女らは、わけのわからない迷ひに惱まされるものだから）バールの眼の小さい黑い鏡の中に、自分の縮圖の肖像でない、別人の顏を見たと思つた。それは惡魔のやうな惡意の微笑を湛へた顏であつたけれども、ヘスタのよく知つてゐた顏に似てゐた。（その顏は微笑むこと希で、微笑のうちに惡意はなかつたけれど。）宛も惡靈がこの子供にとりついて丁度今愚弄しながらのぞいてゐたかのやうであつた。其後幾度となくヘスタは是よりはつきりはしてゐなかつたけれども、同じまぼろしのために惱まされた。

バールが隨分大きくなつて、匍け歩きの出來るやうになつた、或夏の日の午後、彼女は手一杯づゝの野の花を集めて、一つ一つそれを母親の胸を目がけて投げて樂んで

ゐた。緋文字をうつたんびに小鬼のやうに縱横に躍りながら。ヘスタは諸手を組合せて胸を隱したいといふ氣がまつさきに起つたが、高慢か、或は諦めか、或は自分の懺悔の苦行といふものは、この口には言へない苦痛に依つて最もよく完成されるといふ感情からであつたか、ヘスタはむら〳〵と湧き起る強い感情をはねのけて、死の如く蒼ざめて、小さいバールの恐い眼を悲しげに見つめたまゝ直立した。それでも矢張り花は矢丸のやうに飛んで來て、殆どいつも的を脱れずに、母親の胸をば傷を以て一ばいにした。その傷を癒す塗藥を見出すことはこの世に於ては出來ない。又別の世でさがす手段もわからない。とう〳〵矢丸が盡きた。で、子供は黑い眼のはかり難い深淵からのぞいてゐる——のぞいてゐたか否やはいづれにもあれ、母親はのぞいてゐたものと想像した——惡魔のあの小さな笑つてゐる像が眼からのぞくまゝにして、じつと立つてヘスタを見つめた。

『お前は何です』と母親が叫んだ。

『おゝ、わたしはあなたの小さいバールです。』と子供が叫んだ。

去かし、さう言ひながらバールは笑つて、小鬼のやうな滑稽な身振りをしながら、一寸氣紛れを起したら、このつぎには煙筒を登つて飛んで行くと言つた風の樣子で、あちこちと躍り初めた。

『お前はわたしの子ですか、ほんとうに。』とヘスタが問うた。

又ヘスタは全くいたづらに此問をかけたのではなかつた。其瞬間は幾分かほんとに眞面目に問うたのだ。といふのは、バールは驚くべき程悧發だつたので、ヘスタは、バールが自分の生存の秘密の力を知らなかつたであらうか、そして今は自分にあらはさなかつたのであらうかと、半ば疑つたから。

『えゝ、わたしは小さいバールですよ！』と子供はおどけを續けながら繰返して言つた。

『お前はわたしの子ぢやありません！お前はわたしのバールぢやありません！』と母

親は半ば戯談らしく言つた、といふのは最も深酷な苦悩を感じてゐる最中に、むらむらと押へられないふざけたがる心が、ヘスタに屢々起つたから。『そんならわたしに聞かせて頂戴、お前は何です、そして誰がお前をこゝへ御送りになりました。』

『お母さん、わたしに聞かせて頂戴！』と子供はヘスタの處にあがつて來て、膝近くすり寄りながら眞面目に言つた。『わたしに聞かせて頂戴つてば！』

『天のお父様がお前をお送りになつたんですよ！』とヘスタが答へた。

玄かし此言葉を言つた時、ヘスタが躊躇したといふことが、子供の敏感を遁れなかつた。いつもの氣紛れだけに動かされたのであつたか、或は惡靈に動かされたゝめであつたか、子供は小さい人差指を出して緋文字に觸つた。

『神様がわたしを御送りになつたのぢやありません！』と彼女はきつぱりした調子で叫んだ。『わたしには天の父なる神様なんてありません！』

『靜かに！バールや、靜かに！そんなことを言つてはいけません。』と母親が呻吟の聲

を抑へながら答へた。『神様がわたしどもをみんな此世へお送りになつたんです。お前のお母さんのわたしでも、神様がお送りになつたんです。そんなら況してお前なら尙のことですわ！若しか、さうでなかつたら、不思議な惡魔のやうな子、お前は何處から來たんです。』

『聞かせて頂戴！聞かせて頂戴！』とバールは繰返して言つたが、もう眞面目ではなくて、笑ひながら、床を飛びまはつた。『あなたは聞かせて下さらなくてはいけません！』

玄かしヘスタは自分で疑惑の物凄い迷路の中にゐたので、此質問を解釋することが出來なかつた。この子の父親を他所に求めて得ず、この子の幾らかの奇異な性質を認めて、可憐な小さいバールは惡魔の子だと言つた、近處の町人の話をば、――微笑と戰慄と半ばしつゝ、――ヘスタは心にかけて忘れなかつた。人々は昔のカソリック時代このかた、母親の罪に依り、そして或汚れた惡い目的を增進するために、折々地上

に見られたことのあるやうな惡魔の子だと語つたのである。ルーテルは、敎敵の誹謗に依ると、あの惡魔眷屬中のひとりの餓鬼であつたのだ。且又バールは新英洲の淸敎徒等のうちで、この不祥な素性をあてがはれたつたひとりの子供ではなかつたのだ。

註、一、カドマス（Cadmus）がペオシアのダーシイの泉を護つてゐた龍を殺して、其龍の齒を蒔いた。するとそこから大勢の軍人が生じた。そしてカドマスを殺さうとして圍んだ。ミチルゼアの愚言に依て、カドマスは其軍人らの間に寶石を投げた。軍人らはそれを得ようとして爭うて互ひに殺しあうた。

澤田正作生

七　知事の廣間

ヘスタ・プリンヌは或日一對の手袋を持つて、ベリンガム知事の館へ來た。彼女は知事の註文に隨つて、それに縁取や刺繍をしたのだ。それは何か威儀ある儀式の際に着けるべきものであつた。以前の此主權者は公衆選擧の機會で、最高の位から一二段やむなく降りなくてはならぬやうになつたとはいへ、この植民地の官邊の中では矢張り尊い有力な地位を占てゐたから。

ヘスタ・プリンヌが、此時植民地の事件に非常な權力と活動とをもつてゐた人物と會見しなくてはならなくしたのは、一對の刺繍をした手袋を渡すといふことよりも、別のもつと重大な理由からであつた。是より先き宗敎と政治とには人よりも嚴格な原理を抱いてゐた重立つた或住民の方に、ヘスタから子供を奪ひ取らうとする計畫があつたといふことが、ヘスタの耳に入つてゐた。前述の如く、バールが惡魔の種子であ

つたといふ推定の下に、彼等は此母親の靈魂に對してもつてゐる基督教の權利が、ヘスタの道から斯る邪魔物を取のけることを要求すると論じたのは道理がないではなかつた。是に反して、若し子供に道徳心や宗教心が眞に發達してゆく能力があり、究局の救濟の要素があるならば、その時には、確かに、ヘスタ・プリンヌよりもつと賢明な善い後見に移さるゝことに依て、もつと有望に是等の利益を悉くうけられるであらう。この計畫を立てた人々のうちで、ベリンガム知事は最も心を摧いた人々のうちの一人だと言はれた。後年、都會の市務委員の權よりも高い權に訴へられることは無かつたであらう此種の事件は、當時は公論の問題になり、顯要の地位にある政治家がその一方の味方をしたことは、奇異に思はれるかもしれない。そして實に、少なからず馬鹿げて見えるかも知れないけれど、あの原始的な素朴の時代には、ヘスタとヘスタの子供の福祉よりももつとつまらない公けの利害のことでも、もつと眞に重大でないことでも、不思議に立法官等の審議と法令が交渉つてゐた。豚の所有權に關する

爭論が、この植民の立法部で激烈辛辣な鬪ひを起したばかりでなく、その結果、立法部の組織そのものに重大な變更を加ふるに至つたのは、先づこの物語の時期より早くは無かつた。

それ故心配に滿ちて、――けれど一方は社會の公衆、片方は、子に對する自然の愛情を加勢にもつた孤獨の婦人、どうせ話にならぬ仕合だとは殆ど思はれぬ程に、彼女は自分の權利を自覺して、彼女の一つ家から出掛けた。小さいパールは言ふまでもなく一緒に連立つた。もう輕快に母親のそばを驅けたり、朝から晩まで、絶えず身體を動かしたりする年齢になつたので、以前よりはもつと長い旅をすることが出來たのであらう。パールは屢已むを得ないからではなく、寧ろ氣紛れから、せがんでせがんで抱かれるかと思ふと、すぐ同じやうに忙しくなくしてまた降ろしてもらひ、草の生えてゐる通路の上をヘスタの前に立つて、ふざけまはつて進み、隨分轉んだり躓いたりしても、怪我もしなかつた。われ〳〵はパールの立派なゆたかな美、――深い鮮か

な色で輝く美、晴れやかな容色、強度の深さと光輝とを含んでゐる眼、深いつや〳〵した鳶色の、後年には殆ど黒と同じ色になるべき髪、さういふことに關しては既に話した。パールのうちに、パールの全身には餘があつた。パールは情の激する一刹那の思設けぬ蕾と思はれた。母親は子供の着物を工夫するに際しては、自分の想像力の絢爛たる傾向を思ふ存分働かして、金絲の意匠や、飾模様を夥しく刺繍した、特別の裁ち方の、深紅の天鵞絨の上衣をパールに着せた。其餘りに強い色合の濃さは、パールよりも薄い櫻色の頬なら、却て蒼白い色艶のない樣子になつたに違ひないが、パールの美しさには、その濃い色合も見事に適合して、パールは地上に躍つたものゝうちで最も赫奕たる小さい餘の噴出そのものゝ觀を與へた。

しかしこの着物と、それからこの子供の樣子全體とを見る人々は、ヘスタ・プリンヌが胸の上に着ける運命を負はされたあの表象を、どうしても、のつぴきならず、思出さゝるを得なかつた。是れ其著しい特色であつた。それは別の形の緋文字であつた

のだ、生きた緋文字であつたのだ！此母親自身は――宛も赤い恥の表象が彼女の腦髓の中に深くこげついて、彼女の思ひが悉く緋文字の形になつたかのやうに――注意深く、類似物を作つたのだ。彼女の愛情の對象物と、彼女の罪と苦惱の表象との類似を創造せんと、多くの時間を病的な工夫に費しながら。しかし、ほんとに、パールはヘスタの罪と苦惱との表象でもあり、愛の對象物でもあつた。此同一性がなかつたら、ヘスタは緋文字をパールの樣子で表出しようと全く工みはしなかつたらう。

この二人の旅人が、都會の區域内に來ると、清教徒の子供らは、彼等の遊戯から、――でなければ、あの陰氣な小さな頑童どもに遊戯と思はれたものから――眼をあげて、生眞面目に、語合うた。――

『ほんとに御覽、緋文字の女だよ。そのうへに、ほんとに、あの女のそばを驅けて行く緋文字に似たものがゐるよ！さあ、だから、あいつらに泥を投げてやらうぢやないか！』

しかし子供ながら慓悍なバールは、八の字を寄せたり、地團太を踏んだり、いろんな威かす振りをして小さい手を振つたりした後、不意に、敵の群を目がけて突進した。そして彼等を皆追ひ掃つた。猛烈に彼等を追窮して行つた時のバールは、流行病の赤ん坊、猩紅熱、或は何かさう言つた（半分羽のある）審判の天使――彼の使命は青年社會の罪科を罰するにある――に似てゐた。確かに逃亡者の心臓をうちに戦慄させた恐い音量を以て、バールも叫喚したり、絶叫したりした。勝利を得ると、バールは静かに母親のとこへ歸つて、微笑しながら、仰いで母親の顔を見つめた。

是より外珍事もなく、ふたりはベリンガム知事の住宅に着いた。知事の住宅は大きい木造の家であつた。さういつた建て方の住宅は古い都會の街道に現在尚殘つてゐるが、今は苔に蔽はれ、崩れんとして、そのうちに行はれた悲喜哀歡の多くの事件が心の中に幽愁を與へる。それらの事件は薄暗い部屋で起りて過ぎゆき、今は記憶に殘つてゐるのもあり、全く忘れられたのもある。しかし當時は、家の外部には、新き年の

新味があり、決して死が入りこんだことのない人間の住宅の、日あたりのいゝ窓から輝き出る喜ばしさがあつた。ほんとに、住宅は喜ばしさうな樣子であつた。壁は一種の漆喰で蔽はれてゐて、その中には破れ硝子が夥しく混つてゐた。そこで、日光が斜に建物の正面に落ちた時、宛も兩手一ぱいにダイヤモンドを投げつけたかのやうにきら〳〵した。其光輝は嚴肅な老清教徒執政官の館よりも寧ろアラディンの宮殿に相應してゐたかも知れない。建物はまた當時の奇怪な趣味に適した、不思議な、外見には神秘な肖像や圖で飾られてゐた。それは漆喰が新たに塗られた時畫かれて、堅く固くなつたのだ、後世の歎賞のために。

家の、この光る不思議を見て、バールは飛んだり跳ねたりし初めた。そして家の正面から、廣い日光全部を剝ぎとつて、遊び道具に貰ひたいと要求した。

『いゝえ、バールや、』と母親が言つた。『お前は自分の日光を集めなくてはなりません。わたしはお前にあげるものはないんです。』

ふたりは入口に近づいた。入口はアーチ形になつてゐて、兩側には狹い塔若しくは出つ張りがついてゐる。二つとも格子窓で、緊急な場合にはその上に木造の鎧戸がしまる。ヘスタ・プリンヌは玄關口に吊してある鐵鎚をあげて、召出をした。すると、知事の奴隷が一人――聲に應じて出て來た、――此男は生れながら公民の權利と自由とをもつてゐる英吉利人であるが、今は七年の奴隷である。七年の間は主人の財產で、牡牛とか、組立椅子とかいふ、有價財產讓渡契約品と少しもちがはない。此農奴は藍色の着物を着てゐた。それは當時及びそれより餘程以前から、英吉利の古い世襲の住宅に於ける召使の不斷着であつた。

『ベリンガム知事樣は御在宅でございますか。』とヘスタがたづねた。

『え、御在宅でございます。』と奴隷は、目をまんまるにして緋文字を見つめながら答へた。此國に初めて來たものなので、以前には見たことが無かつたのである。

『え、閣下は御在宅でございますが、信心な牧師樣がお二人と、それから御醫者樣

がゐらしやいますから、今閣下にお目にかゝれますまい。』

『でもわたくしは入ります。』とヘスタ・プリンヌは答へた。奴隷は彼女の態度の決然たる所と、胸に輝いてゐる表象とを見て、この女はこの國の偉い婦人とでも思つたのであらう、何の抗議もしなかつた。

そこで母子は玄關の廣間に通された。建築材料の性質、風土の異同、ちがつた社會生活が思はせる、澤山の變化はありながら、ベリンガム知事は本國の相應な資產のある紳士の住宅にならつて新宅を設計したのである。それで新宅には廣いそして可なり高い廣間が、ずつと家の奥全體に廣がつてゐる。其廣間は、多少直接に、すべての他の部屋部屋と通行をする媒介となつてゐる。この手廣な部屋は、一つの端のところで、二つの塔の窓で明りがとられる。窓は玄關の兩側に小さい凹みをこさへてゐる。も一つの端では、部屋が半分カアテンで包まれてゐるけれど、あの弓形の廣間の窓の一つで、もつと強い明りがとられる。是に就てはわれ〳〵は古い書物で讀んだ。そこには

窗附の椅子がおいてある。窗の上には、多分英國の編年史か、何か他のしつかりした書物の二つ折の大冊が一部置いてある。宛も是は現代に於て、たまの客が頁をかへすために、眞中の卓に、いろんな金緣の書物を散亂しておくやうなものである。廣間の道具は、いくらかの重い椅子(それの脊には丹精して擬の花輪の彫刻がしてある)と、同じ趣味の一つの卓である。全體がエリザベス時代のものであるか、或はそれよりも早いもので、知事の父の家からこちらへ持つて來られた遺產であらう。卓の上には——古い英國の歡待の心がまだふり棄てられてゐないゑるしに——大きい白鑞の大盃があつた。若しヘスタかパールかがその底をのぞき込んだら、今飲んだばかりの一杯のビールの泡だらけの殘りを見たかも知れない。

壁の上にはベリンガム家の先祖等を表はした一列の肖像畫が懸つてゐる。或者は胸の上に鎧をつけ、或者は立派な綿領と平服とを着けてゐた。それらは皆古い肖像畫がつも裝ふ峻嚴と嚴格の特色を帶びてゐた。丁度是等の肖像畫は皆亡くなつた偉人の肖

像といふよりは、寧ろ幽靈の如くであり、生きてゐる人々の仕事や快樂を嚴しく、假借せずに批難して、凝視してゐたやうであつた。

廣間の壁に並べられた擬板の殆どまん中には、一組の鎖帷子が吊されてあつた。是は肖像畫のやうに、祖先の遺產ではなく、最も近代のものであつた、といふのは、是はベリンガム知事が新英洲に渡つた其年、すでに倫敦の巧みな武具師が造つておいたものだから。鋼鐵の頭甲、胸甲、頸甲と脛甲、それから一對の籠手と、下には一本の劍が垂れてゐた。すべてのものは、殊に冑と胸甲とは、白光で輝き、床の上の到る處に光輝を蒔散らした程磨かれてあつた。此光る甲冑はたゞ無駄な見えのためでなく、知事が多くの檢閲や練兵場で着たものなのだ。其上ベコト戰爭の際には(一六三六—三八、コンヂクチカットのパコト・インデアンと植民との戰爭)一聯隊を率ゐて是が輝いた。といふのはベリンガム知事は法律家になるやうに育て上げられたので、自分の職業伴侶としては、いつも、ベーコン、コーク、ノーエ及びフィンチなどの名を口癖にしてゐたが、此新開國の種々差迫つた事情は、

この人を政治家で執政官であると共に一個の軍人に化し去つてしまつたからだ。

小さいバールはこの家のきら〳〵する入口が氣に入つたと同じやうに、ぴか〳〵する甲冑も大いに氣に入つた。小さいバールは、暫くの間、鏡のやうに磨かれた胸甲を見つめてゐた。

『お母さん』とバールが叫んだ。『こゝにお母さんがゐます。ご覽なさい！ ご覽なさい！』

ヘスタは子供の機嫌をとるためにじつと見た。そしてこの凸面鏡の特種のうつり具合によつて、緋文字がヘスタの樣子のごく著しい特色となつた程、法外に巨大に表現されたのを見た。ほんとに、ヘスタは緋文字のうしろに全然隱れてしまつたやうに思はれた。バールは又頭甲にうつる同じ繪を指さして、小さい相貌の上にあらはれたいつもの表情の惡魔らしい悧發さを浮べて、母親に向つて微笑した。あのいたづらなふざけてる顏付も、非常に廣く强く鏡に反射した。それでヘスタ・プリンヌは其像が自

分の子供の姿ではなかつたかのやうな感じがした。バールの形に、自分の身體を造らうとしてゐた小惡魔の像であつたかのやうな感じがした。

『こちらへいらつしやい、バールや』とヘスタはバールを引張りながら言つた。『この美いお庭を見にいらつしやい。多分彼處には花があるでせう。森の中のよりもも、つと美いのが。』

それでバールは廣間のむかうの端の張出し窓のとこへ驅けて行つて、庭の小徑の並木路を見わたした。小徑の上は切込んだ草が絨氈のやうに蔽ひ、その緣は手ひどく早く伐られた灌木が並んでゐた。しかしこの持主は、土は堅く、根づきの極めて骨の折れる太西洋のこちらでは、裝飾園藝に對する英吉利本國の趣味を永久に傳へようとする努力をば、望みがないものとして已にそれを放棄してゐたやうに思はれた。キャベツはすぐ見える所に生えてゐた。そして少し離れた所に根を下ろした南瓜は、間にある空間を掛越して來て、廣間の窓の丁度下のところに自分の巨大な產物の一つを置い

た。宛もこの大きい青物の金塊は、新英洲の土がこの知事に捧げたとかはらぬ立派な裝飾であつたと知事に注意したかのやうに。しかし僅かな薔薇叢と一群の林檎の木があつたが、是は大方われ〳〵の昔の歴史のうちに、牡牛の脊に乘つて歩いてゐる、あの半分神話的の人物、この半島の最初の植民であつたブラクストン師が植ゑたものゝ子孫であらう。

バールは薔薇叢を見ると、赤い薔薇をせがんで泣出して、なだめても慊しても聽かなかつた。

『お前、お默り、お默り！』と母親が熱心に言つた。『かわいゝバールさん、泣いちやいけません！お庭で聲がします。知事さんがいらつしやいます、それから他の方も御一緒に。』

ヘスタの言つた言葉に違はず、一群の人々が庭の並木路に沿うて、家の方へ近寄つて來るのが見えた。バールは自分を靜めようとした母親の企を全く輕蔑して、物凄く

絶叫して、それから默つた。それも何等從順といふ考からではなく、彼女の氣質の敏捷な動き易い好奇心が、この新い人物のあらはれに依て刺戟されたからであつた。

八　鬼ッ子と牧師

ベリンガム知事は、老年に近い紳士が靜かに獨り家にゐる時に好んで着るやうな――寛濶な略服と、心地よい頭巾とをつけて、眞先に立つて歩いた。そして自分の地所を見せびらかしたり、もくろんだ改良のことをくど〳〵と話してゐる樣子であつた。灰色の髭に蔽はれたゼームス王朝時代の古風な、精巧な綴領の廣い襟のために、彼れの首は大盃の中のバプテスマのヨハネの首に酷似してゐた。容貌はどく嚴しく、初老を越えた年齢のために凍傷いてゐたので、彼れの容貌からうける印象は、彼れが明かに全力を盡して自分の周圍に集めた浮世の快樂の道具とは、殆ど調和しなかつた。しかしたとひわれ〳〵の嚴肅な先祖らが人生を單に患難戰鬪の場と言つたり考へたりしつけてゐたとはいへ、また義務の命令に依ては眞面目に財と生命とを犧牲にする覺悟をもつてゐたとはいへ、――仕合せよく自分の掴むことの出來る所にあるやうな、快

樂奢侈の手段を棄てる事を、良心問題にしたと想像するのは誤謬である。例へば今べリンガム知事の肩越しに積雪のやうに眞白な髭をあらはした尊敬すべき牧師ジョン・ウィルソンの如き人は、この教義を決して說かなかつたと同時に、彼れは梨と桃とは矢張り新英洲の風土に移植されるがよいとか、紫の葡萄は日當りのよい庭の石垣に對して繁茂させなくてはならないとか、それとなく言つたものだ。英國教會の富有な懷で育てられたこの老牧師は、あらゆる善いもの、心地よいものに對しては、定まつた正當な趣味をもつてゐたので、講壇の上や、ヘスタ・プリンヌのやうな犯罪を公けに咎める際とかには、どんなに嚴正であつても、矢張り彼れの私的生活の慈悲心のために、彼は當時の同じ牧師仲間の何人がうけたより溫い愛情を人々から贏ち得たのである。知事とウィルソン氏との後にもう二人の客が來た。――一人はアーサ・デムスデール師で、この人は、已にヘスタ・プリンヌの耻の場で短いいや〳〵の役をつとめたから、讀者はこの人を御忘れではあるまい。それからこの人とくっついて一緒に來たのは、

老練の醫師ロジア・チリングウオルスで、この都會に移住してからもう二三年になるのである。この學者は若い牧師の友であると共に彼れの醫者でもあつたのは言ふまでもない。といふのは、この若い牧師は近頃いろんな教會上の働きや、義務のために、餘り無茶な献身的の働きをしたので、甚だしく健康を害してゐたから。

客人等の先きに立つた知事は、階段を二三段登つて、大きい廣間の窓の扉を押あけると、自ら小さいバールのそばに來てゐたことを悟つた。カーテンの蔭がヘスタ・プリンヌに落ちて、いくらか彼女を隱した。

『こゝにゐるのは何者だ』とペリンガム知事は、自分の前の緋色の小人物を吃驚して見ながら言つた。『宮廷の假裝會に入場を許されるのが非常な優遇だと思つてゐた、老ゼームス王時代ごろの、わたしの虚榮の時代このかた、こんなものは見たことがほんとにない！祝日にはこんな小さい幽靈の群れがいつもゐて、お祭のお世話方の子供等と言つてゐたのだ。けれどこんなお客はどうしてわたしの廣間にはいつて來たのだ。』

『あゝ、まつたく！』と老年のウィルソン氏が叫んだ。『こりや何て眞赤な羽毛の小鳥だらう。丁度こんな姿は、太陽が、立派に彩色した窓にさし込んで、床の上に黄金色や深紅の形を寫してゐた時に見たやうに思はれる。けれどあれはこゝぢやなかつた。お前、名は何といふの。何だつてお母さんがこんなに奇妙な美しい着物を着せなすつたの。お前は信者の子かい、――え？　問答書を知つてるかい？　でなきや、お前はあのいたづらな小鬼か仙女の一人なのかい。外の羅馬教の靈寶と一緒に、愉快な舊英國において來たと思つた、……』

『わたしはお母さんの子ですよ。』と眞赤なまぼろしが答へた。『バールといふ名なんです。』

『バール（眞珠）か！　いつそルビーだ！　珊瑚だ！――赤薔薇だ！　お前の色から判斷すると！』と老牧師は小さいバールの頰を撫でようとして、空しく手を伸ばしながら答へた。『けれどそのお母さんは何處にゐるの。あゝ成程』、と彼れは言ひ足した。そして

ベリンガム知事の方に向いて、低聲で、『是は今わたしどもが相談した、あの子供です。母親のヘスタ・プリンヌ、あの不幸な女を御覽なさい！』と言つた。

『あなたは不幸だなんて有仰るんですか』。と知事が叫んだ。『いや、こんな子供の母親は、きつと姪婦にちがひない、バビロンの姪婦（默示錄十七章）の立派な標本にちがひない、と裁斷されないことはありません。けれど、都合のいゝ時に來てくれたんだから、すぐ此事件を調べませう。』

ベリンガム知事は窓を通りぬけて廣間に入つた。三人の客はうしろについて來た。

『ヘスタ・プリンヌ』、と彼れは緋文字を着けてゐた女に、生れながらの峻嚴な眼をそそぎながら言つた。『近頃お前に就ては非常に問題があつたのだ。重大な論點は、われわれ官吏たるものが、あの子供の中にあるやうな不滅の靈魂をば、この世の陷穽の中に躓いて落ちこんだものゝ指圖に任せておいて安心がなるかどうかといふことであつたのだ。母親のお前、言つてみい、お前の子がお前の監督を離れ、目立たない着物を着

けて、嚴格な訓練をうけ、天地の眞理で教育される方が、お前の子の浮世の幸福でもあり、未來永劫の幸福でもなからうか。この事に就てはお前は子供のために何が出來るのだ。』

『わたくしは、是から學んだことを、わたくしの小さいパールに教へることが出來ます。』とヘスタ・プリンヌは緋文字にそつと指を觸れながら答へた。

『お前、それはお前の恥の表象だ！』と峻嚴な知事が答へた。『その文字が表示してゐる汚點があればこそ、お前の子供を外の手に移したいのだ。』

『けれども』と母親は愈々蒼白になつて來たが、落ちついて言つた。『この表象はわたくしにいろんな教訓を教へてくれました、――毎日教へてくれるのでございます、――今といふ今でも教へてゐるのでございます。それに就ては、わたくしの子供は、わたくしよりもよくわかるよいものになるかも知れません。わたくしには何の役にも立ちませんけれど。』

『愼重に裁斷しませう』とベリンガムが言つた。『そして是からやらうとすることをよく見ませう。ウィルソンさん、どうぞこのバールを調べて見て下さい。――バールといふのが名なんだから、――と、これ位の年齢の子供にふさはしいやうな信者の教養があるか、どうか見て下さい。』

老牧師は肱掛椅子に坐つて、バールを膝の間に引張らうとつとめたが、子供の方では、母親の外には誰れにも、さはられたり、猥れ猥れしくされたりしたことが無かつたので、あいてゐた窓から遁げ出して、階段の上段に立つた、その有樣は、上空に冲り入る覺悟をした、羽毛の立派な熱帶の野の鳥のやうであつた。ウィルソン氏はこの騷ぎに少なからず吃驚したけれど、――といふのはこの人はお爺さんらしい人物で、いつも子供等に非常に好かれる人物であつたから――吟味を進めようとした。

『バール、』と彼れはごく嚴肅に言つた。『お前は敎へに注意しなくちやならない。そしたらそのうち價の高いバール(眞珠)を胸に着けるやうになる。お前を造つた方は誰

れだか言へるかい。』

さてバールは誰が自分を造つたかはよく知つてゐた、といふのは、ヘスタ・プリンヌは敬虔な家庭で娘になつたのだから、いつか天父のことに就て子供と話をしてから間もなく、どんな未熟な時期に於ても、人間の靈が隨分熱心な興味を以て吸ひ取る所の眞理をば、バールに知らせ始めてゐたからである。それ故バールは――此の三年の生涯の學問は非常なものであつた――新英洲祈禱初歩や、ウエストミンスタ問答書の初の欄の試驗なら、此の有名な書物のどちらのも、外形はよく心得てはをらなかつたが、立派にうけられたであらう。しかし旋毛曲りの心はどの子供らでも多少有つてゐるものなのに、小さいバールは他のものより十倍も有つてゐたので、旋毛曲りの心が、今、この一番間の惡い刹那に、バールを全く占領してしまつて、彼女の唇を鎖した。でなければそでない言葉を强ひて語らせたのだ。バールは無禮にも、指を口に入れて、ウィルソン氏の問に答へることを幾たびか拒絶した後、とう〳〵、自分は全く誰にも

造られたものではない、監獄の戸のそばに生えた野茨の藪から母親に摘取られたのだと言つた。

バールはこちらへ來る時に通つて來た監獄の茨藪の回想と、その時彼女は窓のそとに立つてゐたので、つひ近くにある知事の赤い薔薇が、此空想を大方彼女に思ひつかせたのだ。

ロジア・チンリグウオルス老人は微笑を顏に浮べて若い牧師の耳に何事かを耳語いた。ヘスタ・プリンヌは此醫者を見て、自分の運命の安危の決する瀨戸を控へた其時にも、この人を親しく知つた時よりこのかた、この人の容貌の甚しく變つてゐたことを見て吃驚した。この人の容貌が如何に甚だ醜惡であつたか、如何にこの人の黑い容貌がもつと〳〵黑くなつてゐるやうに思はれたか、そしてこの人の姿は益々不具になつたやうに思はれたか。ヘスタは一寸男の眼を見たが、すぐ今進行してゐた場面に有らんかぎりの注意を向けなくてはならなかつた。

『是は恐しい！』と知事はバールの答ですつかり吃驚させられた驚きから徐ろに心をとり直して叫んだ。『こゝに三歳の子供が、誰が自分を造つたか言へない。疑ふまでもなく、自分の魂や、現在の墮落、未來の運命といふことに就ても同樣に何もわかつてゐない！ 皆さん、是以上吟味をする必要はないやうに思はれますが。』

ヘスタは殆ど獰猛な表情をして老清敎徒の知事に對しながら、バールをつかまへて、強く抱き寄せた。世の中にたつたひとり投棄てられて、自分の心情を生かしておくたつた一つの寶だけしか無いヘスタは、自分が世の中に向つて動かすべからざる權利を持つてゐると思ひ、死に至るまで此權利を護らうと覺悟した。

『神樣がこの子をわたくしに下すつたのでございます。とヘスタが叫んだ。『それ以外のものを、あなた方はみんなわたくしからお取りになつた代りに、神樣が此の子をわたくしに下すつたのでございます。』この子はわたくしの幸福でございます。——けれどまたわたくしの苦みでございます。バールはこの世にわたくしを生かしておいて

くれるのでございます。パールもわたくしに罰を與へます。パールは殆ど惡むことの出來ない、それでわたくしの罪のために罰の力を百萬倍も備へてゐる緋文字であると御覽にはなりませんか。あなた方は此の子をお取りになつてはいけません。わたくしはさきに死んでしまひます！』

『不幸な婦人よ、』とごく親切な老牧師が言つた。『この子供はよく目をかけてやらなくてはならないのだ。お前の出來るよりももつとよく！』

『神様がこの子をわたくしの手にお與へ下すつたのでございます。』とヘスタ・プリンヌは殆ど叫ばんばかりに聲をあげて、繰返して言つた。『この子をお渡しはいたしません！』こゝで彼女は俄かに思起して、この刹那まで殆ど一度も眼を向けようともしなかつたやうであつた若い牧師、デムスデールの方に向いて叫んだ。『わたくしのために有仰つて下さいまし！あなたはわたくしの牧師様で、わたくしの魂を預かつて下さいましたのでございますから、この方々よりももつとよくわたくしを御存じでございます！わたくしはこの子を奪られたくはないのでございます！わたくしのために有仰つて下さいまし！あなたは御存じでございます、――あなたは、この方々が持つていらしやらない同情を持つていらしやいますから、――あなたは御存じでございます、わたくしの心の中に何があるか、母親の權利は何であるか、その母親が自分の子供と緋文字だけしか持つてゐない時には、その權利がどれ程強いものであるかといふことを！わたくしの申すことに氣をつけて下さい！わたくしは子供を奪られたくはないのでございます！氣をつけて下さいまし！』

この穩かならぬ不思議な懇願は、境遇のためにヘスタ・プリンヌが全く氣狂になつたといふことを示したが、この懇願を聞くと、件の若い牧師は直ぐに前み出た。彼れは蒼ざめて、胸の上で手を握つてゐた。是はこの人の特別な神經質が激動された時にいつもする習慣であつたのだ。われ〳〵がヘスタの公けの耻の場で彼れの樣子を描いた時よりも、今はもつと心配のために痩衰へたやうであつた。そして健康が衰へたの

であつたにしても、或はその原因は何であつたにしても、彼れの大きい眼には、濁つた陰鬱な深みの中に苦みの世界があつた。

『ヘスタの言ふことには眞理があります。』と牧師は震へるい丶聲をして強く言ひかけた。すると廣間が反響して空洞な鐘が鳴つた。――『ヘスタの言ふ所にも、ヘスタを感激させてゐる感情にも、眞理があります！神樣はヘスタに子供と、それから子供の性質と子供の要るものを本能的に知る知識とをお與へになりました。是は兩方とも外から見ると極く奇妙で――誰も外の人間の持つことの出來ないものであります。且又この母親とこの子供との關係には恐い神聖と言ひたやうなものはありやしませんか。』

『あ丶！それはどういふわけですか、デムスデールさん、』と知事が遮つた。『それを明瞭して下さい、どうぞ！』

『ますます〻さうであるに違ひありません。』と牧師は言ひつ丶けた。『若しわたくしどもがさう考へないとすれば、それに依つて、わたくしどもはすべての人間の創造主なる天の父は、罪の行爲を輕く認めて、汚れた肉欲と聖い愛との區別を重んじたまはなかつたと言へやしないですか。父親の罪と母親の耻との種子の此子供は、神の手から降つたもので、極めて熱心に、極めて悽慘な心でもつて、子供をそばにおく權利を主張する母親の心に、多くの方法で感化を與へるためでござります。是は祝福のためでありました、――この女の生涯のたつた一つの祝福のためでありました。是はこの母親が話したやうに、確かに、應報のためでもありました。思ひも掛けず屢々經驗する苦痛のためでありました。不安な喜びのまん中の激痛、刺痛、絕えずぶりかへる苦惱のためでありました！この女はこの考をあの不愍な子供の着物で表はしてゐるのではありませんか。胸を焦す赤い表象をごく強くわたしどもに思ひ出させて。』

『天晴れだ！』とウィルソン氏が叫んだ。『わたしは此の女は子供を野師にするよりい丶考はなからうと思つてゐた。』

『お丶、さうぢやありません！　さうぢやありません！』とデムスデールがつ丶けて

言つた。『此子供の生存に神様がなすつた嚴そかな奇蹟をヘスタは認めてをります。そして、――ごくほんとの事だらうと思はれるのは、――この惠の目的は、他の何よりもまさつて、この母親の魂を生かしておくことゝ、この惠みがなかつたらサタンが投込まうとしたかも知れない、もつと暗黑な罪の淵に落ちぬやうにこの母親を護ることであつたといふことをも、ヘスタは感じてゐるかも知れません。それ故、この不幸な罪深い女が、子供の不滅の靈魂、即ち永遠に喜び悲むことの出來るものを托されたといふことは、よいことです。この女が正義にしつけることの出來るものを托されてをり、いつも自分の墮落を思出させるけれど、謂はゞ造物主の聖なる約束に依て、この女が子供を天國に連れて行くなら、子供も親を天國に連れて行くだらうといふことを、この女に敎へることの出來るものを托されたといふことは、よいことです。この罪を犯した母親の方が、一緒に罪を犯した父親よりも幸福な點はこゝにあるのです。それでヘスタ・プリンヌのために、それから又同じやうに、不幸な子供のために、わ

たしどもは神様が彼等をおくに適當と見たまふたまゝにしておきませう！』

『あなた、あなたは不思議に熱心ですね。』とロジア・チリングウォルス老人がデムスデールに微笑しながら言つた。

『そしてわが若い兄弟が言はれた事には重大な意味があります。』とウィルソン師が言足した。『ベリンガム閣下、あなたのお考はいかゝでございます。不幸な女のための立派な辯論ではございませんか。』

『實にさようです。』と知事が答へた。『そしてわたしどもはこの事件を現在のまゝにしておきたいとも思ふ程の論證です。少くとも、この女に是以上の不しだらをさせないかぎりで。けれどよく注意して、あなたなり、或はヂムスデールさんなりの方で、子供には問答書の適宜な定期の試驗をして戴かなくてはなりません。且又適當な時には、町役人が、子供に學校と集會とにゆくやうに留意しなくてはなりません。』

若い牧師は、話をやめるや否や、群から數歩引退いて、いくらか顏を窓カーテンの

重い折目に隠して立つてゐた。そして日光が床の上に投げた彼れの姿の影は、彼れの切訴のはげしさのために震へた。あの荒い氣紛れな小鬼のバールは牧師の方へこつそり行つて、兩手で堅く牧師の手を握つて、牧師の手に自分の頰をすりつけた。それが如何にもやさしい遠慮がちな接吻だつたので、はたから見てゐた母親は『あれがわたしのバールか』と自問した程であつた。しかしヘスタは子供の胸の中に愛があることを知つてゐた。それは多く激情となつてあらはれた。そしてバールの生涯のうちには、殆ど二度と今のやうなやさしい心で和らげられたことは無かつた。牧師は、(長く求めてゐた女の愛以外には、此子供らしい愛情の表徵よりよいものは何もないから。此愛情は精神的本能に依て自發的に與へられるが故に、何かわれ〳〵のうちに眞に價値あるものがあるらしく思はれる)、牧師はあたりを見て、子供の頭に手をおいて、一寸躊躇して、それから子供の額に接吻した。小さいバールのこの珍らしい氣分はもう續かなかつた。バールは笑つて、ごく快活に跳ねながら、廣間をさがつて行つた。それで

老ウィルソン氏は趾端ぐらゐは床についてゐたのかを疑つた。

『この小さいお轉婆娘は魔術をもつてゐるのだ。』と彼はデムスデール氏に言つた。

『あの子は老媼の箒の柄などは要ないで飛べる!』

『珍らしい子供だ!』とロジア・チリングウォルス老人が言つた。『この子供のうちに母親の一部を見ることは容易だ。皆さん、この子供の性質を分析して、その組織から父親を鋭く推量することは哲學者の研究に不可能のことでせうか。』

『いや、かういふ問題で世間哲學の原理に隨ふのは罪でせう。』とウィルソン氏が言つた。『是がために斷食し祈禱をした方がよいでせう。若し神樣が自然にお示しになるのでなければ、このわからぬことを現在のまゝにしておくのがもつとよいでせう。それで、よい信者なら、誰だつて、不幸な、棄てられたこの子に對しては父親の親切を示す權利があります。』

事件がごく滿足に結着したので、ヘスタ・プリンヌはバールと一緒に家から罷り出

た。ふたりが階段をおりて行くと、一つの窓の格子が押あけられて、日當りのところに、ベリンガム知事の意地惡の妹で、數年の後、巫女だといふわけで處刑された人と同人のヒヾンス夫人の顏が突出されたと斷言されてゐる。

『シイ、シイ！』とヒヾンス夫人が言つた。彼女の不吉な人相が、家の陽氣な新味の上に、一點の陰を投げたやうに思はれた。『お前さんは今晩一緒に行くかね。森の中に御愉快筋があるだらう。そしてわたしは惡魔に殆ど約束してゐるのだ、かわいらしいヘスタ・プリンヌが仲間になるといふことを。』

『どうぞ、お斷りを申上げて下さいまし！』とヘスタは喜ばしい微笑を湛へながら答へた。『わたくしは家にとゞまつて、小さいパールのおもりをしなくてはなりません。若しみなさんがわたくしからあの子を取つてしまつたなら、わたくしは喜んで御一緒に森の中へ入つて行つて、わたくしの名を惡魔の手帖につけることもしたでせうに、わたくしの血でもつてゞも！』

『おゝつけお前さんも森の中へ行くやうになるよ！』とこの巫女が頸を引込ませながら八の字を寄せて言つた。

さ、かし（若しヒヾンス夫人とヘスタ・プリンヌとの此話し合ひが確かなもので比喩でないと想像するなら）、一人の墮落せる女と、その女の弱い心のために出來た子との間の關係を絶つことに反對した若い牧師の議論の實例は既にこゝにあるわけだ。斯くも早く、ヘスタは子供があつたのでサタンの陷穽から救はれたのだ。

九醫者

ロジア・チリングウオルスといふ名は變名で、彼れは以前の名を人に言はせまいと心をきめてゐた。此事は讀者の記憶せらるゝ所であらう。ヘスタ・プリンヌのさらしものゝ恥かしめを見た群衆の中に、ひとりの老年に近い旅窶れのした人が立つてゐた。彼れは丁度危險な曠野から出て來た所で、家庭の暖かみと陽氣とを身にあらはしてゐることゝ思つて來た女が、人々の前で、罪の手本だと示されてゐたのを見たのである。此事については既に述べた。主婦の名譽はすべての人々に蹂躙された。『不名譽』は公けの市場でヘスタのぐるりで喋舌つてゐた。此報知が屆きでもしたら、親戚のものゝため、またヘスタの無垢の時代の友だちのためには、ヘスタの不名譽の感染以外には何も殘つてゐなかつた。ヘスタの不名譽は必ず彼等の以前の關係の親しさと神聖さとに全く應じ、彼等の關係と釣合を保つて、分配されるであらう。そんなら何故——とい

ふのは選擇は勝手なんだから——この墮落した女との關係が、すべての人々の中でも一番深く、一番犯すことの出來ない關係であつたこの人が、餘り香ばしくもない遺產を要求するために進み出なければならなかつたか。彼れは恥の臺の上で女のそばに曝されまいと心をきめた。ヘスタ・プリンヌの外は誰れ一人彼れを知る者なく、又彼れはヘスタの沈默の錠と鍵とを持つてゐたので、人間の名簿から自分の名を取去らうとした。以前の關係に就ては、宛も久しい以前の噂どほり海底の藻屑となつてしまつたかの如く綺麗さつぱりと世の中から消えて無くならうと思つた。この目的が一度仕遂げられると、新い關係がすぐ起り、新い目的もまた起つた。それは、ほんとに、罪惡ではなかつたにしても、暗い、而も彼れの全力を盡すに足る程力あるものであつた。

彼れは此決心に隨つて、すばらしい學問と智慧以外の紹介はなしに、ロジア・チリングウオルスといふ名で、この清敎徒の都會に寓居を定めた。彼れは若い時の修業に依て廣く當時の醫學に精通してゐたので、自ら醫者と名乘りあげた。そして醫者とし

て親切に歡迎された。醫術外科術の堪能者は植民地には珍しい事であつた。他の移住者を驅つて太西洋を渡らしめたものは、かの宗教的熱心であつたが、その宗教的熱心を此種の醫者がもつてゐたことは稀であつたやうである。人體の研究中に、彼等の人よりまさつて高い聰明な精神力が物質化されたのかも知れない。またそれ自身のうちに生のすべてを含蓄する程充分な術を包んでゐると思はれる、あの不思議な機制體の中に、精神的生命觀をなくなしたのかも知れない。兎に角、ボストンといふ立派な都會の健康は、藥のことだけでいふと、是までひとりの年寄つた執事兼藥屋の保護の下にあつたのだ。免許狀でもつて行はれるであらう證明書よりも、信心と信心深い行狀の方が、此男に利益になるしつかりした證明書であつたのだ。一人の外科醫は、折折その高尚な術をやり、毎日不斷は剃刀を振りまはしてゐた人であつた。こんな專門家の團體に對しては、チリングウオルスは立派な掘出し物であつた。彼れはすぐ昔の醫學の重い仰山な仕組を熟知してゐたことが明かになつた。

其醫學の仰山な仕組の中のあらゆる醫藥は、不死の靈藥を製造するつもりであつたかのやうに精妙に調合された牽强附會の異種の成分を包含してゐた。そのうへ、彼れは印度人に囚はれてゐた間に、本草草根の特性に就て多くの知識を得てゐた。彼れはまた學問のない野蠻人に天與の恩惠であつた此等の藥草は、多くの學者等が、幾世紀間骨折つた歐羅巴の調劑書と同じ程に彼れの信任する所であつたといふことを、患者等に隱さなかつた。

この見知らぬ學者は少くとも宗教生活の外貌に就ては龜鑑であつた。そして到着後間もなく精神上の指導者としてデムスデール師を選んだ。此若い牧師の學者らしい名聲は尙オックスフォードに殘つてゐた。より熱烈な崇拜者は、彼れが若し普通の壽命をもつて生きて働くなら、昔の先祖等が、初代基督教の信仰のために建てたと同じ程の功業をば、今や衰頽せる新英洲のために行ふ運命をもつてゐた、天から命ぜられた使徒に外ならぬと考へた。しかし此時期頃にデムスデール氏の健康は明かに衰へかけ

てゐたのだ。彼れの習慣を一番よく熟知してゐた人々は、この若い牧師の頬が蒼ざめてゐたのは、彼れが餘りに勉強に熱中するのと、滿遍なく教區の務を行ふのと、就中この浮世の汚れが彼れの心靈のランプを妨げたり暗くしたりすることの無いやうに屢屢實行した斷食と徹夜の祈念とのためであると考へた。若しデムスデール氏が眞に死なんとするなら、もうこの世が彼れの足で踏まれる價値がなくなつたといふことが充分の理由だと、或者が言つた。是に反して、牧師自らは、持前の謙遜で、自分の信ずる所を述べて、若し神が自分を取去ることを適當と見給ふなら、浮世で、神の一番つまらない使節をも行ふ價値が自分に無くなつたゝめであらうと言つた。彼れの衰弱の原因に關する意見は皆まち〳〵であつたに拘らず、事實は疑ふことが出來なかつた。彼れの身體は瘦衰へて行つた。聲は矢張りいみじくいゝ聲であつたが、そのうちに衰へを思はせるやうな、どことなく陰欝な所があつた。何か一寸した驚惶や、何か他の不意の事件などが起つた時には、初はぼうッつと顏を赤らめ、それから眞蒼になつて、苦み

を表はしながら、胸の上に手をおくのを、人々が屢々認めた。

若い牧師の狀態はかういふ風で、彼れの輝きそめる所であつた光が、全く時ならざるに消えるだらうといふ形勢がごく切迫したその時、ロジア・チリングウオルスが都市に到着した。謂はゞ天から降つて來たのか、或は地から飛び出して來たのか、何處からとも言へない、彼れの最初の入場は、一種不可思議な所があつた。それが容易に奇蹟的なものに誇張された。彼れは今や立派な醫者として知られてゐた。凡人の眼につまらなく見えたものゝうちに隱れた價値を、よく知つてゐたものゝやうに、彼れが野の花を集めたり、草根を掘つたり、森の樹木から枝を折つたりしたのを人々は見た。サー・ケネルム・デグビーや、外の有名な人々は（さういふ人々の學才は殆ど超自然的であつたと考へられてゐた）彼れの文通者か、同輩であつたと、彼れが語るのを人々が聞いた。學界に是程の地位をもつてゐながら、なぜ彼れはこゝへ來てゐるのか。大都會のうちに地位をもつてゐた彼れは、曠野の中に何を求めてゐたのであらうか。こ

の疑問の答として一つの噂が盛んになつた。――そして不合理ではあつたけれども、或分別ある人々に依て、抱かれてゐた――其噂は、神が或獨逸大學出の卓拔な一醫學博士を身體のまゝ空中を運び、デムスデール氏の書齋の戸の前に降ろす事に依て、絶對の奇蹟を行ひたまうたといふのであつた。神は所謂奇蹟的干渉の舞臺効果をねらはずに、目的を進めるものであるといふことを知つてゐたもつと賢明な信仰の人々は、ロジア・チリングウォルスの極めて好都合な到着のうちに、神の御手を見んとした。

醫者がいつも若い牧師に對して強い興味を示したことが、この考の正しきことを認めさせた。彼れは一教區民として牧師に結びつき、牧師の生來うち解けない神經質から、友愛と信任とを得んと求めた。彼れは牧師の健康狀態に對して非常な驚きを表はしたが、頻りに治療をやつて見たがつた。若し早くやるなら、好結果疑ひ無きが如く思はれた。デムスデール氏の教會員中の長老、執事、母らしい主婦、それから若い美い少女等まで、一樣にこの醫者が隔てなく申出した、その巧みな技術を試して見るやう

にと切に願つた。デムスデール氏はやさしく彼等の懇願を退けた。

『わたしは藥は要らないです。』と彼れが言つた。

さかし若い牧師はどうして斯く言ふことが出來たらうぞ、引きつゞく安息日ごとに、彼れの頬が益々蒼ざめ、益々痩せ、聲は以前よりもだん〳〵震へ聲になつた時。胸の上に手に押つけることが、時たまの身振りといふよりは、寧ろ不斷の習慣となつた時。彼れは自分の働きに倦みつかれたのか。死ぬることを願うたのか。ボストンの先輩の牧師等と、教會の執事等とは、此質問を、デムスデール氏に向つて嚴肅に持出した。彼等は神が極めて明白に遣はしたまうた助力を却けるのは罪だといふことに就て、(彼等の言葉を藉りて言ふと)、『彼れを諌めた。』牧師は默つて聞いてゐた。そしてどうとう醫者に相談することを約束した。

『神の御心なら、』とデムスデール師が自分の誓言を果すためにロジア・チリングウォルス老人の專門の助言を頼んだ時、言つた。『わたしは、わたしのためにあなたの技

傭を試して下さるよりは、わたしの骨折も、わたしの悲も、わたしの罪も、それから苦も、間もなくわたしと共になくなり、地につけるものはわたしの墓に葬られ、靈につけるものゝみが永遠限りなく活きてゆくことを以て、滿足したでせうに。』

『あゝ』とロジア・チリングウォルスは靜かに言つた。わざとだか、自然だか、わからなかつたが、あの物靜かな態度は、兎に角、彼れの擧動の特色であつた。『さういふ風に若い牧師方は動もすると話したがります。まだ深い根を降さない、うゝ若い人々は、自分の掴んでゐる生命をごく容易に棄てゝしまひます！そして此世で神と一緒に歩いてゐる高尚な人々は、神と一緒に新いエルサレム（天國）の黄金の鋪道を歩くために、この世を去ることを喜びます。』

『いゝえ』と若い牧師は手を胸に置き、苦痛の紅潮を額の上に漲らして更に答へた。『わたしがその鋪道を歩く價値があるなら、こゝでもつとよく滿足して働くことが出來るでせうが。』

『立派な人々はいつも自分を卑下し過ぎて解釋をします。』と醫者が言つた。

かくして不思議なロジア・チリングウォルス老人はデムスデール師の主治醫になつた。曾に病氣が醫者の興味を引いたばかりでなく、ひどく患者の性質と特性とを調べようとしたので、此ふたりは年齢こそ異なれ、漸次一緒に時間を費すことが多くなつて來た。牧師の健康のために、また醫者は醫療となる液汁のある草木を蒐集することが出來るために、海岸や森の中に遠足をした。いろんな遠足には、海の騒ぐ音、呟き、梢に歌ふ嚴そかな風の讃美がまざつた。お互が又展お互の書齋兼隱遁所の客となつた。この學者との交際には牧師の心を魅するものがあつた。牧師は自分の同僚の間に空しく求めて得られなかつた思想の或廣さと自由とをも合せもつて、非常な深みと廣さとの知識上の教養をこの人のうちに認めた。ほんとに彼れは醫者のうちにこの性質を見出してひどくぎよつとしなかつたにしても、吃驚はした。デムスデール氏は、眞の牧師、眞の宗教家で、大いに發達せる敬虔な情感と、强く信條の道について押進んで行

つて、時の經過するに隨つて絶えず愈々深くその道を作つたやうな心をもつてゐた。彼れはどんな狀態の社會に於てゝも所謂自由主義者では無かつたらう。彼れは身のまはりに信仰の壓迫を感じてゐることが、彼れの平和にはいつも必要であつた。信仰は其鐵の組立のなかに彼れを閉籠めてゐる間、彼れの身を支えてくれる。しかしそれにも拘らず、恐る〳〵の樂みではあつたけれども、彼れが平生親しんでゐたよりも別種の知力に依て、宇宙を考察することに時たまの慰藉を感じた。その時は宛も一つの窓が押開かれて、いゞさい息のつまる書齋の中に自由な空氣を入れたかの觀があつた。書齋のなかでは、ランプの光、防がれた日光、書籍から發散せる肉的にせよ、道德的にせよ、微くさい香氣のたゝ中に、彼れの生命が空しく滅び去つてゐたのだ。しかし自由な空氣は餘りに新鮮寒冷であつて、永く愉快に吸ふに堪へなかつた。そこで牧師も醫者も一緒に敎會が正統主義と定義してゐたものゝ區域内にまた退いた。

かくの如くしてロジア・チリングウオルスはこの患者を注意深く調べた。牧師が、

彼れによく馴れた思想の區域内のいつもの小路を歩きつゝけて行く、普通の生活に於て彼れを見た時も、それから外の精神的風景のたゝ中に投げられた時、精神的風景の新奇が彼れの性格の表面に、何か新いものを喚出すかも知れない、さういつた場合の彼れの樣子に於ても、よく彼れを調べた。老人は自分の利益になることをやつて見る前に、人を知ることが大切と思つたやうである。苟くも感情があり知力があれば、身體の諸病は感情知力の特性を帶びる。アーサ・デムスデールのうちには思想と想像とが强く働き、感性が烈しく動き易かつたので、身體の虛弱はそこに根柢があつたやうだ。そこでロジア・チリングウオルス——この熟練の人、親切な醫者——は、深くこの病人の胸の中に入らうとつとめた。彼れの主義の中を測り、彼れの記憶の中を覗ひ、注意深く觸つて見て、あらゆるものを探りながら。暗い洞中の寶探しのやうに。殆ども、こんな秘密でも、こんな探鑿を企てる機會と特權があり、そしてそれを究め盡す熟練ある探究者を遁れることは出來ない。秘密の重荷を負うてゐる人は特に自分のかゝつて

ゐる醫者との親交を避けなくてはならない。若しその醫者が生れながらの聰明と何かそれ以上のもので名のつけられないもの、――われ〳〵はそれを直覺と言はう、――さういふものを持つてゐるなら。若しその醫者が出しやばりの主我が、自分のいやに際立つた特質を示さないなら。若しその醫者が先天的に自分の心を患者に結びつける力があつて、それがために患者が自分で考へてゐたいけだと自ら思つてゐることを、自ら氣がつかずに口に出さなくてはならぬ程の力があるなら。かういふ風にしてあかされた秘密が穩かに受けいれられ、屢々同情を口に出さずに、沈默、言葉とならぬ呼吸、及び萬事合點だといふことを示す一語を間々點出することに依て、その秘密が認められるなら。若しこの親友の資格に加ふるに、醫者としての公認の性質が與へる利益があるなら、――その時には、或のつぴきならぬ刹那に、患者の魂が溶けて、暗いは暗いが、透明な流れとなつて溢れるやうに流れ出でゝ、あらゆる秘密を白晝の中にさらしてしまふであらう。

ロジア・チリングウオルスは上に擧げた性質を皆持つてゐたか、或は持つてゐなかつたにしても其大部分をもつてゐた。でも時は經つて行つて、上述のやうに、このふたりの教養ある心と心との間に、一種の親しみが生長した。このふたりの心は人間の思想と研究との全部を包んだ程の廣さがあつた。彼等は、倫理學上、宗教學上、公私の事件の一切について論じた。彼等はお互ひに自分だけのことゝ思はれた事柄に就て多く語つた。けれども醫者がそこにあるに違ひないと想像したやうな秘密は、嘗て、牧師の意識からこの友だちの耳の中に洩れたことが無かつた。醫者の方では、デムスデール氏の身體の病氣の性質さへよくは明されてなかつたと疑つた。不思議な隔意だつたー

暫くの後、ロジア・チリングウオルスの暗示に依て、デムスデール氏の友人等は、このふたりが同じ家に同居をする設備をした。牧師の生命の潮の一つ一つの干滿が、心配と愛着の念に燃えてゐた醫者の眼の前を通るやうに。この大いに望ましい目的が

達せられた時には、都會中の人々が甚く喜んだ。此牧師の幸福のためには、是が最良の方法と考へられた。實に主張する權利があると思ふたやうな人々が屢々主張した通り、彼れの貞節な妻になるために、精神的に彼れに對して眞心をもつてゐた、今を盛りの多くの少女等のうちの誰かを選ばなかつたら。——しかしデムスデール氏は人の說破を容れて後の方法を取る望みは今のところ無かつた。宛も牧師の獨身生活は敎會規律の一であつたかのやうに、此種の助言をば皆却けた。それ故、實際極めて明白に、デムスデール氏は、自分勝手から、他人の食堂で何時もまづい食物を食べたり、他人の爐傍だけで身體を暖めることを求める人の運命でなければならない、生活の冷たさを堪へる運命になつてゐたので、父のやうな愛と、恭しい愛とを合した、此聰明な、經驗のある、慈悲深い、老年の醫者をのぞいては、この若い牧師にとりて、すべての人類のうちで、絕えず、彼れの聲のとゞく所にゐたものは他に無かつたやうに思はれた。

ふたりの友だちの新い住所は身分の善い敬虔な寡婦の家であつた。この寡婦はその

後キングス・チャペルの神々しい建物が建てられた敷地を殆ど包括してゐる家に住んだ。一方には初アイザク・ジョンソンの所有地であつた墓場があつたので、牧師にも、醫者にも、めい〳〵の仕事にふさはしい眞面目な考を思起させるに適してゐた。寡婦の母親のやうな心配が、デムスデール氏に正面の部屋をあてがつた。部屋は日當りがよくつて、重い窓掛がついてゐた。日中の影がほしい時には、それを作ることが出來た。壁には所謂ゴベリン織り掛毛氈がぐるりに掛けられてゐた。そして毛氈は、兎に角、まだ褪せ果てぬ色で、ダビデと、バスセバと、豫言者ナタンとの聖書の物語を表はしてゐたけれど、其場面の美人をば、殆ど災を宣する豫言者と同じ程に恐しく美くした。蒼白い牧師は、こゝに、聖父等の羊皮紙の大冊、ラビの學問、出家の博識に充滿せる藏書を積みあげた。プロテスタントの牧師らはあの階級の作者らを譏り且く、さしはしながらも、矢張り已むなく屢々それを利用したのである。他の一方には、ロジア・チリングウオルスが自分の書齋と實驗室とを定めた、近代の科學者がかなり完備

したものと考へるやうなものでは無かつたが、熟練な錬金家がいかに利用すべきかを熟知してゐた藥劑　藥品を混合する道具と、蒸溜器とを備へつけた。このふたりの學者はこんな便利な境遇におかれて、めい〳〵自分の領分に落付いたけれども、お互ひに心置きなく、一方の部屋から一方の部屋へ通り、お互ひにお互ひの仕事を注意深く視察した。

そしてデムスデール師の、一番よい、目先きのきく友人らは、さきに一寸言つておいたやうに、――公會、家庭、及び密室の多くの祈りで、彼等が願ひ求めた、――この若い牧師を、健康に恢復するといふ目的のために、神の手が皆是等の事を爲したまうたと想像したのは當然であつた。しかしこゝに言はなくてはならぬことは、この植民地の幾部分の人々が、此頃已に、デムスデール氏と不思議な醫者との關係に就て、彼等自身の意見を持ち始めてゐたといふことである。教養の無い群衆が、自分の眼で見ようとする時には、動もすると欺かれる傾きが甚だしい。しかしながら群衆が、常

に然る如く、その大きい暖かい心の直覺を土臺にして判斷を形づくる時には、かくして到達したる斷案は、屢〳〵超自然的啓示をうけた眞理の性質を持つてゐるほどに、極めて深奥で、極めて的確である。今話してゐる場合、人民らは、眞面目な駁擊に價する事實や議論を俟たずに、ロジア・チリングウォルスに對する偏見を正しとすることが出來たのだ。殆ど三十年も昔、サア・トマス・オヴァベリ謀殺の頃、倫敦の市民であつた一人の老年の職人がゐた。此老人は、醫者が別の姓名を名乘つて、(作者は今それを忘れてしまつた) オヴァベリ事件に關係してゐた有名な老魔術師フォルマン博士と一緒にゐたのを見たといふ證明を立てた。二三人の人々の暗示に依ると、この熟練の醫者は印度人に囚はれてゐた間に、蠻人僧の魔術に加入して、醫術上の學識を增した。蠻人僧といふのは、妖術の巧みながために、奇蹟的の治療とも思はれるものを屢やつて、力ある魔術師と一般に認められてゐた。大勢のものは(そしてそのうちの多くは、隨分冷靜な知覺と實際的な知覺とを持つてゐた人だちであつたから、この人々の意見

は他の事柄には價値があつたらう）ロシア・チリングウオルスの樣子が、都會に住んでゐた間に、殊にデムスデール氏と一緒にをるやうになつてから、著しい變化をうけたと斷言した。初、彼れの表情は、穩かで、冥想的で、學者らしかつた。今や、彼れの顏には以前に認めなかつた何か醜惡邪凶な所があつて、彼れを見れば見る程、それが愈々益々眼につくやうになつた。普通人民の考によると、彼れの實驗室の火は地獄から持つて來られたもので、地獄の薪を以て供給されてゐたのだ。それだから、案の定彼れの容貌は煙のために煤けてゐるのだ。

約言すると、アーサ・デムスデール師は基督教界のあらゆる時代の、特に聖なる多くの人物の如く、ロジア・チリングウオルス老人に身を寠したサタン自身、然らざればサタンの使者のために、惱まされてゐるといふ考が廣がつた。この惡魔の使者は神の許可をうけて、暫く牧師の親しみを得、彼れの魂を謀らんとしたのだ。うちあけて言ふと、物のよくわかつた人なら、誰でも、勝利がどちらの方に來るかといふことは

全く疑へなかつたのだ。彼れは榮を以て確かに打ち勝つであらう。彼れは勝利のために貌が變つて、戰から出て來るであらう。人々は動かざる望みを以てそれを見ようとした。それにも拘らず、その間勝利を得んために戰はなくてはならぬ、大方味ふべき肉の惱みを思ふと悲しかつた。

悼しいかな、――この不幸な牧師の眼の底の暗さと恐れとから判斷すると、その戰ひは辛い戰であり、勝利は決して確實ではなかつたのだ。

十　醫者と患者

ロジア・チリングウオルス老人は生涯氣質の穩かな人で、暖かい愛情の人ではなかつたけれども、同情のある人であつたが、いつも又世の中とのあらゆる關係に於ては、潔白な眞正直な人であつた。彼れは已に眞理だけを重んじてゐる判官の嚴しい公平な完全を以て、或研究を始めてゐたと思つた。宛かも問題は人間の情欲や自分に加へられた不法でなく、幾何問題の假定の線や圖を含んでゐたに過ぎぬやうに。しかしその研究を進めるに隨つて、恐しい魔力、矢張り穩かでありながら、一種獰猛な必然が、この老人を全く引掴んでしまつて、彼れが何でもそれの言ひなり放題になるまで決して彼れを離さなかつた。彼れは、今や、黃金をさがす坑夫のやうに、或は、寧ろ大方死人の胸の上に葬られた寶玉を探すためであるが、掘つて見れば、死と腐敗との外には何物をも見出されないやうな、墳墓を掘つてゐる寺男のやうに、このあはれな牧

師の心の中に掘り入つた。若し是等のことが彼れの求める所のものであつたなら、彼れの靈魂のために悲むべきである！

時とすると一條の光が醫者の眼から靑く不吉な餤をあげて閃いた。そのさまは熔鑛爐の反射の如くであつた。或はまあバンヤンの山腹の恐しい戸口から飛び出て、巡禮の顏の上に震へた物凄い火光の一つのやうであつた。此暗黑な坑夫チリングウオルスの働いてゐた土が、多分、彼れの氣を引立てる兆候を示したのであらう。

『此男は』と彼れはかういふ時に獨語を言つた。『人々は此男を潔白だと思つてゐる、——全く精神的の人のやうに思つてゐるが、——此男は、父親からか、或は母親からか、猛烈な動物性を遺傳してゐるのだ。もう少し此鑛脈の方に掘つて行かう！。』

されば彼れが永い間牧師の朦朧たる內面をさぐり、牧師が民族の幸福を欲する高い心、靈魂を思ふ曖い愛、潔白な感情、自然な信心などが、思想と研究とに依つて强められ、默示に依つて照らされた、さういふ多くの貴重な材料を調べて見た後、(是等の至

貴至重なる黄金のすべては、多分探偵者にとりては塵芥に過ぎなかつたであらう）彼れは落膽して引かへして、別方面に向つて其探究を始めうよとした。人が瞳子のやうに守つてゐるその寶を盗まん目的で、此男が半分眠りかけてゐる（或はうつかりすると全く眠を醒してゐるかも知れない）部屋に入る盗賊のやうに、彼れは、拔足、差足、前方へ氣をくばつて、手さぐりをして行つた。豫め周到な用意を以てしたに拘らず、床は折々きしみ、着物はさら〳〵と音を立て、彼れの姿の影は、近よることを禁ぜられてゐるくぎりで、其繊牲者の上に投げられた。別言すれば、デムスデール氏の神經の感受性は屢々靈的直感の力を起したので、朧ろげながら、何か自分の平和に有害なものが自分との關係の中に割り込んで來たと氣がつくやうになつた。しかしロジア・チリングウォルス老人も殆ど直覺的な知覺があつた。そして牧師が吃驚した眼を彼れに向つて投げた時には、そこに坐つてゐたものは彼れの敵でなくて醫者であつた。親切な、注意を怠らない、同情のある、しかも決して出しやばりでない友人であつた。

去かしデムスデール氏は、病める心が動もすれば罹り易い或病的な性質のために、人間を悉く胡散臭く思はなかつたら、もつと充分に此人間の性質を見たであらう。彼れは何人をも友人と信じなかつたから、自分の敵が實際に現はれた時に、其敵を認めることが出來なかつた。それ故牧師は矢張り彼れと親しい交際をつゞけて、毎日此老醫を自分の書齋に迎へ、或は彼れの實驗室を訪づれ、そして慰さみのために、雜草が効能ある藥とかはる經過を注意したりした。

或日彼れは手に額を凭せ、墓場に向いてゐる開いた窓の閾に臂を凭せながら、ロジア・チリングウォルスと話をしてゐた。此老人は其間汚ならしい草の束を調べてゐた。

『何處で？』と牧師はそれを横目で見ながら尋ねた。といふのは、今では、人間にせよ、非生物にせよ、どんなものをも眞直に見ることが極めて稀になつたのが此牧師の特質であつたから。『何處で、こんな黒いぐにや〳〵した葉の草をお集めになつたんですか。あなた。』

『ちようど此近くの墓場でです』と醫者は仕事を續けながら答へた。『是はわたしには珍らしいです。是は塚穴の上に生えてゐるのを見つけたのです。それには石塔もなければ死んだ人の他の記念物もなく、たゞ死んだ人を記憶えてゐることを引受けた此醜草があるだけでした。是はその死んだ人の心臓から生え出て、恐しい秘密を表はしてをります。是れは死んだ人と一緒に葬られたものかも知れません、そしてその人は生きてゐる間に秘密を白狀した方がよかつたのです。』

『大方』とデムスデール氏が言つた。『その人は熱心にそれを望んでゐたけれども、出來なかつたのです。』

『何故？』と醫者が答へた。『何故出來なかつたのですか。自然の力が悉く熱心に罪惡の告白を要求してゐるから、この黑い雜草が、無言の罪惡を明白にするために、埋められた心臓から生え出たのです。』

『それは、あなた、あなたの空想に過ぎません。』と牧師が答へた。『若しわたしの豫言

が正しいなら、言葉で言はれたにしろ、或は記號か、表象で表はされたにしろ、人間の心と一緒に葬られてゐるかも知れない秘密を暴露する力なら、必ずそれには神の惠みが伴ひます。そんな秘密を身に覺えてゐる人は、是非とも、すべての隱れたことが露はるべき日まで、其秘密を持つてゐなくてはなりません。又わたしは聖書を讀み或は解釋して、其時行はれる人間の思想行爲の暴露は刑罰の一部としてもくろまれてあるとは思ひません。それは確かに淺薄な見方でありませう。いや、わたしの考が甚だしく誤まつてゐないとすれば、この暴露は、あの日に、此生の秘密な問題が明白にされるのを見ようとして立つて待つてゐる、あらゆる明智の人々の知的滿足を滿足させるに過ぎません。人々の心の知識は、その問題の最も完全な解釋には必要でありませう。且又あなたがお話しなさるやうな悲慘な秘密を抱いてゐる心なら、あの最後の日に、いや〳〵ながらでなく、口では言へない喜びを以て、それを棄てゝしまふだらうと思ひます。』

『そんなら何故それをこの世で暴露しないのですか。』とロシア・チリングウオルスが靜かに牧師に流し目をくれて尋ねた。『何故罪を犯した人間が、もつと早く、此口で言へない慰めを利用してはいけないですか。』

『大概はそれを利用してをります。』と牧師は宛も苦みのしつこい動悸に惱まされるかのやうに、しつかりと胸のところを掴みながら、言つた。『澤山の不幸な魂がわたしに秘密をうちあけました。臨終の寢床に横はる時ばかりでなく、丈夫で生きてゐて、名聞には一點の傷のない時でも。そして何時もさういふ人だちが洗ひざらひ心の中を吐き出した後には、おゝ、わたしは何といふ安堵の思をさう言つた罪深い兄弟だちのうちに見たでせう！自分の腐れた呼吸のために、永い間、息をとめられてゐた後、と う〳〵自由な空氣を吸ふやうになつた人に見るやうな所さへありました。この安堵の思はかうでもしなくてはどうしてありませう？まあ、殺人罪を犯したと言つたやうな——卑劣な人間が、死骸をすぐ放擲げて、宇宙にそれを大事にさせるよりは、寧ろ自

分の心の中にそれを埋めておくことを何故欲するのですか。』

『しかし或人々はさういふ風にして自分等の秘密を隱してゐるのです。』と沈着な醫者が言つた。

『ほんとに、さういふ人々はあります。』とデムスデール氏が答へた。『しかしもつと明白な理由を申上げることは出來ませんが、さういふ人々は、天性の素質そのものに依つて、沈默させられてゐるのかも知れません。或は、さういふ人々は、罪を犯してゐることはゐるにしても、しかし、神の榮と人間の幸福とを思ふ熱心はなくさないのですから、人々の眼に黑く汚ない自分を暴露することを憚かつてゐる、と、かう想像することは出來ませんか。何故かといふと、さういふ人々は、その時からもうどんな善い事も成就することは出來ず、過去の罪惡は奉仕に依て償はれないからです。心は、のけることの出來ない惡事で悉皆ぼち〳〵があるのに、降つたばかりの雪のやうな潔白な顏をして、同輩の間を歩きまはる、それが彼等には口で言へない苦みであるのです。』

『さういふ人々は自己を欺いてゐるのだ』とロジア・チリングウォルスはいつもより少し語氣を強くして、人差指を一寸うち振りながら言つた。『さういふ人々は正當に自分のものである其恥辱を片づけることを恐れてゐるのです。さういふ人たちの人間に對する愛、神の奉仕を思ふ熱心、――かういふ神聖な心の働きは、さういふ人々の心の中で、惡鬼と同居することがあるかも知れない、又ないかも知れないのです。罪惡はその人の心に同居する惡鬼らに對して心の門を外したのです。そして惡鬼らは、必ず心の中で惡鬼の子らを殖します。しかしかういふ人々が若し神に榮を歸せようと思ふなら、其汚れた手を天の方にあげて貰ひたくありません！若し同胞のためをはからうと思ふなら、無理にも懺悔の涙を流し、自ら卑うして、良心の力と眞實とを明かにするがよいのです！おゝ、賢明な敬虔な友、あなたは僞の影の方が神の眞理よりもよい、――僞の影の方が神の榮のため、或は人間の幸福のために大切だといふことを、わたしに信じさせようと望んでいらしやるのですか。たしかに、さういふ人々

は自欺に陷つてゐるのです！』

『さうかも知れません、』と、若い牧師は、お門違ひ、或は、時候はづれと考へた議論を棄てるものゝやうに、無頓着に言つた。彼れはほんとに自分の餘り神經過敏な性質を激動させる問題なら、どんな問題からでも遁げるすばやい力があつた。――『が、さて、わたしの名醫におたづねいたしたいのですが、ほんとに、わたしの此弱い身體を御親切に御心配下すつて、それで利益があるとお考へになりますか。』

ロジア・チリングウォルスが是に答へる前に、はつきりした、激しい子供の笑聲が近くの墓所から起るのを彼等は聞いた。開いた窓から自然に眼を向けると、――といふのは夏の時分だつたから――牧師はヘスタ・プリンヌと小さいパールが其構地を横ぎる歩道を歩いてゐるのを見た。パールは日光のやうに美しい樣子をしてゐたが、涙れたふざけた氣分になつてゐた。かういふ氣分が起る時はいつも全く彼女を人間の同情或は人間の接觸の範圍から取去つてしまうたやうに思はれた。彼女は今墓から墓

へと敬ひの心もなく飛び跳ねて、つひに或死んだ偉人（多分アイザク・ジョンソン自身のかも知れない）の廣い平たい紋章のついた墓碑のところに來て、その上で踊を始めた。彼女はもつと行儀よくするやうにとの母親の命令と懇願とに從つて、墓の傍に生えてゐた、脊の高い牛蒡から、刺だらけのいがを集めるために留まつた。それを手一ぱいとつて、彼女は母親の胸を飾つてゐる緋文字の線にずつと並べた。刺は生れつきどほりに、剛情にそれにくつついた。ヘスタはそれをもぎ取らなかつた。

チリングウオルスは已に此時までに窓のところに近づいてゐたので、微笑を含んで物凄く見おろした。

『あの子供の天性には法律も交つてゐなければ、權威を尊敬する念も入つてゐないし、善かれ、惡かれ、人間の儀式や意見を尊む心も交てゐない。』と彼れは牧師に言つたと同じく自分に向つて言つた。『わたしは、先日、あの子供が、泉小路の家畜用の水槽で、知事に水をぶち掛けてゐるのを見た。あれは全體何者ですか。あの小惡魔は全然

惡いのですか。愛情がありますか。何か生活原理がありますか。』

『何もありません、たゞ破られた法律の自由だけです。』とデムスデール氏は心の中で問題を論じてゐたかのやうに、穏かに答へた。『善を爲す力があるかどうかは知りません。』

子供は圖らず二人の聲を聞いたのであらう、といふのは、彼女は、喜びと悧發の陽氣な、しかし邪氣を含んだ微笑を浮べて、窓を見上げながら、デムスデール師を目がけて一つの刺を投げつけたから。感じ易い牧師は神經質な恐怖を以て輕い飛道具から畏縮した。バールは彼れが感動したのを見つけると、突拍子もない大喜びで手を拍つた。ヘスタ・プリンヌもわれ知らず仰いで見た。そして老若の四人が默然としてお互ひを見合うた。それからとう〳〵子供は高笑をして叫んだ。——『お母さん、あちらへ行らつしやい！あちらへ行らつしやい！でないとあの年寄つた眞黑けな人が摑へますよ！もう牧師さんを摑まへちやつたんですよ！あちらへ行らつしやい、お母さん、で

ないとお母さんを摑へますよ！けれど小さいバールは摑へられません！』

かくして彼女は母親を追ひ拂つて、死人の塚の中で、氣でも狂つたやうに跳ねたり飛んだりじやれたりして、過去の埋れた時代の人々とは何等の共通な所のない、過去の人々と親戚たることを自認もしない人の如くであつた。宛も彼女は更めて新い要素から造り出されたので、是非とも自分特有の生活を生きなくてはならない、彼女の偏屈は罪惡と考へられないで、彼女自身に對する法律でなくてはならぬかの觀があつた。

『あれが女です。』とロジア・チリングウォルスは一とぎれしてからまた言つた。

『あの女の過失は何であつても、あなたが堪らない程苦いとお思ひになる、あの隱れた罪の秘密は少しもありません。ヘスタ・ブリンヌは胸の緋文字のために少しは苦みがなくなつてゐるでせうか。』

『わたしはほんとうにさう信じます。』と牧師が答へた。『けれどあの女の保證は出來ません。あの女の顏にはわたしが見ることを欲しなかつた苦惱の顏付がありました。

けれどそれでも自分の心の中に苦みを隱してゐるよりは、この不幸な女、ヘスタのやうに、それを明白地にあらはす方が、惱むものにとつては必ずよいに違ひないと思はれます。』

又話がとぎれた。そして醫者は集めておいた植物を新たに調整し始めた。

『あなたは一寸前に』ととう〳〵彼れは言つた。『あなたの御健康についてのわたしの判斷をおたづねになりましたな。』

『おたづねいたしました。』と牧師が答へた。『そしてわたしはそれを知りたいのです。どうかお心置なくお話し下さいまし、助からうと、助かるまいと。』

『それぢや、腹藏なく、有のまゝを申上げませう』と醫者は、やはり植物の手を休めなかつたが、デムスデール氏の方に注意深い眼をそゝぎながら言つた。『御病氣は不思議な御病氣です。少くとも病狀がわたしの眼に明らかになつてゐる限りでは。——病氣そのものが酷いといふでもなし、又外部がひどいといふのでもない。あなた、わ

たしは毎日あなたを見て、もう既に過去數ケ月間あなたの御樣子のいろんな表徵を注意してゐたのですから、わたしは大方あなたを大病人とは考へますが、さりとて、學識あり、注意深い醫者が、癒してあげる望みがなからうといふ程の御病氣とも思はれないのです。が、どう言つたらいゝでせう、御病氣はわたしが知つてゐるやうに思はれるものですけれど、ほんとにわたしにはわからないのです。』

『學問のあるあなた、あなたのお話はまるで謎です。』と蒼白い牧師は一寸窓から傍を見ながら言つた。

『それぢや、もう有體に申上げませう。』と醫者が言葉をつゞけた。『そして、あなた、此塲合卒直が必要ですから、それがために御勘辨を蒙る必要があるやうでしたら、切に御勘辨をお願ひいたします。あなたの友人として、あなたの生命と身體の上の幸福とを神樣の御命令に依てお預りしてゐるものとして、おたづねしたいのですが、あなたは、此御病氣の働きをすつかりわたしに腹藏なくおうちあけなすつたのですか。』

『どうしてそんな事をおたづねになるんですか。』と牧師が問うた。『ほんとに醫者を呼んでおいて傷を隱すなんて、まるで子供の戯れでせう。』

『それぢや、あなたはわたしが何でも皆知つてゐると仰有るんですね。』とロジア・チリングウォルスは落着はらつて、强く集中された智慧でもつて爛々と輝いた眼を、牧師の顏にそゝぎながら言つた。『そんならそれで宜しいです！しかし、また！外部の身體の病氣しか醫者には打あけられてなければ、治療を求められてゐる病氣の半分しかわからないのが屢々です。わたしどもは身體の病氣をばそれだけを全體として見るのですが、さういふ風に見れば、身體の病氣は、畢竟するに、精神の或病氣の徵候に過ぎません。若し、あなた、少しでもわたしの言葉があなたの感情を害するやうな所がありましたら、もう一度御勘辨下さい。あなた、あなたはわたしの知つてゐたあらゆる人間の中で、身體が、それを道具とする精神に最も密接に結びつき、精神に沁みこまされ、謂はゞ、精神と同一になつてゐる方なのです。』

『それぢや是以上おたづねする必要はありません。』と牧師は稍あわてゝ椅子から立上りながら言つた。『あなたは精神を癒すためにお醫者をなすつていらしやるのではないでせう！』

『かように、病氣といふものは、』と、ロジア・チリングウオルスは、牧師が話を切斷つてしまつたに構はず、立ち上つて、自分の低い黑い不具の姿を、痩せ衰へた頰の白い牧師に向けながら、もとの調子でどん〳〵話をつゞけた。『あなたの精神の病氣、傷む所、（若しさう言へるなら）は、早速あなたの身體にそれに相應する表白があるのです。それで醫者が身體の病氣を癒すことをあなたが欲しますなら、あなたが先づ醫者にあなたの魂の傷或は煩ひを暴露なさらなけりや、どうして是が出來ませう。』

『いや、あなたには致しません！此世の醫者には致しません！』とデムスデール氏は、ばつちり睜つた、凉しい、どこか惡く〳〵しい所のある眼を、ロジア・チリングウオルスに向けながら、烈しく叫んだ。『あなたには致しません！けれど若し是が魂の病

氣なら、わたしはたつた一人の魂の醫者なる神樣にお任せいたします！若しそれが神樣の御心にかなふなら、神樣は癒すことが出來ます。でなければ殺すことが出來ます。神樣の正義と智慧とに於て、神樣の善しと見たまふまゝにわたしを取扱つて貰ひたいのです！けれど何人なればあなたは此事柄に干涉なさるのです？苦めるものと神との間に敢て出しやばるのです？』

牧師は狂氣のやうな身振をしながら部屋を飛出した。

『この方法をとつたのもよい』とロジア・チリングウオルスは恐い微笑を浮べながら、牧師を見送つて獨語を言つた。『何も損は無いのだ。ぢきに又仲よしになるだらう。けれど今何んなに激烈な情熱が此男を摑んで、そして本心をなくさせたかを見ろ！どんな情熱だつて、燃え狂ふ時は同じことなのだ。此敬虔なデムスデール氏は、以前心の情熱に騙られて酷い事をやつたのだ。』

此二人の友だちの親交を是までと同じ間柄及び同じ程度に建てなほすといふことは

むづかしくは無かつた。若い牧師は獨り數時間自分の部屋にひつ込んで考へた後、自分の神經の疾病が自分を不體裁な忿怒に陷れたのだといふこと、及び醫者の言葉のうちに自分の忿怒を起した口實になるものも、或はそれを取繕ふに足るものもないといふことに心づいた。此親切な老人が義務として與へなくてはならない、又牧師自らが明白にそれを求めもした、異見を、この老人がたゞ申入れてゐた時に、自分が此親切な老人を突返した亂暴をほんとに驚き怪しんだ。此悔みの心を以て彼れは時を移さず極めて澤山なお詫びをした。そして此友だちに、若し彼れを健康にもどすことに成功しないなら、大方、あの時まで自分の弱い生命を延ばして行く手段であつた、あの注意を矢張つゞけるやうに折入つて賴んだ。ロジア・チリングウォルスは容易に承諾した。そして牧師の健康診斷を繼續した。信實に、彼れは牧師のために全力を盡しはしたが、診察がすむと、唇の上に不思議な怪訝な微笑を浮べて、患者の部屋を出るのが常であつた。此表情はデムスデール氏の前では見えはしなかつたが、醫者が閾を跨ぐ

と、それが強く明かになつた。

『珍らしい病氣だ。』と彼れは呟いた。『わたしは是非ともつと深く調べなくてはならん。魂と身體との珍らしい一致だ！技術のためだけでも、わたしは根柢まで此事柄を穿鑿しなくてはならん！』

上記の事件があつてから間もなく、デムスデール師は、或日のこと、正午に、全く知らず識らず、自分の前の卓に大きい黑文字の書物を開けたまんまで、椅子に坐りながら、深い深い眠りに陷つた。書物は催眠派文學の非常な力ある著作だつたにちがひない。牧師は、小枝にとまつてゐる小鳥のやうに、いつも輕い、發作的な、容易におどかして追ひやられるやうな眠り方をする一人であつたゝめに、其時牧師の睡眠の果てしない深さは、愈々珍らしかつたのだ。しかし牧師の精神はその時いつにない遠方に引込んでゐたので、ロジア・チリングウォルス老人が何の非常な用心もせずに室内に入つて來た時、牧師は椅子に坐つて身じろぎもしなかつた。醫者はつか〳〵と患者の

前にやつて來て、胸の上に手をおいて、是まで此專門家の眼にさへもいつも其胸を隱してゐた禮服を押のけた。

それから、ほんとに、デムスデール氏は身震ひをして、一寸身じろぎをした。

一寸とまつた後、醫者は去つた。

醫者の驚異と喜びと恐怖との不穩な顏付は言葉を以ては言ひつくせない！あの物凄い有頂天は謂はゞ餘りに甚しかつたので、眼と顏とだけではそれを表はし得なかつた故に、それが彼れの全身の醜のうちに溢れて、突飛な身振りで天井に向て急に腕を向けたり、床の上で足踏みをしたりして、物騷しくそれを示すことさへもしたが、その極まつた喜びは筆にあらはせない！若し人ありてロジア・チリングウオルスをあの有頂天の刹那に見たら、人間の貴重な魂が天に滅んで、サタンの國に引き入れられた時、サタンの振舞は如何と問ふの要は無かつたであらう。

去かしこの醫者の有頂天の喜びとサタンのそれとの差異があつたとすれば、それは

有頂天の喜びの中の驚異といふ性質であつたのだ。

十一　心の中

前回述べた事件後、牧師と醫者との間の交際は、外面は同じであつたけれども、以前とはほんとに別のものとなつたのだ。ロジア・チリングウォルスの知力は今やその前に充分はつきりした道があつた。それは實にかくきりと彼れが自ら歩かうと企てゝゐた道ではなかつた。この不幸な老人は、落ちついた、温良な、冷靜な樣子をしてゐたけれど、内には是まで隱れてゐた、しかし今や動き出してゐた靜かな惡意の深みがありやしなかつたかと思はれる。此惡意こそ、嘗てどんな人間でも其敵に報いた怨恨にまさりてもつと〳〵深い心からの復讐を、彼れに思はせるに至つたのだ。すべての恐怖、後悔、苦惱、無効な改悔、思ふまじきことを、振りはらへども、つひ思ひ浮べられてしかたがない、といつたやうなことを打ちあける、唯一の信友に彼れ自らをするとは！世の寛大な心なら憐み且つ赦したであらうのに、その世の中には隱してある

罪の悲みを、悉く、憐慰無き者なる彼れに、——赦す心なき彼れに打ちあけられるとは！復讐といふ負債を滿足に償却するには、是以外の何物を以てするも無益なこの債權者に、その不祥な財實を悉く與へられるとは！

牧師の内氣で神經質な遠慮は既に此計畫を妨害してゐた。しかしロジア・チリングウォルスは、神が——復讐するものと、復讐されるものとを、御自身のために用ひたまひ、或は多く罰を加ふるところに赦しを行ひたまうて、——ロジア・チリングウォルスの恐しい計畫のかはりに爲したまうた事態に對しては、ロジア・チリングウォルスは先づ滿更でもなかつたのだ。まあ言つて見れば、彼れには默示が與へられてゐたのだ。それが天の默示であつたにしても、或はどこか他の所から來たものであつたにしても、そんな事は彼れの目的には關係が無かつた。その默示の助力に依りて、彼れとデムスデール氏との今後の一切の關係に於ては、嘗に外面のみでなく、牧師の内面そのものが彼れの面前に暴露されたと思はれた。それがため彼れは牧師の心の働きを

一々見て理解することが出來た。其時から彼れは雷に見物人であつたゞけでなく、不幸な牧師の心といふ舞臺の立役となつた。彼れは自分の欲するがまゝに牧師を弄ぶことが出來た。苦惱の動悸で牧師を激動させやうと思へば、犧牲なる牧師は永久に惱み苦んだ。それは機關を支配する發動機を知るだけでいゝのであつた。そして醫者はよくそれを知つてゐた。不意の恐怖で彼れを吃驚させやうと思へば、魔術者の棒を振うて幽靈を起すやうに、恐しい幽靈が牧師の周圍に群がりつゝ、そして皆指で彼れの胸を指さしながら、死や、或はもつと恐しい耻辱のいろんな形をして、——無數の幽靈が起ち上つた。——恐しい幽靈が起ち上つた。

是等のことは皆水も洩らさず巧みに仕遂げられたので、牧師は絶えず自分の上に眼を離さずにゐる或何か惡の力をぼんやり知覺してはゐたけれども、その力の實際の本性を知ることが出來なかつた。ほんとに、彼れは疑と恐とを以て、——屢々戰慄と痛烈な憎惡の念を以てすら、——此の老醫の不具な姿をじつと見た。彼れの身振り、歩

き振り、半白の髯、いとつまらない無頓着な行爲でも、着物の樣子ですら、牧師の眼には厭やらしかつた。是れは牧師が自ら喜んで認めた反感よりも、もつと〳〵深い反感が胸に隱れてゐた確かな表徵であつた。デムスデール氏はかういつた不信任と憎惡とを起す理由をあげることが出來なかつたので、一つの病氣のある所の毒が、彼れの全心に傳染してゐるのだと思つて、一切の豫感をば何等他の原因のせいだとは思はなかつた。彼れはロジア・チリングウォルスに對して懷いてゐた惡感情のために自分を責めた。さういつた惡感情から引き出すべきであつた教訓を忽諸にして、全力を擧げて其惡感情を根絶しようとした。さりながら是を仕遂げることが出來ずに、彼れは主義の上から、此老人との親交の習慣をつゞけてゐたので、かくして此の復讐者が——如何に彼れは不幸な便りない人であり、又彼れの犧牲者よりももつとつまらないものであつたことよ——熱中した目的を仕遂げるために、不斷の好機會を與へた。

かくデムスデール師は身體の病に惱み、魂の暗黑な煩ひに苦められ、不倶戴天の仇

の陰謀にすつかり陷づてゐた間に、聖職に於ては、華々しい人氣を負うてゐた。彼れは實に其人氣をば大部分彼れの悲みに依つて得た。彼れの智的才能、道德知覺、感情を經驗し且それを傳へる力は、彼れの日々の生活の苛責と苦惱とのために、異常の活動狀態を呈した。彼れの人氣はまだ是からといふ所ではあつたが、偉いものも幾らかはあつたにしても、既に同輩の牧師等のより小さい名聲を隱してしまつた。彼等の中には、デムスデール氏の年齡よりも永い年月を費して、聖職に關する玄妙な學問を獲得した學者もあつた。それでさういつた人々は彼の若い兄弟よりももつと硬い、價値のある學問に深く熟達してゐたのも尤もである。心は彼れよりももつと硬い組織で、天性鋭い智慧がありながら、情は堅く、鐵のやうな、或は金剛石のやうな人々もあつた。さういつた性質がうまく敎理上の要素と善い加減にまぜられて、非常に尊敬すべき、効能のある、不愛想な、いろんな僧侶階級を構成する。又是より他の人々で、ほんとの聖父もゐた。さういつた人々は圖書堆裡に沒頭していやな仕事をしたり、氣永

な思想に耽つたりして精神を鍛へ、その上、靈界との靈交に依つて精神を靈化した。是等の聖なる人物に猶くつついて離れない死の衣を纏ひながらも、彼等の淸い生活は、殆ど靈界のうちに彼等を導きいれたのである。彼等に缺けてゐたものは、焰の舌となつて、ペンテコステの日にあの選ばれた弟子だちの上に降つた賜物だけであつた。あの焰の舌は外國の知らぬ言葉を話す力の表號ではなくして、全人類に向つて、心情の本來の言葉で話す力の表號のやうであつた。(徒二〇) 此聖父だちは、他の方面では極めて使徒らしかつたが、神が彼等の役目に對して爲したまふ最後の稀有な證明、即ち焰の舌が缺けてゐた。彼等が、一番つまらない、世の常の言葉と比喩とを以て、最高の眞理を言ひ表はさうと求めたにしても、――よしやそれを求めることを夢想したにしても、――それは駄目であつたらう。彼等の聲は、彼等が日頃住んでゐた高みから、遙かに、ぼんやり降つて來た。

確かに、デムスデール氏は多くの特性に依つて、生來此終りの人々の階級に屬して

ゐた。罪であるにしても、惱みであるにしても、兎に角、そのいづれかの重荷を負うてよろめく宿命を與へられた、其重荷のために、彼れの性行が妨げられなかつたら、彼れは聖と信仰といふ高山の絶頂へ攀ぢ登つたであらう。靈的性能の人なる彼れ、天使も耳を欹てゝ聞き且答へたであらうと思はれる聲をもつてゐた彼れ、その彼れは、この重荷のために最も低いものらと同一列になつてしまつた。しかしながら此重荷こそは罪ある人類同胞に對するごく深い同情を彼れに與へたのだ。その結果、彼れの心は人々の心と共鳴して、彼等の苦みをおのれの心に受納れ、そしておのれの苦みの鼓動をば悲しき說破する滔々潟々たる雄辯を以て、多くの他の心情の中に送つたのだ。最も屢々それは說破する力はあつたが、恐しくもあつた！人々はかくの如く彼等を動かした力を知らなかつた。彼等は此の青年牧師をば聖の奇蹟と思つた。彼等は彼れを神の智慧と叱責と愛との傳言を代述する者と想像した。彼等の眼には彼れが踏んだ土地すら、聖なるものとなつた。彼れの敎會の處女らは彼れのぐるりに蒼ざめた。彼等

は甚だしく宗敎的情緒に沁み込んだ愛情を全く宗敎心であると思つて、彼等の純白な胸の中で、彼等の愛をば、最も神の喜びたまふ所の献げものと考へ、神壇の前にうちつけに持つて來た程に愛の犧牲となつたのだ。彼れの敎會の老衰した人だちは、自分等が虛弱のために痩せはてゝゐるのに、デムスデール氏の身體も極めて弱つてゐるのを見て、デムスデール氏の方が自分等よりもさきに天國へ行くだらうと信じて、子供らに、自分らの死骸はあの若い牧師の聖なる墓に近く埋めよと命じた。そして其頃始終不幸なデムスデール氏が自分の墓のことを考へてゐた時、彼れは一つの呪はれたものがそこに葬られなくてはならないのだから、果して墓の上に草が生えるだらうかと自問した！

世人の此崇拜が彼れを苦めた惱みは思料することが出來ない。眞理をあがめ、萬物の生命の中の生命なる眞理の神質のない物をば、悉く、影の如く、全く價値のないものと思ふのが彼れの純眞な衝動であつた。さらば彼れは何であつたか。——實質か——

—或は影の中でも最もぼんやりした影か。彼れは自分の敎壇から有らん限りの聲を振りしぼつて、人々に自分の本性を憚からず語つてしまはうと切に望んだ。『あなた方が、此牧職の黑衣を纏うてゐるのを御覽になる、わたし、——聖壇に登り、蒼白い顏を天に向け、敢てあなた方のかはりにいと高き在さゝる所なき神との交はりをしてゐる、わたし、——わたしの每日の生活に於てあなた方はエノクの聖をお認めになる、わたし、——わたしの足痕はわたしの浮世の路にずつと光を殘してゐるので、それに依てわたしの後に來るべき順禮らが天國に導かれるのだと、あなた方が想像してゐられる、わたし、——あなた方のお子さんがたにバプテスマの手をおいた、わたし、——あなた方の臨終の御友人等の上に死別の祈をかすかにのべたわたしの、アーメンの聲がほのかに彼等が立退いた浮世から彼等に向つて響いた、あの聲を出したわたし、——あなた方の牧師であり、あなた方が甚だ尊敬と信任とを與へて下さるこのわたしは、全く腐敗したもの、僞なのであります。』と。

デムスデール氏は上のやうな言葉を話すまで、敎壇の階段を決して降りないつもりで、幾度となく、敎壇に入つたのである。幾度となく、彼れは咳拂をして、長い、深い、そして震へる息を吸うたのである。その呼吸が再び吐出される時には、彼れの魂の暗黑な秘密の荷を負うて出て來たのである。幾度となく、否、否、百たび以上も、——彼れは實際話したのである！しかし何う話したか？彼れは聽衆に向つて、自分は全く陋劣なものである、最も陋劣なものゝ、より陋劣な朋輩である、罪人の中で最も惡きものである、極めて厭ふべきものである、想像すべからざる程の不義なものである、そして自分の卑い身體が大能者の燃ゆる忿怒のために、聽衆の面前で乾からびてしまふのを聽衆が見ないのは、非常な不思議で、是れ程の不思議は他にないと語つてゐたのである。果して是よりも有りのまゝの話が有つたであらうか。人々は思はず知らず一齊に心を動かされて、椅子に立ち上り、彼れが汚した其敎壇から、彼れを引ずり落さなかつたであらうか。さうでは無かつたのだ、ほんとうに！彼等はそれを皆聞いた。